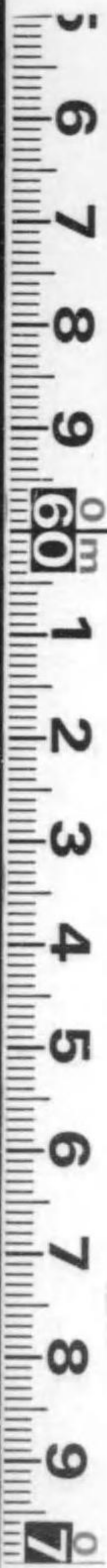


324

338



始



紹益禪師提唱
今津洪嶽講義

第三卷 (全三冊)

碧巖集講義

東京 無我山房藏版

大正
2. 10. 24
丙寅

碧巖集講義下卷目次

第七十一則 百丈問五峰.....一

第一節 本則.....一

第二節 本則提唱.....二

第三節 本則評唱和譯.....三

第四節 頌.....三

第五節 頌評唱和譯.....七

第七十二則 百丈問雲巖.....九

第一節 本則.....九

第二節 本則提唱.....一〇

第三節 本則評唱和譯.....一〇

第四節 頌.....一一

第五節 頌評唱和譯.....一五

第七十三則 馬師白黑.....一七

第一節 垂示.....一七

第二節 本則.....一九

第三節 本則提唱.....二四

第四節 本則評唱和譯.....二六

目次

第五節 頌.....三〇

第六節 評唱和譯.....三四

第七十四則 金牛飯桶.....三七

第一節 垂示.....三七

第二節 本則.....四〇

第三節 本則提唱.....四三

第四節 本則評唱和譯.....四四

第五節 頌.....四四

第六節 頌評唱和譯.....四九

第七十五則 烏白屈棒.....五一

第一節 垂示.....五一

第二節 本則.....五三

第三節 本則提唱.....五三

第四節 本則評唱和譯.....五三

第五節 頌.....五五

第六節 頌評唱和譯.....五七

第七十六則 丹霞問僧.....六一

第一節 垂示.....六一

第二節 本則.....七

第三節 本則提唱.....七

第四節 本則評唱和譯……………八四
 第五節 類則提唱……………八七
 其一 石頭剗草……………八七
 第六節 頌……………八七
 第七節 頌評唱和譯……………九二
第七十七則 超佛趙祖……………九五
 第一節 垂示……………九五
 第二節 本則……………九七
 第三節 本則提唱……………九六
 第四節 本則評唱和譯……………九六
 第五節 頌……………一〇一
 第六節 頌評唱和譯……………一〇三
 第七節 類則提唱……………一〇四
 其一 圓悟換骨……………一〇四
第七十八則 十六開式……………一〇七
 第一節 本則……………一〇七
 第二節 本則提唱……………一〇
 第三節 本則評唱和譯……………一一
 第四節 頌……………一四
 第五節 頌評唱和譯……………二七

第七十九則 一切聲佛聲……………一九
 第一節 垂示……………一九
 第二節 本則……………一九
 第三節 本則提唱和譯……………二四
 第四節 頌……………二六
 第五節 頌評唱和譯……………三〇
 第六節 類則提唱……………三三
 其一 如何是佛……………三三
 其二 如何是道……………三三
 其三 如何是禪……………三三
第八十則 趙州毯子……………三五
 第一節 本則……………三五
 第二節 本則提唱……………三六
 第三節 本則評唱和譯……………三七
 第四節 類則提唱……………四三
 其一 粥飯……………四三
 其二 菩薩定中……………四三
 第五節 頌……………四四
 第六節 頌評唱和譯……………四七
第八十一則 藥山平田……………四九

第一節 垂示……………一〇九
 第二節 本則……………一五
 第三節 本則提唱……………一五
 第四節 本則評唱和譯……………一五
 第五節 類則……………一五
 其一 石鞮弓……………一五
 第六節 頌……………一六
 第七節 頌評唱和譯……………一五
第八十二則 大龍色身……………一七
 第一節 垂示……………一七
 第二節 本則……………一六
 第三節 本則提唱……………一七
 第四節 本則評唱和譯……………一七
 第五節 頌……………一七
 第六節 頌評唱和譯……………一七
第八十三則 古佛露柱……………一八
 第一節 本則……………一八
 第二節 本則提唱……………一八
 第三節 本則評唱和譯……………一八
 第四節 頌……………一八

第五節 頌評唱和譯……………一九
第八十四則 不二法門……………一九
 第一節 垂示……………一九
 第二節 本則……………一九
 第三節 本則提唱……………一九
 第四節 本則評唱和譯……………一九
 第五節 頌……………一九
 第六節 頌評唱和譯……………一九
第八十五則 桐峰庵主……………二七
 第一節 垂示……………二七
 第二節 本則……………二七
 第三節 本則提唱……………二七
 第四節 本則評唱和譯……………二七
 第五節 類則提唱……………二七
 其一 德山臨濟門……………二七
 其二 德山棒臨濟喝……………二七
 第六節 頌……………二七
 第七節 頌評唱和譯……………二七
第八十六則 人人光明……………二九
 第一節 垂示……………二九

第二節 本則……………二四二

第三節 本則提唱……………二四四

第四節 本則評唱和譯……………二四九

第五節 頌……………二五三

第六節 頌評唱和譯……………二五三

第八十七則 藥病相治……………二五五

第一節 垂示……………二五五

第二節 本則……………二五九

第三節 本則提唱……………二六〇

第四節 本則評唱和譯……………二六一

第五節 類則提唱(其一)……………二六三

其一 善財採藥……………二六三

第六節 頌……………二六四

第七節 頌評唱和譯……………二六六

第八節 類則提唱(其二)……………二七〇

其二 芭蕉拄杖……………二七〇

第八十八則 三種病人……………二七一

第一節 垂示……………二七一

第二節 本則……………二七二

第三節 本則提唱……………二八〇

第四節 本則評唱和譯……………二八二

第五節 類則提唱……………二八四

其一 地藏三種病人……………二八四

第六節 頌……………二八五

第七節 頌評唱和譯……………二九二

第八十九則 雲岩問道吾……………二九五

第一節 垂示……………二九五

第二節 本則……………二九九

第三節 本則提唱……………三〇四

第四節 本則評唱和譯……………三〇六

第五節 類則提唱……………三〇八

其一 曹山水中月……………三〇八

第六節 頌……………三〇九

第七節 頌評唱和譯……………三一七

第九十則 智門般若……………三二三

第一節 垂示……………三二三

第二節 本則……………三三五

第三節 本則提唱……………三三八

第四節 本則評唱和譯……………三三九

第五節 頌……………三三一

第六節 頌評唱和譯……………三三四

第九十一則 犀牛扇子……………三三七

第一節 垂示……………三三七

第二節 本則……………三四〇

第三節 本則提唱……………三四八

第四節 本則評唱和譯……………三四八

第五節 頌……………三五〇

第六節 頌評唱和譯……………三五六

第九十二則 世尊陞座……………三五九

第一節 垂示……………三五九

第二節 本則……………三六一

第三節 本則提唱……………三六三

第四節 本則評唱和譯……………三六三

第五節 頌……………三六五

第六節 頌評唱和譯……………三六八

第七節 類則提唱……………三六九

其一 仙陀婆……………三六九

第九十三則 大光作舞……………三七二

第一節 本則……………三七二

第二節 本則提唱……………三七三

第三節 本則評唱和譯……………三七五

第四節 頌……………三七七

第五節 頌評唱和譯……………三八〇

第九十四則 吾不見……………三八三

第一節 垂示……………三八三

第二節 本則……………三八五

第三節 本則提唱……………三八九

第四節 本則評唱和譯……………三九〇

第五節 頌……………三九二

第六節 頌評唱和譯……………三九六

第九十五則 長慶二毒……………三九九

第一節 垂示……………三九九

第二節 本則……………四〇一

第三節 本則提唱……………四〇五

第四節 本則評唱和譯……………四〇七

第五節 頌……………四〇九

第六節 頌評唱和譯……………四一三

第九十六則 趙州三轉語……………四一五

第一節 本則……………四一五

第二節 本則提唱……………四一六

第三節 本則評唱和譯	四二七
第四節 第一轉語	四二七
其一 泥佛頌	四二七
其二 頌評唱和譯	四二三
其三 類則提唱	四二六
第五節 第二轉語	四三二
其一 金佛頌	四三二
其二 頌評唱和譯	四二五
其三 類則提唱	四二六
一 紫胡	四二六
二 紫胡捉賊	四二六
第六節 第三轉語	四二七
其一 木佛頌	四二七
其二 頌評唱和譯	四二二
其三 類則提唱	四二三
第九十七則 先世罪業	四二七
第一節 垂示	四二七
第二節 本則	四二九
第三節 本則提唱	四五一
第四節 本則評唱和譯	四五三
第五節 類則提唱(其一)	四九九
其一 四句偈	四九九
第六節 頌	四九九
第七節 頌評唱和譯	四九三
第八節 類則提唱(其二)	四九五
其二 洞山土地神	四九五
其三 南泉土地神	四六六
第九十八則 西院錯	四六九
第一節 垂示	四六九
第二節 本則	四七二
第三節 本則提唱	四七七
第四節 本則評唱和譯	四七九
第五節 類則提唱	四八四
其一 思明剃刀	四八四
其二 世尊拈華	四八五
第六節 頌	四八六
第七節 頌評唱和譯	四九一
第九十九則 十身調御	四九五
第一節 垂示	四九五
第二節 本則	四九六

第三節 本則提唱	五〇〇
第四節 本則評唱和譯	五〇一
第五節 頌	五〇七
第六節 頌評唱和譯	五二三
第一百則 巴陵吹毛劍	五二五
第一節 垂示	五二五
第二節 本則	五二七
第三節 本則提唱	五二八
第四節 本則評唱和譯	五二八
第五節 頌	五二
第六節 頌評唱和譯	五二六
第七節 類則提唱	五三〇
其一 心月孤圓	五三〇
其二 百則公案頌	五三〇
後序	五三三

碧巖集講義

三江紹益禪師提唱

洪嶽今津紹柱講義

第七十一則 百丈問五峰

第一節 本則

舉百丈復問五峰併却咽喉唇吻作麼生道阿呵阿箇。峰云和尚也須併却擡旗奪鼓一句。丈云無人處斫額望汝汝土曠人稀。

【讀方】百丈復た五峰に問ふ咽喉唇吻を併却して作麼生か道はん。阿呵阿。箇新羅を過ぐ。峰云く和尚也た須らく併却すべし。旗を擡ぎ鼓を奪ふ。一句裁流萬機奪削。丈云く人なき處に斫額して汝を望まん。土曠に人稀にして相逢ふ者少なし。

【字解】一。五峰。筠州五峰の常觀禪師は潯山靈祐禪師の法弟であつて同じく百丈大師の法を嗣いだ人である。二。阿呵阿。百丈和尚はまたしてもあのやうなことを云ふてをられると笑ふ。

第一節 本則 第二節 本則提唱

二

三。箭新羅を過ぐ。疾ふの音に濟んだ話であるから今更問ふた處で誰も落處を知るものはあるまいと云ふ。
 四。旗を擡ぎ鼓を奪ふ。これは五峰が和尚また須らく併却すべしと逆振をくはせた調子は全く瀉山と異曲同工であるけれど、瀉山の時は却つて請ふ和尚道へと幾分其の調子に寛和のところがあつた。然るに今の五峰の答話は百丈の言下に和尚黙れと怒鳴りつけた氣味で實に旗を擡ぎ鼓を奪ふの概がありて誠に痛快であると云ふ。
 五。一句截流萬機廢削。導師が人に向つて口を開かず物言ふて見るなど仰せらるゝ其の御口を先づお塞ぎめされよとつきこんだところはいかにも壁立萬仞でよりつきがたいと云ふ。
 六。人なきところに斫額して汝を望まん。斫額は額に手をかざして遠方をのぞく見る姿であるから、餘りに遠く萬里無人の境に走りすぎてしまつたぞと云ふのである。
 七。土曠く人稀にして相逢ふ者少なし。御相手を申しあげる然るべきものはありませんまいと云ふ。

第二節 本則提唱

百丈復問五峰併却咽喉唇吻作麼生道。下語云。挽釣搭索。

峰云和尚也須併却。下語云。還把鎗頭倒刺人來。一任跣跳。箭鋒相拄。

丈云無人處斫額望汝。下語云。一槌兩頭。截斷紅塵水一溪。

斫額しては眼を蓋ふて見へざるなり。見へぬ處が昏昏々の理なり。然る間本分も備つたぞ。底には句中もあるぞ。一槌兩頭。又無人の處と云ふは截斷ぞ。截斷紅塵水一溪ぞ。落去は五峰を褒美して云ふた理ぞ。前からの點は理がすまぬぞ。先師の批判に人の斫額して汝を望むに處なしと

讀んでこそ五峰を賞めたとはきこゆれとのことなり。古語に人の花を望むにところなしとあり。此の如きの點に讀みたらばよからんとなり。

第三節 本則評唱和譯

瀉山は封疆を把定し五峰は衆流を截斷す。這の些子は是れ箇の漢にして當面に提掇せんことを要す。馬前の相撲の如く擬議を容れず。直下に便ち用ひて緊迅危峭なり。瀉山の盤礴滔々地なるに似す。如今の禪和子只架下に向つて行つて他の一頭地を出づること能はず。所以に道ふ親切を得んと欲は、問を將ち來つて問ふこと莫れと。五峰の答處當頭に坐斷す。妨げず快俊なることを。百丈云く人なき處に斫額して汝を望ん。且らく道へ是れ他を肯ふか是れ他を肯はざるか。是れ殺か是れ活か。他の阿鞞々地なるを見て只他に一點を與ふ。雪竇の頰に云く。

【字解】一。緊迅危峭なり。五峰のキツとしまつたキビシイ機鋒は誠に孤危峻峻でよりつけようもないと云ふ。
 二。瀉山の盤礴滔々地なるに似す。瀉山の自由なノンビリした答話とは異なるところがあると云ふ。
 三。只架下に向つて行つて他の一頭地を出づること能はず。たなの下ばかりに頭腦をつきこんで居るものであるから、百丈本分の坐上に出頭することは出来ないと云ふ。

第四節 頌

和尚也併却己在言前了。龍蛇陣上看謀略須是金牙始解。七令三人長憶李將軍好手無多子。正馬單鎗。萬里天邊飛一鶚大衆見麼。且道落在什麼處也。打云飛過去也。

【讀方】和尚也併却すべし。已に言前に在り了る。衆流を截斷す。龍蛇陣上に謀略を見る。須らく是れ金牙にして始めて解すべし。七事隨身。慣戦の作家。人をしく長く李將軍を憶はしむ。好手多子なし。匹馬單鎗。千里萬里。千人萬人。萬里の天邊に一鶚を飛ばす。大衆見るや。且らく道へ什麼の處にか落在す。中れり。打つて云く飛び過ぎ去れり。

【字解】一。已に言前に在り。この和尚也併却すべしと云ふ一言の立ち場は未だ百丈和尚が何とも申されぬ以前の處に地歩を占めて居るぞと云ふのである。

二。衆流を截斷す。此の一語で以つて一切を截斷して萬事休することを得て太平無事の處を得たと重ねて稱讚する。

三。須らく是れ金牙にし始めて得べし。不二の抄に一本に基いて金牙の二字を金毛の獅子と改めるがよいと申してあるがそれもよろしい。又一説には金牙は武官の名であるとして勇士名將でなくんば出来ぬことと解してあるもこれが宜しからう。然し牙旗は將軍の精、金鼓は將軍の氣なりと申して金鼓牙旗は即ち金色の大鼓と本陣に打ちたてるところの錦の御旗と云ふ意味であるから云はば錦旗節刀と云ふ程のことである。此の意味で解釋するも面白からうと思ふ。

四。七事隨身。戰爭に必要な七つ道具を身につけて居るから。勇猛無雙なるは申すまでもないことであると云ふ。定めし辨度入道宜しくと云ふ體裁であつたことと思ふ。

五。慣戦の作家。幾度も幾度も戦場出入の名將であると重ねるの讃嘆である。此の言葉は定めし闇悟が大久保彦左衛門老から拜借されたものであらう。

六。好手多子なし。此の五峰の如き稱稱は李將軍の弓術と同じく古今にも多くは得難いと云ふのである。

七。匹馬單鎗。能事の將軍は七事を須いすして身に一疋の馬一柄の鎗を隨へて居る計りであると云ふから、彼の能書は筆を揮はずと云ふと同じ意味であらう。

八。千里萬里。斯かる名將は千里萬里何處を尋れたところで得られるものではないと云ふ。

九。千人萬人。實に五峰の如き勇將は千人萬人の中にも求め難いと飽くまでもの讃嘆である。

一〇。大衆見るや。どうぢや五峰の箭先きが見へますかなと門下を警醒する。

一一。且らく道へ什麼の處にか落在す。皆さんあの箭先きのみえますかな、今し方とんで居つた鶚が見へなくなつたがどこへ射落したものでありまじやうぞと公案の落着如何を參究せしめるのである。

一二。中れり。ソレ爰である。實に見事に射通されて居ると云ふ。

一三。打て云く飛び過ぎ去れり。ロシヤリと打つていや彼の箭先きは鶚と共に何處かへ飛び去つてしまふたと從上の痕跡を都べて打ち消してしまつたのである。

【講義】此の頌は五言一句七言三句で都合四句から出來て居る。和尚また併却すべし。例によつて和尚が黙りなさいと怒鳴りつけた五峰の答話をそのまゝに第一句に置いたのである。龍蛇陣上に略を見るが如し。これは五峰の衆流を截斷する活機は實に神出鬼没で自由自在なものであるとの讃嘆である。龍蛇の陣と云ふことは、孫子に善く兵を用ふるものは常山の蛇勢の如しとあつて、其の首を撃てば則ち尾至り。其の尾を撃てば則ち首至り。中心をうてば則ち首尾俱に至ると申してある。諸葛亮の八陣の圖には天と地と風と雲と飛龍と翔鳥と虎翼と蛇蟠とを八勢と云ふと

ありてこれが即常山の蛇の勢ひであると申してある。武備志にも東方は青龍の獸なり龍陣と曰ふ。西方は白虎の獸なり虎陣と曰ふ。南方は朱鳥の獸なり鳥陣と曰ふ。北方は玄武の獸なり蛇陣と曰ふと見へて居る。つまり軍の陣立ての方法である。今五峰が百丈大師の言下に一分の隙まもなく和尚お黙りなされと怒鳴りつけた様子と云ふものは、實に鬼神もかくやと思はる計りの猛勢である。人をして長く李將軍を憶はしむ。李將軍は即ち漢の李廣のことである。此の人は馬に騎ると、弓を射ることが達者で有つたから武帝から飛騎將軍と云ふ名を賜つた。嘗つて此の李廣が單子と云ふ夷敵に擒にせられて其の酋長の前へ引き出されたことがある。其の時李廣は多少手疵を負ふて居つた。虜等は李廣を馬と馬との間に寝かして置いて已に斬殺さうとした。此の時に李廣は目を閉ぢて死んだ態をして居たところ、丁度その傍らに一人の虜が善馬に騎つて居るのを見たので、スカサズ飛び起きて其の虜を突き落して自分がその馬に飛び乗り、剩つさへ其の虜の持つて居た弓矢までも奪つて一目散に駆け出してトゥ〜漢の本陣へ歸つて來たと云ふことが史記の李廣の傳に見えてある。雪竇はこの故事を思ひ出して謠ひ出したのである。萬里の天邊に一鶚を飛ばす。鶚は飛ぶことの疾い鳥である。字書には應鵠の屬なりと申してあるから、彼の鷹の一種であると思へる。彼の百丈和尚が咽喉唇吻を併却して作麼生か道へと拶着したのは、丁度萬里の天空茫茫として涯際なき處へ、左なきだにとぶことの早い鷹を一羽放つたやうなもので、到底こ

れを一矢に射とめることの出來うべきものではないのであるが。李將軍のやうな妙技を有する五峰なればこそ、能くもそれを一矢に射とめてさすがの飛鶚も羽翼を動かせることが出來なくなつたのであると飽く迄も五峰の作略を讚歎して衆流截斷の妙手腕を稱揚したものである。

第五節 頌評唱和譯

和尚も也た併却すべしと雪竇一句の中に於いて拶一拶して云く。龍蛇陣上に謀略を見る。兩軍を排して突出突入七縱八横。圓將底の手脚あり。大謀略底の人ありて疋馬單鎗にして龍蛇陣上に向つて出沒自在なるが如し。備作麼生か他を圍繞し得ん。若し是れ這箇の人にあらすんば争でか此くの如き謀略あることを知らん。雪竇の此の三頌皆裏頭に就いて狀出する底の語此くの如し。大いに李廣が神箭に似たり。萬里の天邊一鶚を飛ばす。一箭に一鶚を落すことは定めり更に放過せず。雪竇百丈の間處一鶚の如く五峰の答處一箭の如くに相似たることを頌す。山僧只管に五峰を讚歎して覺へず渾身泥水に入り了ることを。

【字解】一。兩軍を排して。排は排列の義であるから、兩軍互に陣立をはり備ふることである。
二。雪竇の此の三頌。馮山、五峰、雪竇の三頌を指したものである。

第七十二則 百丈問雲巖

第一節 本則

舉百丈又問雲巖併却咽喉唇吻作麼生道巖窟裏出來巖云和尚有也未粘皮着骨拖泥帶水丈云喪我兒孫得半前半後

【請方】百丈又雲巖に問ふ咽喉唇吻を併却して作麼生か道はん。巖窟裡より出て来る。什麼と道ふぞ。巖云く和尚有りや也た未しや。皮に粘し骨につく。拖泥帶水。前は村に構せず後は店に逃せず。丈云く我が兒孫を喪せん。灼然として此の答へ得て半前半後なるあり。

【字解】一。雲巖。潭州雲巖の曇巖禪師は初めに百丈和尚の室に入りて二十年間座右に侍せられたけれども大悟徹底と云ふ所に至らなかつたものであるから、百丈大師の遷化後は藥山の惟儼禪師の處へ往かれた。然るに藥山に二十年百丈に在つて習氣たも也た未だ除かずと叱られて、更に南泉普願禪師の處へ往かれたけれども、少しも其の所得がなかつたものであるから、再び藥山の處へ歸つて來て始めて大悟せられた。唐の會昌元年に世壽六十歳で以つて示寂せられ、無住大師と云ふ勅號を賜つた。門下には洞山大師と云ふ大偉人が居られる。
二。巖窟裡より出て来る。やどかりがノサバリ出したけれども到底疎なことは出来まいと冷かす。
三。什麼と道ふぞ。何れ活潑々地の答處は出来まい。
四。皮に粘し骨に着く。ニチャクチャとしてさつぱりともせぬと云ふ。

五。拖泥帶水。夕立雨に出遇ふた女乞食のやうであると罵り。
 六。前は村に構せず後は店に逃せず。如何にも煮へきらぬ申し分ちや。ハツキリと申されいと云ふ。
 七。灼然として此の答へ得て半前半後たるあり。百丈半分云へて半分云はれぬやうな。汝に向いて道ふことを辭せずと云ふを忘れられたのかと云ふ。

第二節 本則提唱

百丈又問、雲巖一併却咽喉唇吻作麼生道。下語云。挽釣搭索。
 巖云、和尚有也未。下語云。唯見雞頭利不知雞頭方。實頭人難得。
 和尚は左様にさせらるゝかと云ふた本分ばかりを心得へて句中を見はづしたぞ。

丈云、喪我兒孫。下語云。痛處下針錐。

機關を雲巖の心得ざる程に兒孫があるまじきぞと云ふなり。雲巖は曹洞宗なり。此古則などて洞家の用がしれたと云云。

第三節 本則評唱和譯

雲巖百丈に在つて二十年侍者と作る。後道吾と同じく藥山に至る。山問ふて云く、子百丈の會下に在つて箇の什麼のとなかなす。巖云く生死を透脱す。山云く還つて透脱すや也た未し

や。巖云く渠に生死無し。山云く三十年百丈に在つて習氣も也た未だ除かず。巖辭し去つて南泉に見みゆ。後復た藥山に歸つて方に契悟す。看よ他の古人二十年參究するに猶自ら半青半黄皮に粘し骨に着いて穎脱すること能はず。是は則ち也た是。只是れ前は村に構せず後は店に逃せず。道ふことを見ずや語窠臼を離れずんば焉ぞ能く蓋纏を出でん。白雲谷口に横たはつて幾人の源をか迷却す。洞下にそれを觸破と謂ふ。故に云ふ。躍開す山仗の鳳凰樓時の人當今の號に觸るゝことを嫌ふと。所以に道ふ荆棘林は須らく是れ透過して始めて得べし。若し透過せずんば終始廉纖に渡つて斬不斷ならん。適來道ふ前へ村に構せず後へ店に逃せず。雲巖只管に去つて他人底を點檢す。百丈他の此の如くなるを見て一時に把り來つて打殺し了れり。雪竇の頌に云く。

【中解】一。道吾。潭州道吾山の圓智禪師は雲巖禪師の法兄であつて同じく藥山惟嚴大師の法を嗣いだ方である。

二。半青半黄。菓物などの半ばは熟し半ばは熟せざる貌であるから、即ち半熟と云ふ程の意味である。

三。語窠臼を離れずんば焉ぞ能く蓋纏を出でん。何事でも四五の分別に涉ればハヤ人情に落在してしまふから、到底光

風霽月の風光に接せられるものでないのである。
 四。故に云ふ躍開す山仗の鳳凰樓。克符道者の兼中、到の頌に、龍旗排出して御街早し、躍開す山仗の鳳凰樓と申す句がある。爰はそれを引いて全く動かぬところを論じたのである。適來道ふ。これは本則下の著語を指したのである。

第四節 頌

和尚有也 未逐浪。和泥合水。金毛獅子不踞地。一。灼然。有甚麼。用處。可惜許。兩兩三三舊路。
行身吐氣。脚跟上踞過了也。二。大雄山下空彈指。痛。蒼天中更添怨苦。

【讀方】 和尚有りや也た未だしや 公案現成。隨波逐浪。和泥合水。金毛の獅子踞地せず 灼然。什麼の用處か有らん。可惜許。兩々三三舊路に行く 咽喉唇吻を併却して作麼生か道はん。身を轉じ氣を吐く。脚眼下に踞過了也。大雄山下空しく彈指す 一死更に再活せず。悲しむべし痛むべし。蒼天中に更に怨苦を添ふ。

【字解】 公案現成。イヤハヤ之れが雲巖大和尚のお悟りの當體でありますかと野次る。

二。隨波逐浪。これは雲巖が百丈大師の語句に捕へられてそれについて廻つて居る不見識さを冷かしたものである。

三。和泥合水。丸きり泥鼠のやうで如何にも見すばらしいから此の團悟などは見ても胸が悪いと云ふのである。

四。灼然。如何にも其の通りであると云ふ。

五。什麼の用處か有らん。どのやうに立派な獅子であつても跳躍の勢がなかつたならばソコラの猫にも劣つて居るぞと云ふ。

六。可惜許。惜しいことである。折角の金毛の獅子でありながら如何にしてか踞地し如何にしてか猛威を振ふと云ふ、

とを知らぬのは誠に惜しむべきことであると云ふ。

七。咽喉唇吻を併却して作麼生道はん。皆さん即今何んと申したものでありましやうと舊公案を新にして門下後學への抄問である。

八。身を轉じて氣を吐け。皆さんお互ひに決して人事とは思はずに各自に脚下を照顧して見なければなりませんぞ。

九。脚眼下に踞過了也。ソレ脚下ですりちがつたやうである。皆さんふり向いて見られよと警醒する。

一〇。一死更に再活せず。百丈が如何ほど彈指して警醒せられても殆んど死馬に鞭打つやうなもので到底蘇らすことは出来ないうと云ふ。

一一。悲しむべし痛むべし。實に残念なことである。

一二。蒼天中に更に怨苦を添ふ。今更何と云ふても所詮のないことであるが、このやうな残念なことは又とありませぬと云ふ。

【講義】 此の頌も前節の頌と全く同じ體裁である。和尚有りや也た未しや。例の如く雲巖の答話をそのまゝに第一句に置いて、金毛の獅子踞地せず。踞地はヒタリと地に踞つて得物を捕へるの貌である、虎でも獅子でも踞地して氣勢を添へなければ其の猛威を震ふことが出来ないといふのである。猫などでも鼠を捕へやうと云ふときには身をすくめてびたりと地にうづくまつて居る。あれが踞地であらう。雲巖もサスガ洞山大師の本師となられた人だけありて、後に第八十九則の處で見ると如何にも通身是れ手眼と言ふべき調子になつて居られるけれども、今の處では悲しい哉、折角の金毛の獅子でありながらまだ踞地することを知らないものであるからソコラの猫にも劣つて鼠一疋捕へることも出来ないやうである。兩々三々舊路に行く。然し雲巖和尚計りではない。人人何人と雖も金毛の獅子ならざるはないのであるに、悲しい哉如何にして踞地し、如何にして猛威を振はうと云ふことを知らぬものであるから、古今東西多くは皆之れ此の仲間に通ぎぬのである。大雄山下空しく指彈す。大雄山は即ち百丈のことで大智禪師の住んで居られた處で

ある。指彈は爪彈きすること、警覺の義と申して學人を警誡覺悟せしむるために爪はじくのである。この文に就て古來空しく指彈と云ふ三字を百丈につけて見る説と、雲巖につけて見る説との二説がある。初めの説によると、雲巖は百丈禪師の坐右に侍すること二十年間の久しいことであつたけれども、結局大悟徹底することが出来なかつたために、百丈大師は大いにそれを齒搔ゆがりて頻りに警覺せられたけれども鈍根の雲巖和尚遂に會することが出来なかつて切角の百丈の指彈も何等の功がなかつたから空しく指彈と云ふたものであると云ふのである。又の一説によると雲巖和尚は百丈大師の會下にありて寒暑二十年の久しき間此の事に苦心したけれども未だ玄旨を悟ることが出来なかつたものであるから。遂に悵然として彈指して山を下つたと云ふのであると云ふ。何れにしても百丈の二十年間は見たところ雲巖和尚にとりては何の所詮もなかつた様であるけれども、後に藥山大師の室に入つて一朝時節到來した上は立派に廓然として大悟せられ門下には洞山大師と云ふやうな大豪傑を得られた上から見ると、實に此の二十年間の辛苦が一時に立派な花を開いたもので、是の長の修行こそ實に後日の美はしき成功の基となつたものである。之れに依つても古人の如何にも道に忠實であつたことかわかり。益々忍耐精進の必要なることを感ずる次第である。

第五節 頌評唱和譯

和尚有りや也た未しや。雪竇歎によつて案に結す。是は則ち是。只是れ金毛の獅子爭奈せん踞地せざることを。獅子物を捉ふるに牙を藏し爪を伏して踞地返擲す。物大小となく皆以つて威を全うす。其の功を全うせんことを要す。雲巖云く。和尚有りや也た未しや。只是れ舊路上に向つて行く。所以に雪竇云く。百丈大雄山下に向つて空しく指彈すと。

第七十三則 馬師白黑

第一節 垂示

垂示云。夫說法者。無說無示。其聽法者。無聞無得。說既無說無示。爭如不說。聽既無聞無得。爭如不聽。而無說又無聽。却較些子。只如今諸人。聽下山僧在。這裏說。作麼生。免得此過。具透關眼者。試舉看。

【讀方】 夫れ說法とは無說無示なり。其れ聽法とは無聞無得なり。說既に無說無示争でか説かざるに如かん。聽既に無聞無得争でか聽かざるに如かん。而かも無說又無聽却つて些子に較れり。只如今諸人、山僧が這裏に在つて説くことを聞け。作麼生か此の過を免れ得ん。透關の眼を具するもの。試みに舉す看よ。

【講義】 夫れ說法といふは無說無示なり。維摩經の弟子品に、維摩が目連に謂ふた言葉として、夫れ說法と云ふは無說無示、其れ聽法と云ふは無聞無得なりと説いてある。それを羅什門下の四哲の一人なる僧肇法師が講釋して、無說と云ふは豈に言はざるを曰はんや。能く其の所説なきを謂ふ。無聞と云ふは豈に聽かざるを曰はんや。能く其所聞なきを謂ふ。其の所説無きが故に終日説いて未だ嘗つて説かず。其の所聞なきが故に終日聞いて未だ嘗つて聞かざるなり。示は謂く法を説

いて人に示す。得は謂く法を聞いて得る所なりと云はれてある。垂示の意味もそれに外ならぬので、第二第三の義門に下りて衆生濟度とか救済とか云ふ上に於てこそ説不説と云ふこともあり聴不聴と云ふこともあるなれ。第一義門乃ち本地の風光とか本來の面目とか云ふ處には除くべき迷もなければ、證すべき悟りもない。斷すべき煩惱もなければ、證すべき菩提もない。佛の凡夫のと云ふこともなければ、救ふの救はれるのと云ふこともない。従つて眞實法の上には説くべき法もなければ示すべき法もないのでありてそれが即ち無説無示の眞說法である。金剛經の中に、說法とは法の説くべきなき是れを說法と名づくと言いてあるは即ちその意である。然るに佛教に於ては誰れも知る通り三業說法と申すことがある。即ち口で言語名字を以て説き示すのが口業說法。身の行ひ所作を以て法を實現するのが身業說法。意に考へ思を運らして一切衆生に慈悲を蒙らせるのが意業說法。此の三業の說法によりて一切衆生をして迷ひを轉じて悟りを開かしめ三世の諸佛と全く同じ境界に至らしめんとする。之れが所謂の說法度生と申すことであるが、それは乃ち前にも申した通り本地の風光、本來の面目其の者の上より申したものではなくして、衆生と佛陀。迷ひと悟りと、宇宙の萬象を暫く二つに對立した上で申したもので、彼の暫く第二義門に降りて無言に言を起し無説に説を起すと云ふがこのことである。其聽法とは無聞無得。既に法が無説無示であるからして、おのづと其の聽法は無聞無得となる。即ち花は咲くがまゝに、鳥は

諸ふが儘に、紅葉は散るがまゝに、月は照るがまゝに、任運自在なるところが眞實の聞法であり眞實の得法でありて、彼の耳に聞き、眼に聞き、鼻に聞き、舌に聞き、乃至意識を以つて聞くのはハヤ第三に下つたもので、眞の聞法本統の得法と云ふことは出来ないものである、説既に無説無示争でか説かざるに如かん。聴既に無聞無得争でか聴かざるに如かん。説既に無説無示であり、聴既に無聞無得であつて見れば説と云ふも無要のこと、聴と云ふも餘計な言ひ分。所謂の維摩の默然たるには如かないのである。且つや而も無説又無聴却つて些子に較れり。然し其の無説と云ふも無聴と云ふも未だ充分本統のこと、飽くまで本分に契ふた言ひ分とは云はれないのであつて、只幾分眞實に近いと云ふに外ならぬのである。されば、只如今諸人山僧が這裏に在つて説くことを聴く。山僧の說法を說法として、其の聽法を聽法とするやうではありたならば、作麼生か此の過を免がれ得ん。眞實の法體に背むくの罪過。法の神聖を汚す所謂の謗法の大罪は到底免ることは出来ないのである。透關の眼を具する者試みに擧す看よ。さりながら此の法に一隻眼を具して居るものであつたならば、今擧せんとする本則の難關を透過して其の謗法の大罪過を免る、こと出来るからして、試みに擧す看よ。能く透關の眼を開いて參究して看よと結ぶ。

第一節 本則

舉。僧問馬大師。離四句。絕百非。請師直指某甲西來意。什麼處得道話頭。馬師云。我今日勞倦。不能爲汝說。問取知藏去。影不妨是道。老漢推過與別人。僧問知藏。也須與他一抄。藏云。何不問和尚。草裏無尾大蟲出來也。道什。僧云。和尚教來問。猶輕後箭深。藏云。我今日頭痛。不能爲汝說。問取海兄去。不妨是八。知藏一樣。患。僧問海兄。抱磁叫風。海云。我到這裏却不會。不用切切。從教千僧舉。似馬大師。道僧却有。馬師云。藏頭白。海頭黑。塞外將軍令。

【讀方】

僧馬大師に問ふ四句を離れ百非を絶して請ふ師某甲に西來意を直指し玉へ。什麼の處よりか這の語頭を得來る。那裏よりか這の消息を得たる。馬師云く我今日勞倦す汝がために説くこと能はず知

藏に問取し去れ。退身三步。躑躅するも也た知らず。身を藏して影を露はす。妨げず是れ這の老漢別人に推過し與ふるを。僧知藏に問ふ。也た須らく他に一抄を與ふべかりし。躑躅するも也た知らず。藏云く何んぞ和尚に問はざるを。草裡より無尾の大蟲出で來る。什麼と道ふぞ。直ちに得たり自繩自縛すること。去死十分。僧云く和尚教へ來つて問はしむ。入の處分をうく。前箭は猶は輕く後箭は深く。藏云く我今日頭痛す汝がために説くこと能はず海兄に問取し去れ。妨げず是れ八十四員の善知識一樣に這般の病痛を患ふることを。僧海兄に問ふ。別人に轉與す。磁を抱いて風を叫ぶ。海云く我這裡に到つて却つて不會。切々を用ゐず。さもあらばあれ千古萬古黑漫漫。僧馬大師に舉似す。這の僧却つて慧子の眼晴あり。馬師云く。藏頭は白く海頭は黒し。塞中は天子の勅塞外は

將軍の令。

【字解】一。四句を離れ百非を絶す。四句は單々俱非の四句で、例へば佛の有無と云ふことに就いて考ふれば、佛は有ると云へば、第一の有の句。佛は無いと云へば第二の無の句。或ひは有ることあり亦た無いことも在ると云ふのが第三の亦有亦無の句。又有でもなければ無でもないと云ふのが第四の非有非無の句と云ふので、總べて物を考へるには必ず此の範疇の中の何れかに相當するのである。佛教では何か一つの物を推考するに付いて此の四句の範疇に入れて分別することを四句分別と稱する。偈百非と云ふは、首楞嚴經の釋要鈔に、百非と云ふは起信の疏の中に一異有無の四句に約して一一の句に各々四あり。謂く一非一。亦一亦非一。非一非非一。異非異、亦異亦非異。非異非非異。餘の二句此れにならへ。四四十六句と成る。三世に約して四十八句と成る。又已起未起に約して各々四十八で九十六となる。更に根本の四句を加へて即ち一百と成るなりとあつて、つまり四句に各々互ひに四句を具するとすれば十六になり。其の十六を過去と現在と未來との三世に配當すれば四十八句になり。更にそれを已起と未起とに約して九十六となる。其れに根本の四句を加へて百非となすと云ふのでこれが普通のかぞへかたである。圭峯の宗密禪師の行願品記には百非は即ち非色非心乃至内外大小等なり。百とは通じてこれを言ふ定めて一二の數より百に滿つるに非すと云はれてある。之れも一説と見るが宜しい。

二。什麼の處よりか這の語頭を得來る。此の僧馬大師に四句百非を離れて祖師西來意を直指せよと抄しかけたが、己れ先づ四句百非をはなれて、どうして此のやうな問が發せられるぞと告めて、何處から習つて來たの。タツキリ受け賣り法門と見たわと云ふので。

- 三。那裏より這の消息を得來る。何處で聞き覺へたぞと告める。
- 四。退身三步。此の答話に預つては先づ退くより外にあるまい。
- 五。躑躅するも也た知らず。それ鼻さきですりちがった、直ちに禮拜感謝して大事了畢すべきでないかと云ふ。
- 六。身を藏して影をあらはす。今は勞倦と申されるが、實は四句を離れ百非を絶して西來意を指示せられたのである。そ

れ尻尾があらはれたと云ふ。

七。妨げず是れ道の老漢別人に推過し與ふることを。答話を他人に推し譲つて逃げたやうな言ひかたをした作略はサスガに老練なものであると讚嘆する。

八。知識。慶州四堂の知識禪師と申した方で百丈大師と同じく馬祖大師の法を嗣いだ人である。

九。也た須らく他に一擲を與ふるに。若しも此の僧が透關の作家であつたなれば馬大師が知識に問へと云ふた其の言下に一擲を與へて馬大師の舌頭を坐斷すべきであるに。それをナメ／＼と知識の處へ問ひに往くとは何事であらう。これが若しも天邊の月に問へとか或は門前の犬の糞にでも問へと云はれたならばどうするつもりであらう。千萬里の長空を凌いで月宮殿へ出かけて行くつもりであらうか。或は又門前の犬糞に向つて三拜九拜してお問ひ申上げるつもりであらうか。實に恐れ入つた名僧であると云ふ。

一〇。蹉過するも也た知らず。それが果して人に問ふて知れることであらうか。此のやうな僧ならば自分の鼻先きにすれちがつて居つても定めし心づかぬことであらうと云ふ。

一一。草裡より熊尾の大蟲出で来る。これは草莽々たる處からガサ／＼と猛虎がたけりくるつて飛び出してきたやうな答話であると讚嘆したものである。皆さん油断して咬み殺されてはなりません。熊尾の大蟲と云ふは虎の尻尾は火に焦げたやうな色をして居ると云ふので虎のことを申したものである。

一二。什麼と道ふぞ。皆さんこゝが聞き處であるから能く聞かればなりません。

一三。直に得たり自縛自縛することを。これは此の僧が至るところで自縛自縛して自由がきかなくなるのも全く自業自得であるから、誰れ怨まうやうもないことであると云ふのである。これと云ふも身分不相應な問題を呈出したものであるからのことであるから、お互ひに十分氣をつけねばなりません。

一四。去死十分。モウ十分に死に切つて居るから、とても蘇ることは出来まいと云ふのである。

一五。人の處分を受く。此の僧は少しも自家の見處がないものであるから人の指圖で彼方此方と走り廻つて居る。これでは犬糞に向つて禮拜すべしと云へば定めし禮拜するであらう。實に不見識な男であると云ふのである。

一六。前箭は猶ほかるく後箭は深し。前に馬大師の處でうけた疵は未だ淺けれども今度うけた疵は中々の大氣傷であると云ふのである。

一七。海兄に問取せよ。海兄は百丈懷海禪師即ち大智禪師のことである。知識と同じく馬大師門下の大英哲である。

一八。妨げず是れ八十四員の善知識一様に這般の病痛を患ふることを。馬大師の法を嗣いだ八十四名の善知識は皆悉く本師の印可を受けたのであるから定めて同じ遺傳病にかゝつて居るであらうと云ふのである。傳燈錄によると馬大師の門下には百三十九人の上足があつたと云ふことであるが爰には八十四員と見へてある。これも一本には七拾餘員とも又四拾餘員ともなつて居る。何れにしたところで人員の多寡には關係はないから、こんな穿索はどうでも宜しい。

一九。別人に轉與す。此の僧は何處へ往つても埒があかぬものであるから又候此處迄擔いで來たのである。

二〇。賊を抱いて風と叫ぶ。これは現に盗んで來た贓品を持つて居ながら我が盗んだのでないと言ふて居ると云ふことで即ち此の僧が自ら好んで耻を買つてあるく愚さを抑へたものである。

二一。切々を用いず。切々は憂ひの貌である。四の五のといらぬ詮索をしたり餘計な言葉を費やすなと云ふのである。

二二。從教あれ千古萬古黒漫漫々々。何時の世になつても到底此の不會の端的は分るものではない。それでこそ釋迦は不可思議と説き達磨は不識と云ひ百丈は不會と申されたのである。

二三。這の僧却つて些子の眼睛あり。さりながら此の僧が今一度馬大師の直指をうけやうとする志は如何にも感心なものであると。その道に忠實なる志をめでたのである。

二四。藏頭は白く海頭は黒し。然るに馬大師は更に此の僧に向つて知識の頭は白くて百丈の頭は黒いと申された。之れが即ち終局の判決である。皆さんどうです此の馬大師の判決文が讀めますか。烏の色は黒くて雪の色は白。柳は緑でありて

花は紅であると云ふ。思ふに是れは到底言語理論を以て此れの彼れのと分別すべきものではありませぬ。ゆはゆる無説の説さへも超越した以上の消息でありて四句百非位あゝの處ではない。全く手のくだしやうも齒のつけやうもない鐵丸であると思はれるのである。

二五。賽中くわんちゆうは天子の勅まこと外は將軍の令。さすがに天子には天子の詔勅があり將軍には將軍の號令があつて誰ありて違背することは出来ないやうに此の馬大師の判決に對しては佛祖天覺と雖も服従せぬわけには往かないのである。

第三節 本則提唱

僧問つ馬大師に離レ四句ヲ絶シ百非ヲ請フ師直ニ指セ某甲ニ西來意ヲ。下語云。問得レ可シ始得レ。

離ル四句ニは有、無、非無非有、非々有非々無の四をはなれ其の百非を絶して達磨西來意を指示し玉へと云ふ。先師の云く枯骨上ニ覓ル汁。

馬祖云。我今日勞倦不能ハズ爲ル汝說ク問ニ取シ知藏ヲ去レ。下語云。道老賊。

先師の下語に爛泥裏ニ有ル棘。

僧問ニ知藏ニ。下語云。車ハ不ニ橫ニ推サズ。

先師の下語に切忌ニ隨テ他去ト。

藏云。何不レ問ニ和尚ニ。下語云。提ヘ襟ヲ見レ肘。

先師の下語に子受ハ父業ヲ。

僧云。和尚教ヘ來ハシム問ニ。下語云。不レ妨ケ實頭ナリト。

あまりに機變なく正直なと云ふ心なり。先師の下語に云く惱亂春風卒ニ未ダ休ム。

藏云。我今日頭痛不能ハズ爲ル汝說ク問ニ取シ海兄去レ。下語云。子ハ續ク家業ヲ。真ハ獅子兒ハ好ク獅子吼ス。

知藏も馬祖下の僧ちやほどに馬大師と同じやうに云ふたは喩へば俗人が父の家業を續いて行くが如きぞ。先師の下語に眼ニ看テ東南ニ意ハ在ル西北ニ。

僧問ニ海兄。下語云。不レ妨ケ實頭ナリト。

さりとは知らずば問はいでちやほどに實頭なるも妨げざるぞとなり。先師の下語に躉過ス也ナリ不レ知ラ。

海云。我ハ到リ這ニ裡ニ却テ不レ會ス。下語云。同ク坑ニ無ク異ク土ナリ。

三人ともに同じ穴の狐ぞと云ふ心なり。先師の下語に上無ク攀テ仰テ下絶シ己躬ヲ。

僧舉ニ似ク馬ニ大師ニ。下語云。兩々三々ニ舊ク路ヲ行ク。死シ了シ多少ナリ。

此の僧が此處でも彼處でも終に生き／＼したことはないは死人同前よと云ふなり。先師の下語に戀ニ芳草ニ未ダ得レ休ム。

馬大師云、藏頭白、海頭黑。下語云、無孔鐵鎚重下。擲。

重ねて概を下すは權實なり。藏頭白しと云ふは明白の方即ち實なり。海頭は黒しと云ふは權ぞ句中の方なり。又。無孔鐵鎚當面擲。此句は常には擲つと云ふところを爲人に用ゆれども爰では擲つと云ふ處の勢を賊に用ひたぞ。藏頭白く海頭黒しとまつすぐに賊意を云ふて聞かせられた處を爲人にも取るなり。兩人を白賊黒賊と云ふて馬師の賊意が尙怖ろしい機ぢやぞ。本分の一劍をなげだして見せたらば盜人よりも怖ろしいことであらうするぞ。先師の沙汰に佛以來馬祖の時分まで賊意と云ふことはなければならず自然に賊意が備つたと云ふ義なり。臨濟よりこそ賊意は瀾淪したれ。されども碧巖の批判には臨濟未だ白拈賊にあらずと云ふぞ。師家が佛祖以來色々の手だてをして見するは畢竟爲人のためぞ。先師の下語に天上月明溪畔雲暗。

第四節 本則評唱和譯

這箇の公案山僧舊日成都に在りて眞覺に參す。覺の云く只馬祖の第一句を見ることを消せよ。自然に一時に理會し得んと。且らく道へ這の僧はれ會し來つて問ふか、會し來らずして問ふか。此の間妨げず深遠なることを。四句を離ると云ふは有と、無と、非有非無と、非有非非無となり。此の四句を離るれば其の百非を絶す。只管に道理をなさば話頭を識らず、頭腦を討ぬれども

見ず。若し是れ山僧ならば馬祖の道ひ了らんを待つて、便ちために坐具を展べて禮三拜して他の作麼生と道んを看ん。當時馬祖ならば若し這の僧來つて四句を離れ百非を絶して請ふ師某甲に西來意を直指せよと問んを見て、拄杖を以て劈脊に便ち捧して趕出して他の省するか省せざるかを看ん。馬大師只管に他のために葛藤を打す。以つて這の漢當面に蹉過して更に去つて知藏に問はしむるに至る。殊に知らず馬大師深く來風を辨ずることを。這の僧懷懂として走り去つて知藏に問ふ。藏云く、何ぞ和尚に問はざる。僧云く和尚教へ來つて問はしむ。看よ他這の些子拶着すれば便ち轉ず。更に閑暇の處なきことを。知藏云く我れ今日頭痛す。汝がために説得すること能はず。海兄に問取し去れ。此の僧又去つて海兄に問ふ。海兄云く我れ這裡に到つて却つて不會と。且らく道へ什麼としてか一人は頭痛と道ひ一人は不會と云ふ。畢竟作麼生。這の僧却つて回り來つて馬大師に舉似す。師云く藏頭は白く海頭は黒しと。若し解路を以つて卜度せば却つて之れを相瞞くと謂ふ。有る者は道ふ只是れ相推過すと。有る者は道ふ三箇總に他の問頭を識る。所以に答へずと。總に是れ拍盲地一時に古人醍醐の上味を將つて毒藥を看て許裏に在く。所以に馬祖道く汝が一口に西江の水を吸盡せんを待つて即ち汝に向つて道んと。此の公案と一般なり。若し藏頭は白く海頭は黒しと會得せば便ち西江水の話會せん。這の僧一擔の懷懂を將つて箇の不安樂に換へ得て更に他の三人の尊宿を勞して泥に入り水に入しむ。畢竟這の僧警地ならず。然もひと

へに恣麼なりと雖も這の三箇の宗師却つて箇の擔板漢に勘破せらる。如今の人只管に語言上に去つて活計をなして云ふ。白は是れ明頭合し黒は是れ暗頭合す。只管に鑽研計較す。殊に知らず古人一句に意根を截斷することを。須らく是れ正脈裏に向つて自ら見て始めて穩當なることを得べし。所以に道ふ最後の一句始めて牢關に到る。要津を把斷して凡聖を通せず。若し此の事を論せば當門に一口の劍を按ずるが如くに相似たり。擬議せば即ち喪身失命せん。又道く譬へば劍を擲つて空に揮が如し。及と不及とを論すること莫れと。但八面玲瓏の處に向つて會取せよ。見すや古人道く這の漆桶。或は云く野狐精。或は云く瞎漢と。且らく道へ一捧一喝と是れ同か是れ別か。若し知らば千差萬別。只是れ一般なり。自然に八面に敵を受けん。藏頭は白く海頭は黒しと云ふを會せんと要すや。五祖先師道く封戸先生と。雪竇の頌に云く。

【字釋】一。成都に在つて眞覺に參す。成都は蜀の都で眞覺は即ち黃龍慧南の法を嗣いだ蜀州黃樂の眞覺惟勝禪師のことである。馬祖の第一句と云へば我れ今日勞倦汝がために説くこと能はずの一句で、老僧は今日大きに疲れて居て貴様に説いて聞かせることが出来ぬからあの知識に問ふが好いぞと言はれたのである。垂示に無説無示の説法と云ふがこのことで吾々が若しも此の無説の説法をさへ了解することが出来たならば知識の頭痛も百丈の不會も自然に瓦解氷消し、又馬大師の藏頭白海頭の謂れも自ら會得することが出来よう云ふのである。

二。這の僧憐愍として走り去つて知識に問ふ。五祖の法演禪師が此の話を拈して、馬大師憐愍を着くる處なし。只箇の藏頭は白く海頭は黒しと道ひ得たり。この僧一擔の憐愍を擔いで一箇の不會を換へ得たり。若し也た眼流星に似たらば多少

の人失錯遺罪せんと云はれてある。若しも此の僧が既に透關の眼を具したる無聞無得の人でありたらば馬大師の言下に直ちに禮拜感謝して大事了畢すべきであつたであらうに、不幸にして其の手段をとることが出来なかつたのは返すもも残念なことである。

- 三。且らく道へ什麼としてか一人は頭痛と道ひ一人は不會と云ふ。馬大師の勞倦も西堂知識の頭痛も、百丈禪師の不會も何れも飄々落落々四句百非を離れたる西來意を直指せられたものである。親は勞倦したと云ひ、子は頭痛がすると云ふ。親は子に問へと云ひ、弟は兄に問へと云ふ。親子同徹一様に無説無示の説法を試みられたのである。
- 四。相瞞すと云ふ。馬大師は人を馬鹿にせられたと云ふ。
- 五。三箇總に他の問頭を識る。馬大師も知識禪師も百丈大師も皆一僧の習ひ法門を知つて居られるものであるから、直ちに本分を直指して答へられたものと邪解するものもある。
- 六。總に是れ拍盲地云云。誰も彼れも皆手扣きめくらの分際であるから、醒醐味のやうな結構な古人の語頭公案までも口先き學者や書物の蟲どもは自分と自分に怖るべき毒藥にして仕舞ふは實に慨嘆に堪へない次第であると云ふ。
- 七。這の僧一擔の憐愍をもつて云云。此の僧が馬祖大師知識禪師へと順次に擔きまはつて三尊宿の靜定を汚して色々と親切極まる提撕をうけたけれども切角の寶玉も猫に小判で眞に勿體ないことである。さりながら此の三老漢の大慈悲は身を粉にし骨をくだきても尙酬ひ難き高恩であるぞと云ふ。
- 八。箇の擔板漢に勘破せらる。這僧は生意氣にも三大老に問端をもちかけて色々と三大老に迷惑をかけたけれども、結局却つて勘破せられてしまつたと云ふ。
- 九。所以に道ふ最後の一句云云。夾山善會禪師の法を嗣いだ洛浦元安禪師の語である。當門に一口の劍を按ずるが如くに相似たり。眉間に劍をさしはさんだ勢ひは實に寄りつくべからざる概があると云ふ。
- 一〇。古人道く。盤山寶積禪師の上堂の語である。これは圓悟大師が後に修道の用心を示さんかための老練心切で引

用せられたものである。

一一。封后先生。帝王世紀に、黄帝大風天下を吹いて塵垢皆去ると夢む。復人の千鈞の弩を執つて羊數萬群をかると夢む。帝嘆じて云く風は天の號令なり。垢の土を去れば后あるなり。豈に風を姓とするものあらざらんや。千鈞の弩は力をつくし遠きを能くす。羊萬群をかるは民を牧しと善をなす。豈に刀を姓として牧を名とするもの有らざらんやと。乃ち風后を海隅に力牧を大澤に得たりと見へ。又通鑑には黄帝、風后、力牧、太山、稽常、先大、鴻得の六相をあげ天地治り神明至ると見へて居る。爰の封后先生と云ふ封は封風と音通で風后と云ふと同じことである。善く兵法を談じて用ひすと云ふ方語であるから即ち思慮分別を絶し、人情計度を入れない四句百非を絶した鐵圍子を意味するのである。

第五節 頌

藏頭、白、海、頭、黑、一手合半開、一手握、明眼、衲僧、會不得、却爾鼻孔、山僧、故是、口似、馬、馬、駒、踏、殺、天、下、人、漢始得、放出、道、老、漢、臨濟、未是、白、拈、賊、手也、被、人、捉、了、也、離、四、句、一、絕、百、非、檢、看、阿、爺、似、阿、爹、天、上、人、間、唯、我、知、用、我、作、什、麼、奪、却、拄、杖、子、或、若、無、人、無、我、無、得、無、失、將、什、麼、知、麼

【讀方】藏頭は白く海頭は黒し 半合半開 一手は擡げ一手は握り 金聲玉振 明眼の衲僧も會不得 更に行脚せよ三十年 終に是れ人に爾が鼻孔を穿却せられん 山僧故に是れ口區擔に似たり 馬駒踏殺す天下の人 叢林の中また須らく是れ道の老漢にして始めて得べし 道の老漢を放出す 臨濟も未だ是れ白拈賊にあらず 癩兒伴

を牽く。たとひ好手も也た人に捉へ了らる。四句を離れ百非を絶す。什麼と道ふぞ。也た須らく是れ自から點檢して看るべし。阿爺は阿爹に似たり。天上人間唯我知る。我を用ひて什麼かなさん。拄杖子を奪却せん。或は若し人もなく我もなく得もなく失もなくんば什麼を將てか知らん。

【中解】一。半開半合。白とも黒ともどつちもつかぬ云ひ分であると云ふ。之れが四句を離れ百非を絶したる姿である。

二。一手は擡げ一手は握む。馬大師が知藏と懷海とを兩手に携へて知藏を擡げたでもなく百丈を抑へたでもない。知藏も百丈も各自獨尊で鶴の脚は長いがまゝ鴨の脚は短いがまゝである。

三。金聲玉振。實に前代未聞の答話でありて眞に出格の響があると云ふ。

四。更に行脚せよ三十年。其の會不得の道理を會得しやうと思ふたならば更に三十年の參究を経なければならぬ。

五。終に是れ爾が鼻孔を穿却せられん。何程鐵の草鞋をはいて外に求めまはつたところで所詮會得の出来るものでないから先づ人人各自に脚跟下を照顧しなければならぬ。

六。山僧故に是れ口區擔に似たり。山僧も爰に至つては一言の口のきいて見やうもないが、何人もそうであらうと思ふと云ふ。

七。叢林の中また須らく是れ道の老漢にして始めて得べし。天下の叢林廣しと雖も馬大師の如き活機は又と得られまいと云ふのである。

八。道の老漢を放出す。雪竇禪師の此の一句が馬大師を其の儘こゝへ突き出したやうであると云ふ。

九。癩兒伴を牽く。雪竇禪師は馬大師の引き合せて臨濟大師までも拜招して來られたが、馬大師と臨濟大師とは誠に好い癩病人の道連れであると云ふ。

- 一〇。直饒好手も也た人に捉へ了らる。臨濟も雪竇に逢つては一段と男ぶりをさげたと云ふのである。
- 一一。什麼と道ふぞ。四句だの百非だのと佛法臭いことを申されぬ方が宜しいと云ふ。
- 一二。也た須らく是れ自から點檢して看るべし。これは人人自己を捏つて見たならば暖い寒いは自ら知れようと云ふのである。
- 一三。阿爺は阿爹に似たり。花は自ら紅にして花の如く鳥は自らとんで鳥の如し。これが四句を離れ百非を絶したる諸法實相の當體である。
- 一四。我を用ひて什麼か作さん。雪竇は唯我れ知ると云はれるけれども其の我れと云ふものに什麼の用があるのであらうと云ふ。
- 一五。拄杖子を奪却せん。雪竇は天上人間唯我れ知ると云ふやうなことに住着して居るやうなことでありたならば、拄杖子を携へて人の師匠らしい顔をして居る資格はないによりて、いでや其の免狀を取り上げて呉れましようかと云ふ。
- 一六。或は若し人もなく我もなく得もなく失もなくんば什麼を將つてか知らん。既に人なく我なく得なく失なき妙境界であるのに何の我れとか知るとか云ふ沙汰があらうぞと益々本地の風光をあらはしたのである。

【講義】 此の一頌は初めの一句が六言、次の四句が七言、次が六言一句で結句は七言句の六句でありて一種變態の偈頌である。先づ初めに例の如く本則の眼目を抜き上げて來て、藏頭は白く海頭は黒し。知藏の頭は眞白で百丈の頭は眞黒である。雪は白くて鳥は黒い。山は高く水は長い。柳は緑で花は紅であると謠ひ出した。此れは到底理論言詮を以て彼れの此れのと分別すべきではない。即ち謂ゆる無説の説をも超過した以上の消息であるから、況して四句の百非の離れるの絶するのと云ふ沙汰の限りではないのである。明眼の衲僧も會不得。既に此の藏頭白海頭黒の

一句は全く會不會を超絶した消息であるからして、如何なる明眼の作家と雖も會することは出来ないのである。馬駒踏殺す天下の人。馬駒と云ふは即ち馬大師のことである。馬大師を馬駒と稱する因縁は傳燈録を始め是の次の評唱にも見へて居る。馬大師の法祖父に當る六祖曹溪の慧能大師が、曾つて馬大師の父に當る南嶽の懷讓禪師に向つて、向後佛法汝が邊より去らん。已後一馬駒を出して天下の人を踏殺せんと豫言せられたことがある。然るに事實は果してその通りであつた。漢州什仿の人で姓は馬氏なる人があつた。其の容貌は誠に奇異であつて傳には牛の如くに行き虎の如くに視る舌をのぶるに鼻を過ぐと見へて居る。幼ない時分から神童の譽があつたが後に出家して衡嶽の傳法院に入り南嶽大師の室に參した。九人の同參の士の内唯一人師匠の印記を受けて能く祖風を宣揚し其の門弟子は一百三十有九人の多きに達して禪の一宗は之れより益々盛になりた。その人が即ち馬祖山の道一禪師である。踏殺す天下の人。これは此の馬大師が藏頭白海頭黒の一句を以つて天下古今の人天魔佛を一時に踏殺してしまはれたと云ふのである。臨濟も未だ是れ白拈賊にあらず。白拈賊と云ふは俗に云ふ晝トンビのことで即ち眞晝中に平氣で人のものを盗んであるく晝盜賊のことである。臨濟大師を白拈賊と罵つたのは雪峰和尚が始まりである。曾つて雪峰山の義存大師が、彼の有名なる無位眞人の話則すなはち汝等諸人肉團心上に一無位の眞人ありと云ふ話を聞いて、臨濟大ひに白拈賊に似たりと讚嘆せられたと云ふことがある。そ

れに就いて雪竇禪師は成るほど雪峰大師の申される通り如何にも臨濟大師は白拈賊には相違なからうけれども、さりながら、此の馬大師が一句下に天下人を踏殺する活機に比べて見ては、とても臨濟は未だ白拈賊の本職とは申されない。此の馬大師こそ眞の白拈賊であるとの飽く迄もの讚嘆である。四句を離れ百非を絶す。此れは彼の僧の問話を擧げたものである。四句百非のことは既に前節に申して置いたから照し合せて見るが宜しい。天上人間唯我れ知る決して他人に問ねて知るべきことでない。四句を絶し百非を超越したその無説の説の當體は只冷暖自知と、吾れ人お互ひに己が舌で自ら嘗めて見て味ひ知るより外はないのである。

第六節 評唱和譯

藏頭は白く海頭は黒し。且らく道へ意作麼生。這の些子天下の衲僧も跳不出。看よ他の雪竇後面に合殺し得て好きことを。道くたとひ是れ明眼の衲僧も也た會不得。這箇些子の消息之れを神仙の秘訣父子不傳と謂ふ。釋迦老子一代時教を説く。末後單傳の心印喚んで金剛王寶劔と作し喚んで正位と作す。恁麼の葛藤早く是れ事已むことを獲ずして古人は些子の鋒鏘を露す。若し是れ透不得ならば從前悟人の處なくして轉た説かば轉た遠からん。馬駒踏殺す天下の人。西天の般若多羅達磨を識して云く、震旦濁しと雖も別路なし。兒孫の脚下を假つて行んことを要す。金鷄

一粒粟を銜むことを解して、十方の羅漢僧を供養す。又六祖讓和尚に謂つて曰く、向後佛法汝が邊より去らん。已後一馬駒を出して天下の人を踏殺せんと。厥の後江西の法嗣天下に布く。時に馬祖と號す。達磨六祖皆先づ馬祖を識す。看よ他の作略果然として別なることを。只道ふ藏頭は白く海頭は黒しと。便ち天下人を踏殺する處を見る。只這の一句黑白の話、千人萬人咬不破。臨濟未だ是れ白拈賊にあらず。臨濟一日衆に示して云く、赤肉團上に一無位の眞人あり。常に汝等諸人の面門に向つて出入す。未だ證據せざるものは看よ看よと。時に僧あり出で、問ふ。如何なるか是れ無位の眞人。臨濟禪牀を下つて擲住して云く。道へ道へ。僧語なし。濟托開して云く、無位の眞人は是れ什麼の乾屎橛ぞと。雪峰後に聞いて云ふ、臨濟大いに白拈賊に似たり。雪竇他の臨濟と相見せんことを要す。馬祖の機鋒をみるに尤も臨濟に過ぎたり。此れ正さに是れ白拈賊。臨濟は未だ是れ白拈賊にあらず。雪竇一時に穿却し了れり。却つて這の僧を頌して道ふ。四句を離れ百非を絶す。天上人間唯我れ知る。且らく鬼窟裡に向つて活計をなすこと莫れ。古人云く問は答處に在り答は問處に在りと。早く是れ奇特なり。備作麼生が離れ得、百非を絶し得ん。雪竇道く此の事唯我れ能く知ると。直饒ひ三世の諸佛も又た覩不見。既に是れ獨自ら箇れ知る。諸人更に上來して箇の什麼をか求めん。大瀉の眞如拈して云く、這の僧恁麼に問ひ馬祖恁麼に答ふ。四句を離れ百非を絶す。知藏海兄都べて知らず。會せんと要すや、道ふことを見ずや、馬駒踏殺

す天下の人。

【字解】一。神仙の秘訣父子不傳。この一事だけは天覺佛祖と雖も窺ひ知るに由なく、親子兄弟にも傳へることの出来ないものであると云ふ。

二。金剛王寶劍。臨濟衆に謂つて曰く、有る時の一唱は金剛王寶劍の如く云云。

三。金鷄一粒粟を銜むことを解して云云。南嶽の懷讓禪師は金州の人であるから金の字を用ひ、鷄は時を知つて鳴いて未寝をさますものであるから禪師の言が戯をなしたことを金鷄と云ふのである。羅漢は梵語で茲に應供と翻する。それを馬大師が漢州の什坊縣に生れて南嶽の法食の供をうけられたことに比況したものである。

四。大瀉の眞如拈して云く。これは眞如菴結禪師が、四句をはなれ百非を絶した當體は全く無說無示でありて決して人情を以つてしては會得することの出来ないものであると申されたのである。

第七十四則 金牛飯桶

第一節 垂示

垂示云。鏝鉚横。按。鋒前。翦。斷。葛藤窠。明鏡高懸。句中引出。毘盧印。田地穩密。處。着衣喫飯。神通遊戲。處。如何。溲泊。還委。悉麼。看取下文。

【讀方】鏝鉚横に按じて鋒前に葛藤窠を翦斷す。明鏡高く懸つて句中に毘盧印を引出す。田地穩密の處、著衣喫飯。神通遊戲の處如何が溲泊せん。還つて委悉すや。下文を看取せよ。

【字解】一。鏝鉚を横に案じて。日本では正宗の寶劍と云へば銳利なる劍の代表であるが、支那では直ちに干將莫耶と云ふ。即ち銳利なる寶劍と云ふことの代名詞である。

二。毘盧の印。毘盧具さに云へば毘盧舍那で、茲に遍一切處と翻譯をする。止觀輔行には、毘盧遮那此には徧一切處と云ふ煩惱の體淨く衆德悉く備り身上相稱いて一切處に徧すと釋し、賢首大師の探玄記には、盧舍那とは古來の譯には或は三業滿と云ひ或は淨滿と云ひ或は廣博。嚴淨と云ふ。今更に梵本を勘るに具には毘盧遮那と言ふ。盧舍那は此には翻して光明照と名づく。毘は此には遍と云ふ是れ光明遍照と云ふなりと釋してある。つまり無限の空間に充ちふさがつて居ると云ふことである。それに人格的に尊稱をつけて大日如來と云ひ、又は久遠實成の釋迦牟尼佛と云ひ、法性法身の阿彌陀如來と云ひ、盡十方無碍光如來と云ひ、南無不可思議光如來と云ひ、無量壽如來と云ふ。孔子が上帝又は上天と名けられ、基督教の人がゴッドとかエホバとか云ふも其の光明即ち其の働きを色々の方面から見ても名けたものであらう。印と云ふは印可とか印信とか又は印證とかと熟して即ち印可證明の義であるから、事を確かに證據だてることである。佛印と云ひ心印と云

ふも皆其の本意を確かに證明する意味である。今は毘盧の印と云ふのであるから、毘盧舎如來の本意を確かに證明することである。

【讀方】此の垂示は、宗師家の機鋒甚だ峻峻であつて、人ふるれば人を斬り、馬ふるれば馬を斬ると云ふ、四方八面千手千眼の銳利敏捷なる勢を以て參學入室の徒を接化する様子を述べたものである。鑊鉏を横に按じて鋒前に葛藤窟を剪斷す。これは他のために妄想妄念の葛藤を破する利他の方便を明す一段である。葛藤と云ふは葛も藤も蔓草の類で他の樹木に纏ひついて繁茂生長するものであるから、それが爲に肝心の根幹を枯らすことになる。その葛藤へ今は更に窟と云ふ字がつけてあるから即ち葛藤の穴と云ふので、此の穴は一度陥り込んだならば中々のがれ出ることが困難であつて出やうとすればする程愈々深くはまりこむで永久出ることが出来ないこと云ふ實に役介至極なものである。佛道修行に於ても其の通りである、ヤレ法門ちやヤレ教相ちやと云ふ知解分別の窟窟に陥入ると云ふと佛ちや法ちや禪ちや悟ちや念佛ちや題目ちやといかにも深かはまりして未來永劫浮ぶ瀬がなくなつてしまふ。この病が即ち禪病であり念佛病であり題目病でありて、これ等は皆一種の細菌があつて、それが病源になりて色々と人を苦めるのであると云ふことである。ところで今本分の禪僧と云ふ大國手が其の大病人のために鑊鉏の名劍を揮つて外科的大療治を加ふることになると、一及兩斷と申して、忽ちに其の病源たる葛藤窟をフ

ツツリと剪斷してたゞの一言下に豁然として本地の風光本來の面目に接せしめて全くの健康體にもどしてしまふ。それ故に此の國手をば大醫王と名けるのである。明鏡高く懸けて句中に毘盧印を引出す。明鏡と云ふは宗師家たる人の自己の見地の明白なる姿を申したものである。乃ち彼の宗師家が「大圓鏡智」と名くるところの極めて明淨なる慧眼を以つて一切萬象を照見するとなると、彼の高く懸けたる明鏡が、漢來れば漢現じ胡來れば胡現じ、美人が映れば美人のまゝに、醜婦が映れば醜婦のまゝに、花が映れば花のまゝに、紅葉がうつれば紅葉のまゝに、日月星辰山河大地。森羅萬象悉く方寸の鏡面に入れて細となく大となく少しも漏すことがないやうでありて歴々分明に宇宙萬象を諦觀洞視するのである。それ故にこう云ふ作家の禪僧になると一言半句の中にも能く十方法界の一切諸法を悉く道盡して、微妙不可思議の大光明を放ち普く十方世界を照すことが出来る。これを盡十方無碍光如來と名け大日法身の毘盧舎那如來と名けて吾々お互ひが常に隨喜渴仰して居るのである。さりながら、此の尊い如來さま此の有り難い佛様も何もそう吾れ人お互ひと隔絶して居るのではない。此の吾々お互ひの本心本心も皆悉くその大作用を具足して居るのであるから、大菩提心と申して一大奮發心を起して實地に修行だにすれば間違ひなく此の大作用を實現しうるのである。田地穩密の處に着衣喫飯す。田地は人人各自の本分の立場即ち泰平無事の自家安穩處である。既に自己の本心本性の法用を悉く受用享樂することが出来るやうになつたなれ

ば寒い時には衣を着。飢い時には喫茶喫飯すると、自由自在思ひの儘に法樂を受用する。それを自受法樂と云ふのである。神通遊戯のところ如何か湊泊せん。その自受法樂底の人が世に處し人に接する手段方法は實に神出鬼没で真に測るべからざるものがありて、尋常容易なことでは中々寄り附くことは出来ないのである。還つて委悉すや。皆さん。どうですそこを能く合點することが出来ますかな。もし出来なければ此の公案を參究して看よと云ふので下文を取らせよと結んだ。

第二節 本則

擧金牛和尚 毎至齋時。自將飯桶於僧堂前作舞。呵呵大笑云。菩薩子喫飯來。竿頭絲線從君弄。不犯清波意自殊。醍醐毒藥一雪竇云。雖然如此。金牛不三好。心一說是賊。識賊是精。識精是非人。僧問。長慶。古人道。菩薩子喫飯來。意旨如何。妨不疑者。元來不知。慶云。大似因齋慶。讀相席打令。處。長慶道什麼。落慶云。大似因齋慶。讀相席打令。據款結案。

【講方】 金牛和尚齋時に至る毎に自ら飯桶を將つて僧堂前に於いて舞を作し呵呵大笑して云く菩薩子喫飯し來れ。竿頭の絲線君が弄するにまかす意おのづから殊なり。醍醐毒藥一時に行す。是なることは則ち是なり。七珍八寶一時に羅列す。手合せ相違ふもの少なし。雪竇云く然も此の如くなりと雖も金牛好心ならず。これ賊は賊を識る是れ精は精を識る。來つて是非を説く者は便ち是れ是非の人。僧あり長慶に問ふ古人いはく菩薩

子喫飯し來れと意旨如何。妨げず疑着することを。元來落處を知らず。長慶は什麼とか道はん。慶云く大ひに齋に因つて慶讚するに似たり。席を相して令を打す。款に據つて案に結す。

【字解】 一。金牛和尚。馬大師の法を嗣いだ人であつて鎮州の人である。齋時に至る毎に自ら飯桶を將つて僧堂前に於いて舞を作し呵呵大笑す。傳燈錄の本傳によると金牛和尚自ら飯を作りて衆僧を供養すと見へて居る。これは此の金牛和尚は自分の弟子たる衆僧のために人手にかけずに自分自ら飯を炊いで、齋時即ち日中の御飯時になると云ふと、其の飯櫃をもつて衆僧が修行をして居る僧堂の前へ往つて舞をなして呵呵大笑するで坊主ハチマキでもして踊りをおどりて愉快そうにケラケラ笑つて、そうして大聲を出して菩薩子喫飯し來れサリ。菩薩たち御飯を召し上げたと告報せられた。これが一度や二度のことではないので二十年の長の間毎日必ず實行せられたと云ふことである。皆さんこれは一體何のためでありましよう。勿論叢林の都べての規則（清規と云ふ）は此の人の法見たる百丈山の大智禪師が始めて定められたのでありますから、此の時には未だ食時の作法などは確定して居なかつたには相違ないけれども、さりながら何れ澤山の僧が集まつて居つたのであるから、鐘をつくとか、太鼓を鳴らすとか或は拍子木を打つとか夫れ方法もある筈であるから殊更に舞を鳴して呵呵大笑するなど、狂人じみたことをする必要はなからうと思ふ。さりながら之れが即ち金牛和尚の神通遊戯で即ち毘盧の心行を引出す大慈悲の手段であります。これを雪竇和尚は然も斯くの如くなりと雖も金牛好心ならず。金牛和尚は決して物好きに此の様なことをせられたのではないから皆さん此の作略を面白半分に見過してはなりません。之が金牛が飯粒で魚を釣らうとする釣糸をチョト引張つて七珍八寶の御馳走の食ひ逃げする雪竇の手段であると思はれる。所が或る時に一僧がありて雪峯大師の法を嗣がれた長慶の慧稜禪師に向つて、古人いはく菩薩子喫飯し來れと意旨如何と問れた。すると長慶禪師は大ひに齋に因つて慶讚するに似たり。慶讚は慶賀讚嘆の義で即ち何事でも物の出来上つた時に先づ先づ是れでありがたう御目出度いと云ふ満悦の意をあらはすことである。そこで長慶の答話はその何れもそう面倒に考へるに及ばない御飯を食べるに就いての禮儀であらうよと云ふのである。皆さん果して之れが儀式でありましようか。篤と味ふて見なけ

ればなりませぬぞ。

二。竿頭かんとうの絲線しせん君が弄するに從ず清波せいばを犯さず意おのづから殊なり。清波を犯さず風靜かなる江海に向つて穩かに釣を垂れて居る風流さ。太公望たいこうぼうも殿子ごんしりやう陵も遠く及ばぬ所である。

三。醍醐だいご毒藥どくやく一時に行ず。實に平等施一切で其の機に契はぬものにまでも等しく供養して怠られなかつたと云ふ。

四。是なることは則ち是なり。只一の飯桶はんづつであるけれども如何にも結構なもてなしてであると云ひ。

五。七珍しちしん八寶はつぼう一時に羅列す。山海の珍味が悉く具つて居るのであるから、實に恐れ入つた御馳走であると云ふ。七珍は七珍寶頭あつものの羹であつて、八寶は龍の肝。鳳髓。兎の胎。狸々唇、鯉魚の尾、熊の掌、鵝の炙。酥酪そらく蟬の八種であるそうな。

六。爭奈いかなせん相逢ふ者少なし。折角の御馳走ではあるけれども眞に此の御馳走を味ひうるものは古今東西にも稀であらうと云ふ。

七。是れ賊にして賊を知る。雪竇和尚は元來金牛禪師と同じ賊仲間であるから能く其の内情を知つて居られると云ふ。

八。是れ精は精を知る。精は即ち妖怪の義で俗に云ふオバケのことであるから、金牛も雪竇も同じく妖怪仲間であるぞと云ふのである。

九。來つて是非を説くは是れ是非の人。一體に人のことを是の非のと云ふのは其の人が既に同じ仲間であるからのことであると抑へる様にしてあげたものである。

一〇。妨げず疑着することを。これは誰人でも疑ひの起るところであるから是非問ふて見るが宜しかろうと云ふ。

一一。元來落處を知らず。これは金牛和尚の神通遊戯の眞意が會得が出来ないからのことであると云ふ。

一二。長慶は什麼とか道はん。長慶和尚は何と答へらるゝであらうぞと其の答話を豫想させるのである。

一三。席を相して令を打す。長慶禪師の臨機應變の御挨拶は此の僧に對しては誠に適當であると云ふ。

一四。疑に據つて案に結す。先づこの訴訟の判決もすみましたと云ふ。

第三節 本則提唱

金牛和尚毎ニ至ル齋ニ時ニ自ラ將フ飯ヲ桶ニ於テ僧堂前ニ作シ舞ヲ呵々大吟云ク菩薩子喫飯來。下語曰。落草求人。

道へ引き入れんとして種々に振る舞れたぞ。又別に下語あり。誰知遠ニ烟浪ニ別有ニ好思量ニ。別に好思量と云ふたが人を求めんとしたぞ。先師の下語に苦瓜ハ連レ根ニ甜ニ瓜ハ徹レ蒂ニ甜ニ。

雪竇云。雖ニ然レ如レ此ニ金牛ハ不ニ是レ好ニ心ニ。下語云。知音知後更誰知。勘破了也。

先師の下語に道遠ニ知ニ馬力ニ年久知ニ人心ニ。

僧問ニ長慶ニ古人道ヲ菩薩子喫飯來意旨如何。下語云。一回舉着スレバ一回新ナリ。

前にあつたことを又興し出して問ふた程に一回舉着すれば一回新なりとみるぞ。先師の下語に句裏呈レ機。

長慶太ニ似ニ目ニ齋ニ慶ニ讚ニ。下語云。知音知復更誰知。知音更有ニ青山外ニ。

齋に因つて慶讚すとは回向の方なり。又供養の方もあり。あまたの心があるぞ。長慶金牛よりは後の人なれども知音して云ひたる間、知音更に青山の外に有りと云ふたぞ。

句裏呈レ機。

長慶太ニ似ニ目ニ齋ニ慶ニ讚ニ。下語云。知音知復更誰知。知音更有ニ青山外ニ。

齋に因つて慶讚すとは回向の方なり。又供養の方もあり。あまたの心があるぞ。長慶金牛よりは後の人なれども知音して云ひたる間、知音更に青山の外に有りと云ふたぞ。

は後の人なれども知音して云ひたる間、知音更に青山の外に有りと云ふたぞ。

第四節 本則評唱和譯

金牛は乃ち馬祖下の尊宿なり。齋時に至る毎に自ら飯桶を持つて僧堂前に於いて舞をなし呵々大笑して云く、菩薩子喫飯し來れと。是くの如くするもの二十年。且らく道へ他の意什麼の處に在る。若し只喚んで喫飯となさば尋常魚をたゞき鼓を撃つて亦自ら告報せん。又何ぞ須るん更に自ら飯桶を持ち來つて幾多の伎倆をなすことを。是れ他顛すること莫しや。是れ提唱建立することなしや。若し是れ此の事を提唱せば何ぞ寶華王座上に去つて床をたゞき拂を豎てざる。此くの如きことを須要して什麼か作さん。今の人殊に知らず古人の意言外に在ることを。何ぞ且らく祖師當時初來底の題目什麼とか道ひしと看ざる。分明に説いて道ふ教外別傳單傳心印と。古人の方便也た只倆をして直截に承當し去らしむ。後來の人妄りに自ら卜度して便ち道ふ那裏にか許多のとあらん寒する時は則ち火に向ふ熱するときは則ち涼に乘じ、飢るときは則ち飯を喫し困する時は則ち眠を打すと。若し恁麼に常情を以つて義解詮註せば達磨の一宗土を掃つて盡さん。知らず古人二六時中に向つて念々捨てず此のことを明らめんと要することを。雪竇云く然かも是くの如くなりと雖も金牛是れ好心にあらずと。只這の一句多少の人錯つて會す。所謂醍醐の上味世の爲めに珍とせらる。斯れ等の人にあへば翻つて毒藥となる。金牛既に是れ落草して人のためにす。

雪竇什麼としてか道ふ是れ好心にあらずと。什麼に因つてか却つて恁麼に道ふ、衲僧家須らく是れ生機あつて始めて得べし。今の人古人の田地に到らずして只管に道ふ什麼の心をか見什麼の佛か有らんと。若し這の見解を作さば金牛老作家を壞却し了らん。須らく是れ子細に看て始めて得べし。若し只今日明日口快些子ならば了期あることなし。後來長慶上堂す。僧問ふ。古人道く菩薩子喫飯し來れと云ふ意旨如何。慶云く大に齋に因つて慶讚するに似たりと。尊宿家はなはだ慈悲、漏逗少なからず。是なることは則ち是なり。齋に因つて慶讚すと。備且らく道へ箇の什麼をか慶讚する。看よ他雪竇の頌に云く。

【字解】一。齋時に至る毎に云云。傳燈錄には師自ら飯を作りて衆僧を供養すとあるから、和尚は自分の弟子たる衆僧に人手からず其の身親しく薪炭の勞を取りて衆僧の參學辨道を助けられたものと見へる。然もそれが二日や三日の事ではないので二十年とあるから長い間一日の如くつとめられたのであるから其の老婆親切なる實に古今無比と申さればならぬ。淨土門の行者が是を以つて如來一切苦惱の衆生海を悲憫して不可思議光載に於いて菩薩の行をし玉ひし時三業の所修一念一刹那も清淨ならざることなく眞實ならざることなし。此れ皆吾れ等故にの御苦勞であると如來の大慈を悦ぶのも全く此の味ひに外ならぬことと思はれる。僧堂の前に於て舞を作し呵々大笑して曰く。これが如何にも和尚の大慈大悲なところで垂示に之れを神通遊戲と申して即ち毘盧の心印を引出すの方法である。さりながら折角の老和尚の老婆心切も疎々たる頭顱ばかりであつたために毎日日々の爲人落草を歡喜頂戴するものが一人もなかつたのは實に殘念なこと、申さればならぬ。

二。尋常魚を敲き鼓を撃ちて亦自ら告報せん。禪林の都べての規則は清規と申して金牛和尚の法兄たる百丈大智禪師が定めて置かれたのがあつて、即ち百丈清規と申して大師が日常の行儀作法の規則を定められたものが傳つて居る。その規則

によると食時の告報と申して齋座が出来たと云ふことを大衆に報告するために木魚をたたくか。或は庫前の大鼓を打つて合圖をすることになつてゐる。然るに此の金牛和尚は殊更に舞をなして何々大笑すると云ふ常識で考へれば如何にも氣狂ひじみたやうなことをせられた皆さん果して何の爲めでありまじやうぞ。

三。寶華王座。四教儀に別教の佛は蓮華藏世界の七寶菩提樹下寶華王座に坐すと見へて居るけれども、今は何もそう窮屈なことに見なくとも宜しい。獅子座と申しても高座と云ふてもどちらでも好いので只説法上堂する時に昇る高い臺のこと、見れば宜しい。

四。齋に因つて慶讃するに似たり。慶讃は慶賀讃嘆の義で即ち何事でも物の出来あがつた時に先づ、此れで出来あがつた誠に御目出度いと云ふやうな場合、例へば堂塔などの建築落成した時に其の落成を賀する式を慶讃式と云ふが如きである。僧食事に対しては何れの宗教に在りても相當の儀式がある。基督教の人が食時の前に必ず神に感謝の祈禱を捧げるが如き、儒教で蔬食菜羹と雖も必ず祭ると教へるが如き皆その例であらう。宗門に於ては此の儀式が殊の外嚴重でありて、朝飯(粥座と云ふ)晝食(齋座と云ふ)夕食(藥石)の三度共に箸を下す前に先づ必ず合掌して十佛名、咒願文及び五觀の偈を唱へ。生飯(一切群生に施す食なり)を取り偈を唱へる等夫れ、如法の儀式がある。長慶禪師が齋に因つて慶讃するに似たり。それかそれは何もその面倒に考へるには及ばない御飯を食べるに就いての禮儀であると申されたはつまり此の儀式になぞらへて申されたものである。我が宗門の法式は一々申せば長くなるから有縁の方はモヨリ、の寺院なり道場なりに就いて實地に修得の上出來うる限り實踐して戴きたいと思ふ。

第五節 頌

白雲影裏笑呵呵 笑中有刀熱發作什麼 兩手持來付與他 豈有怎麼事莫誘金

不喫這般茶飯。若是金毛獅子。須是他格外始得。許三千里外見誦訛。不直錢。一場漏逗。誦訛。在什麼處。瞎漢。

【讀方】 白雲影裏笑呵呵 笑中に刀あり。熱發して什麼をか作さん。天下の衲僧落處を知らん。兩手に持ち來りて他に付與す。豈怎麼の事あらんや。金牛を誘ふること莫くんば好し。喚んで飯桶と作り得てんや。若し是れ本分の衲僧ならば這般の茶飯を喫せず。若し是れ金毛の獅子ならば、須らく是れ格外にして始めし得べし。他の具眼を許す。只恐くば眼正しからざらん。三千里外に誦訛を見ん 中文錢にも直らず。一場の漏逗。誦訛什麼の處にか在る。瞎漢。

【字解】 一。笑中に刀あり。實に油断のならない笑ひ方であると云ふ。
二。熱發して什麼をか作さん。熱發は上氣して面貌を赤くした貌である。その氣張つてどうするつもりであるぞと云ふ。
三。天下の衲僧落處を知らず。此の何々大笑の落處は何人にも合點が行くまいと云ふのである。
四。豈に怎麼の事あらんや。何を付與すると云ふのであらう。元來付與するものもなければ付せられるべきものでもない、と云ふ。
五。金牛を誘ふること莫くんば好し。他に付與するなるなど、申して金牛和尚を誦誘するやうなことを言はれるなよと注意する。
六。喚んで飯桶と作り得てんや。他に何とか名のつけやうもあらうと思ふから、皆さん審細に氣を注いで見られるが宜しいと云ふ。
七。若し是れ本分の衲僧ならば這般の茶飯を喫せず。拙僧などはそのやうな御馳走は頂戴すまい。誰れか食上つて御らう

じと云ふ。これが美食も飽人の喫にあたらすと云ふ所以であらう。
八。須らく是れ格外かくげにして始めて得べし。雪竇の申される通り金牛の獅子兒でなければ到底合點することは出来ないであらうと云ふ。

九。他の具眼を許す。如何にも雪竇和尚は一隻眼を具へて居られると云ふ。

一〇。只恐くは眼正しからざらん。さりながら、サスの雪竇和尚を見そなうて居られるやうである云ふ。

一一。半文錢にも直らず。語訛かたがひが見へたなど申されるけれどもそれに何のれうちが御座らうと云ふ。

一二。一場の漏逗ろうとう。見られるやうではハヤ疵物かさぶたでまともなものではあるまいと云ふ。

一三。語訛かたがひ什麼の處にか在る。その語訛とか云ふものはどこにあるぞと云ふ。

一四。晴漢かつかん。エイこの糞めくら奴。雪竇の語路につきまはつて居るやうで何になるぞと掃蕩する。

【講義】 此の一頌は七言四句の絶句體である。白雲影裏笑呵々。白雲影裏と云ふ言葉に付いて、一説には衆僧の安居して居る僧堂のことを雲堂うんどうと稱するからして即ち僧堂のことを白雲堂と申したものであると云ひ、又の説にはイヤそうではない。これは金牛和尚が飯桶に飯を高くもりあられたその形容であるとも解釋するが、要は絶對向上の無我無心の境界を白雲杳渺たるところに例へたので白雲帝郷は虚無の上なりと云ふと同じ意味と見るべきものであらう。金牛和尚があの白雲深くとざした絶對向上の妙境界に在りて舞をなしたり呵々大笑したりせられる姿は佛祖天魔と雖も窺ひ知り難いのであるから。まして尋常一様のものでは決して寄りつくことの出来ないところである云ふのである。兩手持ち來つて他に付與す。金牛和尚は日々三度三度に兩手に飯桶を

捧げて來て、サア御飯が出來上つたから早く菩薩たち召し上りなさいと申されたが。皆さん此の謂ゆる飯と云ふは何んなものでありて桶と云ふは何のことであらう。和尚が他に付與すと云ふが其の時に僧堂に居合せて居つた衆僧ばかりのことであらうか。或は亦吾々お互ひをも指されたものであらうかどうであらう。付與すと申されるが果して付與することが出來、又うけとることの出來るものであらうかどうであらう。皆さん現在吾れ吾れお互ひは日々三度に此の飯を食ひつゝあるのでありますか、どうです。果して能く其の味を知つて和尚を點頭せしむることが出來ますかな。若し是れ金毛の獅子ならば。若し本統に金毛の獅子兒にも比すべき眞の作家であつたならば、三千里外に語訛を見ん。和尚が未だ飯桶を持ち出さる以前に於いて、早くも此の公案の語訛即ち最も會得しがたい處を歴々分明に洞觀して、此の東京の眞中に在つて、金牛長老の御念入りの御馳走を頂戴することが出來るであらうと云ふ。

第六節 頌評唱和譯

白雲影裏笑はくうんえいりわらひ呵々。長慶道ちやうけいく齋さいに向つて慶讚けいさんすと。雪竇道せつたうく兩手りやうしゆに持し來つて他に付與よよす。且しらく道いへ是れ他に與へて喫飯きつはんせしむるか、はた別に奇特きとくあるか。若し箇裏このうちに向つて端的たんでを知得ちやくせば便すなはち是れ箇の金毛きんまうの獅子しし子こならん。若し是れ金毛きんまうの獅子しし子こならば更に金毛きんまうの飯桶はんづつをもち來つて

舞をなして大笑することを必とせず。直ちに三千里に向つて便ち他の敗缺の處を知らん。古人道ふ鑿機先にあつて一捏を消せずと。所以に消僧家尋常須らく是れ格外に向つて用ひて始めて本分の宗師と稱することをうべし。若し只語言によらば未だ免れず漏逗することを。

【字解】一。鑿機先に在つて一捏を消せず。金牛和尚が未だ飯桶を持ち出されない以前に早くも已に金牛和尚の妙處を會することが出来やうと云ふ。

二。只語言によらば未だ免れず漏逗することを。若し吾れ〜が言句上に尋ねことあるやうなことでありたならば實に相去ること千里萬里で到底和尚の眞意を會得することは出来ないのである。

第七十五則 烏白屈棒

第一節 垂示

垂示云。靈鋒寶劍常露現前。亦能殺人。亦能活人。在彼在此。同得同失。若要提持。一任提持。若要平展。一任平展。且道不落。寶主不拘。回互時如何。試舉看。

【講方】靈鋒寶劍常露現前。亦能人を殺し亦能人を活かす。彼に在り此に在り。同得同失。若し提持せんと要せば提持するに一任す。若し平展せんと要せば平展するに一任す。且らく道へ、寶主に落ちず回互に拘らざる時如何。試みに舉す看よ。

【講義】羅山和尚が初めて入院せられた時の上堂の語に靈鋒寶劍常露現す。亦能人を殺し亦能人を活かす。若し能く操持すれば操持するに一任す。若し也た出場定當せんことは須らく是れ箇の漢にして始めて得べしとある。此の垂示は恐らくは此の文に依られたものであらう。靈鋒寶劍常露現前す。靈鋒の寶劍は般若の智劍とも金剛王寶劍とも或は又時として彌陀の利劍とも申して三世の諸佛も六道の衆生も皆夫れ〜に本來具有して居るところの護身刀でありて、何人も朝な夕なに肌身離さず常に身に添へて居る寶劍で、古來無相世界の無位の眞人の作と稱せられて、銘

を法性とも真如とも佛性とも涅槃とも、本地の風光とも本來の面目とも岸なく松風とも永夜の清宵とも申される那一物である。さて其の寶劍は常露現前と申して常にぬき放つたまゝで決して鞘に收めたり錦の袋に入れたりしてないものであるからして、何人が何時受用しやうとも各々其の手にありて自由自在思ひの儘であるけれども、然しながら、それがために始終怪我計りをして守り刀が却つて己が身を傷ふの器となつて仕舞ふ手合が多い。其の黨類を六道四生の凡夫とも生死沈倫の衆生とも云ふのである。寶もちながら其の寶を使ひ得ぬとは誠に歎しいことである。亦能く人を殺し亦た能く人を活かす。これは自由自在に靈鋒寶劍を受用し得る底の人のことで、かゝる手合になつて見れば、殺さうも活かさうも思ひの儘であるから、極樂へ往つて二十五菩薩に囃させて劍舞を踊らうとも、地獄へ往つて閻魔王と仕合をしやうともそこは全く思ひのまゝである。彼にあり此に在り。此の寶劍は自分の手に於て思ふ存分に使用することが出来る計りではない。又他人の手に渡して自由自在に使はせることも出来る。同得同失。我も他も同時に其の働きを現はすことも出来れば又其の働きを一時に隠して仕舞ふことも出来る。若し提持せんと要せば提持するに一任す。若し平展せんと要せば平展するに一任す。提持は把住と申して手を放さぬ姿。平展は放行で兩手を開いて投げ出した貌である。即ち把住と此の靈鋒の寶劍をおつ取りて思ひの儘に斬りて斬りて斬りまくらうとも、又放行と兩手を開いて投げ出して仕舞ふとも、それは全く御心次第

で御隨意になさるが宜しい。且く道へ賓主に落ちず回互に拘はらざる時如何、賓は賓客で主は主人である。主人と賓客とが真劍勝負と互ひに劍をぬきはなつて立ち合つた時に、どちらが勝つたともどちらが負けたとも何れ一方へ片落ちのない姿を賓主に落ちすと云ふ。回互と云ふは。その主客が相互ひに主となり賓となり。賓となり主となることで、即ち主客の間に孰れを孰れと拘束せられることのない姿である。そう云ふ場合には何としたものであらう。試みに擧す看よ。それは此の公案によりて其の實例を拜見せられるが宜しいと結ぶ。

第二節 本則

擧僧從定州和尚會裏來。到鳥白。鳥白問。定州法道何似這裏。言中有響。要影草。太。然。人。太。僧云。不別。死。漢。中。有。活。底。一。箇。牛。箇。白。云。若。不。別。更。轉。彼。中。去。便。打。然。
 正令。僧云。棒頭有眼。不得草草打人。也是。這。家。始。得。却是。獅子。兒。白。云。今日打着一箇也。
 又打三下。說。什麼。一。箇。千。箇。萬。箇。僧便出去。元。來。是。屋。裏。人。只。得。受。屈。只是。見。機。而。作。白。云。屈棒元來有二人。喫在。啜。子。喫。苦。瓜。放。去。又。收。來。點。得。回。來。堪。作。何。用。僧轉身云。爭奈何柄。在和尙手裏。依。然。三。百。六。十。日。却。是。箇。恰。稱。僧。白。云。汝若要。山僧回與汝。知。他。阿。誰。是。君。阿。誰。是。臣。故。虎。口。裡。橫。身。忒。然。不。識。好。惡。僧近前奪白手中棒。打白三下。也。是。一。箇。作。家。禪。客。始。得。賓。主。互。換。經。春。臨。時。白。云。屈棒屈棒。點。道。老。漢。着。僧云。有二人。喫在。阿。々。是。幾。箇。杓。柄。却。

在這僧手裏。白云。草草打着箇漢不落兩邊。知他是阿誰。僧便禮拜是丈夫兒。方白云。和尚却恁麼去也。點。僧大笑而出作家禪客天然有在。猛虎須得清風天下人橫索不着。白云。消得恁麼。消得恁麼。可借放過。何不劈脊便棒將謂走到什麼處去。

【讀方】僧あり定州和尚の會裡より來りて烏白に到る。烏白問ふ定州の法道は這裏と何似。言中に響あり。深淺を辨せんと要す。探竿影草。太懸人を喘す。僧云く別ならず。死漢中に活底あり。一箇半箇。鐵獅子と一箇。實地に蹈着す。白云く若し別ならずんば彼の中に轉じ去れと云ふて便ち打つ。灼然。正令當行。棒頭に眼あらば草々に人を打つことを得ざらん。也た是れ道の作家にして始めて得ん。却つて是れ獅子兒。白云く今日一箇を打着すと云ふて又打つこと三下。什麼の一箇とか説かん。千箇萬箇。僧便ち出て去る。元來是れ屋裏の人。只風を受くるを得たり。只是れ機を見て作す。白云く屈棒元來人の喫すること有る在り。啞子苦瓜を喫す。放去又收來。點得し回りに來るも何の用をか作さん。僧身を轉じて云く爭奈せん杓柄和尚の手に在るを。依然として三百六十日却つて是れ箇の伶俐の禪僧。白云く汝若し要せば山僧は汝に回與せん。知んぬ他の阿誰か是れ君にして阿誰か是れ臣なる。敢へて虎口裡に身を横たふ。はなはだ好惡を識らす。僧近前して白が手中の棒を奪つて白を打つこと三下。亦た是れ一箇。作家の禪客にして始めて得ん。賓主互換。縱奪時に臨む。白云く屈棒屈棒。點。這の老漢什麼の死念をか着けたる。僧云く人の喫することあるなりも。阿々。是の幾箇の杓柄が却つて這の僧の手に在り。白云く草々に箇の漢を打着す。兩邊に落ちず。知んぬ他は是れ阿誰ぞ。僧便ち禮拜

す危に臨んで變ぜざる方に是れ大丈夫。白云く却つて恁麼にし去るや。僧大笑して出づ作家の禪客天然に在るあり。猛虎は須らく清風の隨ふを得べし。方に知る始を盡し終を盡すことを。天下の人横索不着。白云く消得恁麼。消得恁麼。惜しむべし放過すること。何ぞ劈脊に便ち棒ぜざる。將に謂へり走つて什麼の處にか去る。

【字解】一。定州和尚等。傳燈錄に此の定州和尚と云ふ人が兩人ある。一人は臨濟大師の會下の定州の善暲禪師でありて一人は嵩山の普寂禪師の法を嗣いだ定州の石藏和尚である。此の中で定州の善暲禪師は唐の宣宗から、僖宗へかけての時代の人であるから次に出る烏白和尚よりは少しく後の時代の人である。それ故に今の定州和尚は恐らくは此の人ではなくして石藏和尚のことであらうと云ふことである。この石藏和尚は傳の詳しいことは分らないけれども嵩山の普寂禪師の法を得た人であるから、即ち北宗の初祖神秀大師の孫に當る人である。此の則の實位に立つた僧あり定州より來ると云ふ僧は、何でも此の定州和尚のところと確と充分に修行の功を積んだ人だと思はれるのである。烏白和尚はこの人も傳の詳しいことは傳つて居ないが、馬大師の法を嗣いだ人であることは明である。傳燈錄に依ると、曾つて玄上座紹上座と云ふ二人の僧が江西より來つて師に參したことがある。此の時に玄上座は二禪伯が發足什麼の處ぞと云ふ師の問ひに應じて江西より來ると答へるや否やスカサズ拄杖を以つて打つた。すると玄上座は久しく和尚に此の機要あることを知ると申して居る。又紹上座も爾既に會せず後面の箇の僧祇對せよ看んと云ふ師の言に應じて、一步近寄らうと擬するや否や師は直ちに拄杖を以つてヒツツと打つた。これで見ると烏白和尚は頗りに棒を行じ人を打つと云ふことが評判になつて居たほどの人と見へる。そこで此の定州和尚の會下の僧が此の烏白和尚に相見するや否や、師は直ちに貴公は定州和尚の處に居たと云ふことであるが、あそこの法道は何か拙僧のところと違ふたことがあるかナと問ひかけた。僧云く別ならず。サスガに此の僧は伶俐な實であつたと見へて、尊公の處は本來無一物の南宗の嫡流であるから彼の塵埃を惹かしむる勿れと云ふ北宗の流義とは格段な相違がありますと云はれない。別ならず。イヤ何にも變つたことはいないネと云ふ。これにはいかな烏白和尚も棒を行して此の僧を取ること

は出来なかつたやうである。すると烏白和尚は、若し別ならずんば彼の中に轉じ去れ。ソ一カ天上天下同一風光と云ふのか、それなればそこいゝと何も探してあるくには及ぶまい。なぜに早く己が家郷に還らないのかと云ひもあへずドシンとなぐつた。僧は棒頭に眼あらば草々に人を打つことを得ざらん。眞に打つべき時に當つて打つてこそよいが、そう鹿相ツかしく妄りに人を打つものではありませぬとたしなめる。烏白和尚は今日一箇を打着す。拙僧はこれまで多くの人に向つて棒を行じたけれども打ち効のあるほどの者は絶えて無いものであるが今日と云ふ今日こそはヤツと一人打ち心地の好い奴を打ち得たぞと又してもドシンドシンとぶんなぐつた。皆さんどんなに愉快でありましたしやう。定めし迷ひ子にめぐり合つたやうな感じがしたことと思ふ。すると僧便ち出てさる。御馳走サマとの禮も云はずにサツ／＼と出て行つてしまつた。これが中々凡庸では出来る藝ではありませぬぞ。烏白和尚は此の僧の出て行く後姿を見て、風棒元來人の喫するあるあり。罪もないにお目玉を頂戴してノソノソと出て行くやつがあるかと冷かす。スルト僧は身を轉じて云く争奈せん杓柄和尚の手に在るを。何うも仕方がない。貴方が主位に立つて棒を握つて居るのであるからと云ふ。烏白は汝若し要せば山僧は汝に同與せん。ヤヤ今度は貴公が主位に立つたらよからう。サア此の棒を渡さうと云ふ。僧近前して白が手中の棒を奪つて白を打つこと三下。到頭此の僧が主位に立つて本分の令を行した。白云く風棒風棒。イヤハヤ無理なうち方ぢやないかと云ふ。これで全く資主が轉倒してしまつたのである。僧云く人の喫することあるあり。世の中には其の風棒を食ふ人がありますからネーと云ふ。烏白は草々に箇の漢を打着す。イヤモ一貴公は中々豪氣なものぢやと云ふ。これが第三回目の試験と見へる。僧便ち禮拜す。此れは恐れ入りましたと禮拜する。實に立て板に水で其の轉身の機敏なる只々拍手喝采するより外はない。是れが眞の活殺自在の働きと云ふのであらう。烏白は、却つて慇懃に去るや。モ一其れ丈けのことで御歸りかなと云ふ。僧大笑して出づ。どこまでも面白い働きである。烏白は、消得慇懃消得慇懃。それ丈けのことか。それ丈けのことかと云ふ。これが即ち此の一則の筋書である。實に此の兩大關の取りくみは、梅に常陸と申したいが。中々その位のことではない。昔し毘耶離國で文殊と維摩との取組があつたが。實にあれ以來の奴取組で壯快と云はうか、痛快と申さうか。眞に千載一遇

の好取組と申さればならぬ。

- 二。言中に響きあり。此の烏白和尚の抄問は容易に看過してはなりませんと云ふ。皆さん一體這裏とはどのことでありませう。まさかに烏白の居られる寺のことではあるまいと思ふ。是非とも参究すべきところであらう。
- 三。深淺を辨せんと要す。烏白和尚は此の抄問で以つて此の僧の見處の深いか浅いかを試験するつもりであらうと云ふ。
- 四。探竿影草。先づはかうして探りを入れて見られたと云ふ。
- 五。はなはだ人を瞞す。定州と道理とに何の異つたことがあらう。西京の虚空も東京の虚空も虚空に變りはなからうぢやないか、それを兎や角云ふは甚だ以つて人を馬鹿にした言草ではないかと云ふ。
- 六。死漢中に活底あり。死人計りと思へば亦活漢もあるものである。此の一言實に力があると讃歎する。
- 七。一箇半箇。この如き僧こそは千萬人中の一箇半箇で容易に得がたい作家であると稱美する。
- 八。鐵槌子と一般。不別と云て答へた一言は中々チョツと手がつけられないと云ふ。
- 九。實地に踏看す。此の僧は脚實地を踏んだ僧であるからして地圖旅行の連中とはわけがちがうと云ふのである。
- 一〇。灼然。實に好い打ち處である、是非そう、こればならぬと云ふ。
- 一一。正令當行。如何にも本分の規則通りの行令である。どうしても斯うしなければならぬと云ふ。
- 一二。也た是れ這の作家にして始めて得てん。此の人でなくてはと云ひ得ないことである。餘程久參の稱僧であらうと讃揚する。
- 一三。却つて是れ獅子兒。如何様立派な祖門の獅子兒である。又と得がたいであらうと重ねんくの讃嘆である。
- 一四。什麼の一箇とか説かん千箇萬箇。何もそのやうに珍らしがるには及ぶまい。それ位のものば掃きよせる程もあらうと云ふ。
- 一五。元來是れ屋裡の人。元より此の人は佛祖屋裡の人であるから能く烏白の支室を心得てござると云ふ。

- 一六。只風を受くるを得たり。 風は風辱と云ふ文字であるから、冤罪即ち罪の無いのに刑を受けることである。此の僧は棒の食ひ逃げを致したと云ふ。
- 一七。只是れ機を見て作す。 進むも退くも名將の作略であるから他人の窺ひ知るべきでない。
- 一八。啞子苦瓜を喫す。 譬へば啞子が苦瓜を食うと妙な顔つきをするばかりで何とも言ふことの出来ないやうなもので、此の風棒の味ひは何とも角とも云ふて見やうのない妙味であると云ふ。皆さん此の風棒の味は苦いか甘いか喫うて見てころうじ。
- 一九。放去又收來。 打つて打つて打ちすへて。サア勝手に出て往きなさいと申しておきながら。又後から聲をかけてよびもどす。實に人形をあやつるが如く自由自在の働きであると云ふ。
- 二〇。點得し回り來るも何の用をか作さん。 折角出かけて行きながら又々ひきかへして來るなど、面白くもない。ズツと往つてしまへば好いと云ふ。
- 二一。依然として三百六十五日。 今も昔も一年の三百六十五日たることには變りはないと此の僧の見識の動かすべからざることを讚嘆する。
- 二二。却つて是れ伶俐の漢。 身を轉じた作用は如何にも伶俐なものである。力が見へますと托上する。
- 二三。知んぬ他の阿誰か是れ君にして阿誰か是れ臣なる。 釋迦が大迦葉を迎へて獅子座の半座をゆづり。殿子段が光武帝の腹の上へ脚を載せた様なもので、こゝが君臣互換の妙處である。
- 二四。敢て虎口裏に身を横ふ。 此の僧に拄杖を渡すのは敵に鐵砲を渡すやうなものであるから。如何にも危険なことであると云ふ。
- 二五。はなはだ好悪を識らず。 如何にも無鐵砲なる舞いであるから、傍から見れば僧がいゝこと、常識を以つて評して學人に參究の道を開く。

- 二六。亦た是れ一箇。 眞に打ち甲斐がありましたらうとらむ。
- 二七。作家の禪客にして始めて得てん。 此の人ならばこそ到底凡庸の及ぶ處でないと感服する。
- 二八。賓主互換。 互い／＼の賓客ぶり。如何にも美事であると稱歎する。
- 二九。縱奪時に臨む。 任運自在思ひの儘なる働きやうは到底凡庸の人で出来ることでないといふ。
- 三〇。點。 ソコちやソコちやと大賛成する。
- 三一。道の老漢什麼の死念をか着けたる。 烏臼老に向つて、ソレは見苦しい。人は覺悟が肝要であるぞと冷かす。
- 三二。呵々。 カチ／＼と笑をもらして愉快がる。
- 三三。是の幾箇の杓柄が却つて道の僧の手裡に在る。 烏臼の渡した拄杖は確が一本であつたと思ふに、ハテサテ此の僧は幾本も持つて居るらしいぞといふがる。
- 三四。兩邊に落ちず。 實に臨機應變與奪自由の働きである。美事なこと、讚歎する。
- 三五。知んぬ他は是れ阿誰ぞ。 その烏臼の仰せらるゝ箇の漢とは抑も誰様のことであらうと會下を見下して參究をすゝめる。
- 三六。危に臨んで變ぜざる方には是れ大丈夫。 殺活自在の働きぶりには眞に一箇の大丈夫であると云ふ。
- 三七。點。 ソコだ／＼。 好い手がといたと云ふ。
- 三八。作家の禪客天然に在るあり。 此の僧がから／＼と大笑せられた働はどこまでも逆順縱横の働きであると稱揚する。
- 三九。猛虎は須らく清風の隨うを得べし。 所謂風をきつて出て行くと云ふ此の僧の呵々大笑して出て行くさまの威風堂々たるを稱揚したものである。
- 四〇。方を知る始を盡し終を盡すことな。 始終一貫して少しの缺け目もないと讚歎する。
- 四一。天下の人摸索不着。 此の僧の機鋒は何人も摸索不着であらうと云ふ。

四二。惜むべし放過するを。更に此の僧を打つこと三十棒すべきであると云ふ。
四三。何ぞ劈脊に便ち棒せざる。此の僧が笑つて出て往くうしろからナセに脊骨の折れる程アツなぐらないかと云ふ。
四四。將に前へり走つて什麼の處にが去る。サスカに馬大師の一子だけあつて實にエライものぢやと讚嘆する。

第三節 本則提唱

僧從定州和尚會裏來到鳥白下語云。魚行水濁。

鳥白問定州法道何似這裡下語云。撓釣搭索。探竿影草。

僧云不別。下語云。慣戰作家。

伶俐の衲僧なり。

白云若不別更轉彼中去便打。下語云。青於藍。前箭輕後箭深。

僧云棒頭有眼不得草々打人。下語云。冷於水。

見定めもせいで卒爾に御打ちぞとなり。草々は早の字の心なり。

白云今日打着一箇也又打三下。下語云。前箭輕後箭深。

此の下語爰にてもよからんとなり。不審云云。打着は好き打ち者をこそ打つたれと云ふて又打つたなり。

僧便出去。下語云。雲無心出岫。雲出洞中明。

出たまでなり。別の心なし。無心にして出たなり。元來無心。

白云屈棒元來有人喫在。下語云。臨岸推人。

打たれまじき棒に打たるゝを屈棒と云ふ。此の僧が出て去るを見て打つたは屈棒ぞ。さてこそ臨岸推人ぞ。

僧轉身云事奈杓柄在和尚手裡。下語云。再持虎鬚。

鳥白を打ちたれども和尚の手裡に棒があるほどに打たぬぞと云ふ。

白云汝若要山僧回與汝。下語云。兼身在內。

僧近前奪白手中棒打白三下。下語云。還把鎗頭倒刺人來。

白云屈棒屈棒。下語云。自作自受。

打たれまじき棒にうたれたぞ。

僧云有人喫在下語云。惱亂春風卒未休。

句中を休まざるなり。

白云草々打着箇漢。下語云。野火燒不盡春風吹又生。生薑終不改辛。

又は前の二句をも用るぞ。

僧便禮拜。下語云。爛泥裏有棘。

押しだるんで近比殊勝に候と云ふて拜した方ぞ。

白云和尚却恁麼去也。下語云。一半擡一手擡。

僧を和尚と指したところが擡。却つて去る也と云ふところが擡なり。抑揚ぞ。

僧大咲而出。下語云。獅子窟中獅子作家々々。

和尚とあげて云はれたぞ。圈續に墮せず。笑つて出で去つた。さりとはこはものぞ。機のあるところ首尾そろたぞ。此の呵々大笑して出でたところが此の古則の字眼なり。衲僧の働きぞ。

白云消得恁麼消得恁麼。下語云。首正尾正。

人に向つて自由自在問答の手法なり。消得恁麼は收めた方なり。むかひを褒美しての後語なり。

第四節 本則評唱和譯

僧定州和尚の會裏より來つて烏臼に到る。白亦是れ作家、諸人若し這裏に向つて此の二人の一出一人を識得せば、千箇萬箇只是れ一箇主と作ることも也た恁麼、賓となることも也た恁麼。二人畢竟合して一家となる。一期の勘辨、賓主問答、始終作家。看よ烏臼這の僧に問ふて云く、定

州の法道這裏に何似れ。僧便ち云く別ならずと。當時若し是れ烏臼にあらすんば這の僧を奈何んともし難からん。白云く、若し別ならずんば更らに彼の中に轉じ去れと云ふて便ち打つ。爭奈せん這の僧是れ作家の漢なることを。便ち云く棒頭に眼あり草々に人を打つことを得ざれど。白一向令を行して云く、今日一箇を打着すと云ふて又打つこと三下。其の僧便ち出で去る。看よ他の兩箇轉轉々地にして俱に是れ作家にして這の一事を了することを。須らく緇素を分ち休咎を別けんことを要すべし。這の僧出で去ると雖も這の公案却つて未だ了せざることあり。烏臼終始他の實處を驗して他如何と看んことを要す。這の僧却つて門を撐へ戸を拄ふるに似たり。所以に未だ他を見得せず。烏臼却つて云ふ、屈棒却つて人の喫するある在り。這の僧身を轉じて氣を吐くことを要して却つて他と争はず。輕々に轉じて云ふ、爭奈せん杓柄和尚の手裏に在ることを。烏臼是れ頂門に眼を具する底の宗師敢へて猛虎口裏に向つて身を横へて云く、汝若し要せば山僧汝に回興せんと。這の漢是れ箇の肘下に符ある底の漢。所謂義を見てなさはるは勇なきなり。更に擬議せず近前して烏臼手中の棒を奪つて白を打つこと三下。白云く屈棒屈棒と。爾且らく道へ意作麼生。頭上に道ふ屈棒元來人の喫するあるあり。這の僧他を打つに到るに及んで却つて道ふ屈棒屈棒と。僧云く人の喫するあるあり。白云く草々に箇の漢に打着すと。頭上に道ふ草々に一箇を打着すと。末後自ら棒を喫するに到つて什麼としてか亦道ふ。草々に箇漢を打着すと。當時若し

是れ這の僧卓湖地なるにあらずんば也た他を奈何んともせず。這の僧便ち禮拜す。這箇の禮拜最も毒なり。是れ好心にあらず。若し是れ鳥曰にあらずんば也た他を識る不破ならん。鳥曰云く却つて恁麼にし去ると。其の僧大笑して出づ。鳥曰云く、消得恁麼消得恁麼と。看よ他作家の相見始終賓主分明にして断じて能く續くことを。其の實は只是れ互換之機なり。他這裏に到つて亦箇の互換の處ありと道はず。自らは是れ他の古人情塵意想を絶して彼此作家亦得あり失ありと道はず。是れ一期の間の語言なりと雖も、兩箇活潑々地にして都べて血脈針線あり。若し能く此に於いて見得せば亦乃ち十二時中に向つて歷々分明ならん。其の僧便ち出づ。是れ隻放已下は是れ雙放これを互換と謂ふなり。雪竇正恁麼地に頌出す。

【字解】一。定州の法道遺要に何似れ。貴公は定州の處に居られたと云ふことであるが定州の處の法道は何か拙僧の處とどこか違ふことがあるかなと云ふ。

二。須らく細素を分ち休咎を別んことを要すべし。緇は帛の黒色なり素は白き緇論なりと申して黒白と云ふほどのことである。休は美なり善なり咎は惡なりで善惡と云ふほどのことであるから。黒白を分別し善惡を識ればならぬと云ふ。

三。風棒元來人の喫すること有る在り。風棒は風は罪の無いものを罪に落すこと即ち冤罪と云ふも同じ意味であるから打たるべき道理のないのに打たれるのが風棒である。鳥曰が此の僧のソソソと出て往く後から聲をかけて罪もないのに棒を食はせられてソソソと出て往く奴がある。この意氣地なし奴と冷かしたのである。

四。僧は身を轉じて云く争奈せん杓柄和尚の手裡に在るを。何うも仕方がない貴方が主位に立つて棒を握つて居るのであるからと云ふ。爰が教家に申す主伴具足と云ふ味である。天地萬物皆之の通りで互に主となり伴となりて、一物が主位に立

てば他の萬物は皆其の賓位に立つて服従せればならぬ。春になれば花が主位に立ちて他の萬物は皆花の眷屬となり。秋になれば月が主位に立つて萬物皆月の眷屬となる。酒を主位に置くものは酒なくて何のおれが櫻かなと云ひ。詩歌を主位におくものは三十一文字で天地を動かすと云ふ。酒でも餅でも詩でも歌でも皆それ／＼に一が他を服従し他が一に服従し他が主となればそれを除いた外が賓となる。天地萬物皆かくの如く互に位をかへ地をかへて賓主互換となるのである。

五。汝に同與せん。この同の字は貸の字と同義に見るが宜しい。鳥曰和尚は此の僧に向つてヤア今度は貴公が主位にたとうと云ふのかイヤそれならば此の拄杖を貴公にわたさうと云ふ。これが垂示に謂ゆる賓主に落ちず回互に拘はらざる底の機合でありて鳥曰にして始めて之れを同與すべく。此の僧にして始めて其の同與をうけうるのである。

六。義を見てなまざるは勇なきなり。論語の爲政篇の語なり。

七。卓朔。卓は獨立の義であり、朔は蘇なりと訓じてよみかへると云ふ意味である。

八。這箇の禮拜最も毒なり。イヤ此れには恐れ入りましたと申して禮拜した此の働は實に油断のならぬ毒氣を含んで居る。それにつけても此の僧の轉身の機敏なる眞に殺活自在の働きである。

九。消得恁麼。消は用なりと訓じて見るが宜しい。そこで此の四字は是の如きことを用ひ得たのかと云ふ意味であるから云はマッマそれ丈けの事かと云ふのである。

第五節 頌

呼即易。天下人總疑着。奥肉引來。遣即難。不妨勸絕。海互換機鋒子細看。一出二俱
 作家一條拄杖兩人。劫石固來猶可壞。袖裏金鎚如何。滄溟深處立須乾。向什麼處
 扶且道在阿誰邊。烏白老鳥白老。漢不識好惡。幾何般。也是箇無端。與他杓柄太無
 有眼獨許。烏白老鳥白老。漢不識好惡。幾何般。也是箇無端。與他杓柄太無

端 已在言前。泊合打破蔡州。好與三十棒。且道過在什麼處。

【讀方】

呼ぶことは即ち易く、天下の人總に疑着す。臭肉繩を引き来る。天下の衲僧も總て落處を知らず。遣ることとは即ち難し。妨げず勤絶することを。海上の明公秀。互換の機鋒子細に看よ。一出一入。二りともに作家。一條の拄杖。兩人扶く。且らく道へ阿誰か邊にか在る。劫石固うし來るも猶ほ壞す可し。袖裏の金鏈如何が辨得せん。千聖も不得。滄浪深き處も立ちどころに須らく乾かすべし。什麼の處に向つて安排せん。棒頭に眼あり獨り許す他親しく得ることを。烏臼老烏臼老。可惜許。這の老漢好惡を識らす。幾何般かある。也た是れ箇の端なき漢。百千萬重。他に杓柄を與へて太だ端なし。巳に言前に在り。泊んど蔡州を打破すべし。好し三十棒を與ふるに。且らく道へ過什麼の處にか在る。

【李解】一。天下人總に疑着す。蛇のやうなものを呼んで来て一體何にするつもりであらうと云ふ。
二。臭肉繩を引き来る。僧三聖に問ふ、如何なるか是れ祖師西來意。聖云く臭肉繩を來たすと云ふ古則がある。今の意は烏臼のやうな臭肉があるから何時も此の僧のやうな銀繩がたかつて來ると賓主呼應の姿を評したものである。
三。天下の衲僧も總べて落處を知らず。此の蛇を呼び來つた眞意に至つては天下の衲僧何人も知つて居るものはなからうと云ふ。
四。妨げず勤絶することを。何も遣ふことは即ち難しなど、困り入るには及ばぬ。すつかり勤絶してしまへばよいではないかと云ふのである。
五。海上の明公秀。これは他に覓むるを得ず。又は幻人が幻人に逢ふと云ふ方言語である云ふことである。古詩に海上の明公秀賣うして卓々たりとか。海上の明公は貴く林下の道人は賤しとか申してあり。又。鳳翔府の石柱和尚のための洞山大師垂語に海上の明公秀の如き又作麼生。師曰く幻人相逢ふて掌を撫して呵々すと見へて居る。此の明公秀は日輪即ち太陽の道へ過什麼の處にか在る。

ことである。海中には七珍萬寶があり輝いて居るけれども。一たび太陽が昇ると云ふと皆其の光を失ふてしもうて全く其の蹤跡を留めない。其れと同じやうに作家と作家とが互ひに主となり賓となる姿は幻人と幻人とが相過ふやうに互ひに出没自在であるから、少しも蹤跡を留めないと云ふのである。
六。一出一入二り俱に作家。烏臼と僧との兩作家が互に主となり伴となりて一出一入少しの片落ちもないところはサスに兩大關であると云ふ。
七。一條の拄杖兩人扶く。一條の拄杖を回與したり回與されたりする姿は謂ゆる賓主に落ちず回互に拘はらざる底の機會でありて實に立派な働きであると云ふ。
八。且らく道へ阿誰か邊にか在る。其の烏臼と一僧とが賓主與奪して打ちつ打たれつした一條の拄杖は今日今誰の手にあるぞと云ふ。
九。袖裡の金鏈如何が辨得せん。これは各自の袖中に持つて居る人人本來具足底の金鏈を以てすれば如何なる劫石も木葉微塵に打ちくだかれる筈であるが、サテ皆さん此の金鏈を何う辨得したものでありましやうぞと云ふのである。
一〇。千聖も不傳。此の袖裏の金鏈は千聖も不傳と申して本來やりとりの出來ないものであるからして、他人に與へることも出來なければ他人から受けることも成らぬものである。
一一。什麼の處に向つて安排せん。此の枯渴し盡した大海を何處でどうしてどう置いたものであらうぞと云ふ。
一二。棒頭に眼あり獨り許す他親しく得ることを。此の如き機鋒は棒頭に眼を有する所の二人でありて始めて親しく得る事が出来るのであると云ふ。
一三。這の老漢好惡を識らす。一體に烏臼が好し惡しも知らずに騒ぎ立てるからのことであると抑へる。
一四。可惜許。雪竇に是の如く難されるのは烏臼のためには却つて氣の毒なことであるが、これと云ふも雪竇が人の惡いからのことであると云ふ。
一五。也た是れ箇の端なき漢。烏臼は實にあと先きのわからぬ人である。此の大切な拄杖を他人に貸すと云ふ法があるも

のかと抑へる。

一六。百千萬重。イヤそれには亦色々な深い意があるのであると云ふ。

一七。已に言前に在り。雪寶和尚に向つて、それは申されるまでもありませんまい圓悟などはそう仰せられないさきより存じて居りますと云ふ。

一八。泊んど蔡州を打破すべし。これは死して用せずとか、命絲にかくるが如しと云ふ方語である。南無三寶、其の生殺與奪の大權を他人に渡してしまつては貴公の命はあやういではないかと云ふ。

一九。好し三十棒を興ふるに。太だ端なしなどい云ふて居るよりも、烏白を打つて打つて打ちすへてこそ眞の讚歎であると云ふ。

二〇。且らく道へ過は什麼の處にかある。烏白和尚が雪寶に三十棒を頂戴せねばならぬ過ほどこにあるのであらう。皆さんそこを参究するが宜しいと云ふ。

【講義】 呼ぶことは即ち易く遣るとは即ち難し。呼ぶと云ふは把住の方でありて、遣ると云ふ放行である。呼んだり遣つたりする兩老互換の作用を譬喩に托して頌したのである。即ち蛇取りか蛇を捕へるために瓢を以て造つた笛を吹くと、蛇がそれに欺かれて集まつてくる。それで蛇を喚び集めるとは別に造作のないことであるが、偕て其の集つて來た蛇を捕へるとなりて、若しも誤まつて捕へそこなふと云ふと、忽ち其の毒にふれ其の齒にかまれて命を失はねばならぬ。一僧と烏白の間柄も其の通りで互ひに主となり賓となりて打ちつ打たれつすることであるが、これが蛇取りの名人であればこそ造作もないが。若しさもなくば何とすることであらうぞ。實に危険千萬なこ

とである。互換の機鋒子細に見よ。烏白と一僧とが互に主となり賓となりて、問ひつ答へつ與へつうけつ逆順縦横與奪自在なる其の機鋒の銳利敏捷さは、是非とも後學たるもの、子細に参究すべき處である。劫石固うし來れるも猶ほ壞すべし。劫は梵語の劫破と云ふを略したもので、時分又は長時と翻譯をする。然るに此劫には小劫中劫大劫と云ふことがある。詳しく説明すれば容易なことでないが、其の中の小劫の説明に、此に方四十里の大石がある。それを百年毎に天人の衣の重さ僅かに三銖のものを以てスラクと撫で、遂ひに其の方四十里の石がスツカリ磨滅してしまふだけの時間を一小劫と名けると云ふのである。樓炭經に、一の大石あり、方四十里なり。百歳毎に諸天來り下つて羅縠の衣を取り石を拂ひ盡せども劫猶ほ未だつきじとあるは此の意味である。圓悟の評唱に輕衣拂石劫と謂ふとして引いてある説も又一説であるが、爰の處を一本には文を改めて、方四十里、凡百年、乃有天人下來、以三銖衣拂一下。又去至三百年、又如此拂となしてある。然しこんなことはどちらでも宜しい。今の頌の意味は圓悟大師が石は堅固なりと雖も尙ほ然も消磨し盡すべし。此の二人の機鋒は千古萬古更に窮盡あるとなし。と註して置かれたやうに、彼の劫石はどれほど固いと申したところで此の二人の機鋒にあふては忽ちに磨り潰されてもうであらうとも見。又此の二人の賓主互換の機は無量阿僧祇却を経て如何に磨擦したからとて決して滅盡の期はあるべきでないとも見なければならぬ。詮する處此の二人の機は宇宙の本

體そのものが其の儘にして活動し來つたものであるからして、時間のために移され、事物のために消磨せられると云ふとはある筈がないからである。滄溟深きところも立ちどころに乾すべし。此の句の立の字を讀むに「立て」と讀むと、立ちどころにと讀むと兩説がある。何れも採用して宜しい。句の意味は、此の二人の蓋天蓋地の活機を以つてしては、どれほどに大海の水が廣大でありても忽ちにしてほしかはかされるであらうと見、又。たとひよし此の廣大もない大海の水が立ちどころに乾し盡くせるにしても此の機鋒はさぐり究めることが出來ないと兩様に見るべきであらう。鳥曰老鳥曰老幾何似かある。鳥曰和尚の名號を二度三度喚び上げて其の人を稱揚して、貴公の如き擒縱殺活逆順與奪限りもない活手段は實に前代未聞。古今無比でありますとの讚嘆である。他に杓柄を興へて太だ端なし。佛祖相傳の寶器たる衲僧手中の拄杖をば輕々に他人に貸與するとは甚だ由ないことであると言ふのである。此の一句は鳥曰老を答めたやうな口吻であれども、其の實はサスガにどうも鳥曰老である。鳥曰老でなくては出來ない藝當であると非想非々想天まで托上したのである。なせかと申すに若し此れが他の人であつたならば、此の僧ほどの相手に向つては中々どうして手中の拄杖を回與することは出來るものでない。然るにそれを譯もなく平氣でサア此の拄杖を貴公に渡さうぞと回與した所、こゝが天地を喝散するの機鋒である。皆さん。あの劔術の眞劍勝負をする場合を考へて御覽なさい。宮本武藏のやうな剛の相手に自分の刀を渡してしま

うてサア御出でなさい某は空手でお相手になりましたやうと果して云へるものであらうかどうかであらう。非常なる出格の人ならば兎に角決して出來る藝當ではないのである。して見ると鳥曰和尚が此の端なく杓柄を相手の僧に回與されたところが、却つて鳥曰の鳥曰たる眞面目をあらはして居るのでありて、實に佛祖天魔と雖も寄りつくべからざる機合であります。

第六節 頌評唱和譯

呼ぶことは即ち易く遣ふことは即ち難し。一等に是れ落草。雪竇はなはだ慈悲。尋常道ふ。蛇を呼ぶことは易く蛇を遣ふことは難し。如今箇の瓢子をもつて吹き來つて蛇をよぶことは即ち易く、遣ふと欲する時は即ち難し。一に棒を持つて他に與ふことは却つて易く、復他の棒を奪つて遣り去ることは却つて難きに似たり。須らく是れ本分の手脚ありて方に能く他を遣得し去るべし。鳥曰は是れ作家、蛇を呼ぶ底の手脚あり。亦蛇を遣底の手段あり。這の僧也た是れ瞌睡底にあらず。鳥曰問ふ定州の法道這裏に何作れ。便ち是れ他を呼ぶ。鳥曰便ち打す。是れ他を遣るなり。僧云く棒頭に眼あれば草々に人を打つことを得ざれと。却つて這の僧の處に轉在して便ち是れ呼び來たす。鳥曰云く汝若し要せば山僧汝に回與せん。僧便ち近前して棒を奪つて也た打つこと三下す。却つて是れ這の僧遣り去る。乃至這の僧大笑して出づ。鳥曰云く消得恁麼消得恁麼

と。此れ分明に是れ他を遣り得て恰好なり。看よ他兩箇の機鋒互換絲來り線去つて打成一片始終賓主分明なることを。有る時は主却りて賓となり有る時は賓却つて主となる。雪竇也た讚歎し及ばず。所以に道ふ互換の機人をして且らく子細に看せしむと。劫石固うし來るも猶ほ壞すべし。謂く此の劫石は長さ四十里廣さ八萬四千由旬。厚さ八萬四千由旬。凡そ五百年に乃ち天人ありて下り來つて六銖の衣袖を以つて拂ふこと一下。又去つて五百年に至りて又來つて此くの如く拂ふ。此の石を拂ひ盡すを乃ち一却となす。之れを輕衣拂石劫と謂ふ。雪竇道く、劫石固うし來るも猶ほ壞すべし。石は堅固なりと雖も尙しかも消磨し盡すべし。此の二人の機鋒は千古萬古更に窮盡あることなし。滄溟深きところ立ちどころに須く乾くべし。たとひ是れ滄溟洪波浩渺白浪滔天なるも若し此内の二人をして内に向つて地に立たしめば此の滄溟も也た須らく乾竭すべし。雪竇此に到つて一時に頌し了る。末後更に道ふ烏臼老烏臼老幾何般ぞ。或は擒或は縱、或は殺或は活、畢竟是れ幾何般ぞ。他に杓柄を與ふ太だ端なし。這箇の拄杖子三世の諸佛も也た用ひ、歴代の祖師も也た用ひ、宗師家も也た用ゐて人のために釘を抜き楔を抜く。粘をとき縛を去る。争でか輕易に人に分付し與ふことを得ん。雪竇の意獨り用んことを要す。這の僧當時只だ他のために平展するに値ふ。忽ち若し早地に雷を起さば看よ他如何か當抵せん。烏臼杓柄を過して人に與へ去る。豈に是れ太だ端なきにあらずや。

【字解】一。廣さ八萬四千由旬。此の下の廣さと厚さをとく處悉くは衍字、削るべし。

二。滄溟。東海の別名なり。四溟は四海と云ふに同じ。

三。端なし。端は緒なり。端緒と熟す。ゆはれなしと云ふほどのことなり。

第七十六則 丹霞問僧

第一節 垂示

垂示云。細如米末。冷似冰霜。逼塞乾坤。離明絕暗。低低處處。觀之有餘。高高處平之不足。把住放行。總在這裏。許有出身處也。無試舉看。

【讀方】 細かなること米末の如く、冷かなること氷霜に似たり。乾坤に逼塞して明を離れ暗を絶す。低々たる處之を觀るに餘あり。高々の處之れを平ぐるに足らず。把住放行總べて這裏許に在り。還つて出身の處ありや也た無しや。試みに舉す看よ。

【講義】 此の垂示は宇宙萬有の本體本性即ち眞如とも法性とも如來藏とも涅槃妙心とも云はれるもの、體相を明かすに就きて、先づ細と冷との二を以て其の反對たる大と熱との二を反顯説明し以つて萬能圓滿の相狀を明かしたものである。細なることは米末の如く冷なることは氷霜に似たり。瀟山和尚の法語に細なることは毫末の如く冷なることは雪霜の如しとある。是れもその心で其の微細なる點から云へば米粉の如く微塵の如く、其の廣大なる點から云へば宇宙法界のそれよりも廣大である。又其の寒冷なる點より云へば氷雪のそれよりも寒冷であり、其の溫熱なる點より云へば炎々たる猛火のそれよりも熱い。長短厚薄美醜等は之れを推して知るべきである。乾坤

に逼塞して明を離れ暗を絶す。乾とか坤とか云へば如何にも此處とか彼處とか云ふ區別があるやうに考へられるけれども、實は天空杳渺として限りがないのでありて、虚空の廣大なる到底凡情を以てしてははかり知らぬのである。宇宙の本體本性も又其の通りで、虚空に際限がないと等しく此の本體本性には限量がない。明かと思へば明中に暗があり、暗かと思へば暗中に明がありて畢竟明だの暗だの是だの非だの迷だの悟だの樂だの淨だのと云ふ兩々双々の邊を離れて全然超越し去つて居るのである。低々たるるところ之を觀るに餘りあり。高々たるるところ之を平ぐるにたらず。本生禪師は曾つて低々たるるところ之を平ぐるに餘りあり高々たるるところ之を觀るに足らずと申されてある。それを爰へ借りて來たものと見へる。低々たる處と云ふから低いとか淺いとか薄いと云ふ方面、その方面に於いては、之れを觀るに餘りありて、謂ゆる六趣四生の迷ひの衆生で地獄や餓鬼道の苦しみを受けて居るその迷ひの當體そのまゝに、西方世界の彌陀如來や此土出現の釋迦牟尼如來と少しも異ならぬところの涅槃常住の佛性を確かに具へて居る。高々たるるところ、これは高いとか深いとか厚いとか大きとか云ふやうな方面、その方面にありても、之れを平ぐるに足らず。四智圓やかに十力四無畏を具へたまふ佛菩薩と雖も三不如意の嘆もあり天上の榮華にも五衰の悲しみがあると云ふから、畢竟生佛如々、不増不減不垢不淨なる處が這箇の這箇たる所以である。これが佛に在りても増せず。衆生に在りても減せずと云ふ味であらう。

う。それであるから咲いて笑ふも花の本分。散りて落つるも花の本分、悟つて佛となるも之れ本分。迷つて衆生となるも之れ本分でありて其の本分の本分たる處には更に變りはないのである。把住放行總て這の裏許にあり。逆順縦横生殺與奪殺して働かせうとも活かして睡らせうとも寝るも起きるも笑ふも泣くも一切皆悉く此の本分の中において、寸時と雖も離れることは出來ないのである。還つて出身の處ありや也た無しや。何んとそこで自由自在に働いたものであらうぞ。試みに擧す看よ。それに就いては此の公案を參究するが宜しいと結ぶ。

第二節 本則

舉丹霞問僧甚處來也。正是不可總沒來處也。僧云山下來也。着草鞋入爾肚裏過也。只是是緣。霞云喫飯了也。未定盤星要知端的。何必僧云喫飯了。人果然撞着箇露柱。却被傍孔鐵。霞云將飯來與汝喫。底人還具眼麼。雖然倚勢欺人。也是據款結案。僧無語。果然走不得。這僧若是作。長慶問保福。將飯與人喫。報恩有分。爲什麼不具眼。也只道得一半。通身是通身。福云。施者受者。二俱瞎漢。道盡。罕遇其人。長慶云。盡其機。來還成瞎否。識甚好惡。猶自。福云。道我瞎得麼。兩箇俱是草裏漢。龍頭蛇尾。當成瞎否。只向他道瞎也。只道得一半。一。等是作家。爲什麼前不構村後不迭店。

【讀方】丹霞僧に問ふ甚處よりか来る。正に是れ總て來處なくんばある可からず。來處を知らんと要せば也た難からず。僧云山下より來たる。草鞋を着けて備が肚裏に入つて過ぐ。只是れ會せず。言中響きあり。諸合し來る。知ぬ他は是れ黃か是れ綠か。霞云く喫飯し了れりや也た未だしや。第二杓の悪水を洗ぐ。何ぞ必しも定盤星のみならんや端的を知らんと要す。僧云く喫飯し了れり。果然として箇の露柱に撞着す。却つて傍人に鼻孔を穿却せらる。元來是れ無孔の鐵鏈。霞云く飯を持ち來りて汝に與へて喫せしめたる底の人還つて眼を具するや。然も勢に倚つて人を欺く。款に據つて案を結す。當時好し禪床を掀倒するに。端なくして什麼をかせさん。僧無語。果然として走り得ず。道の僧若し是れ作家ならば他に向つては道人和尚の眼と一般。長慶保福に問ふ飯を持つて人に與へて喫せしむることは恩を報するに分あり什麼としてか眼を具せざる。也た只一半を道ひ得たり。通身是通身是。一ち刀兩段。一半は擡げ一半は擡ゆ。福云く施者受者二り俱に瞎漢。令に據つて行す。一句に道盡す。其の人に遇ふこと罕なり。長慶云く其の機を盡し來る還つて瞎と成さんや否や。甚の好惡をか識らん。猶は自から未だ肯はず。什麼の碗をか訪れん。福云く我を瞎と道ひ得てんや。兩箇俱に是れ草裏の漢。龍頭蛇尾。當時他の其の機を盡し來るも還つて瞎となさんや否やと道ふを待つて只他に向つて瞎と道はん。也た只一半を道ひ得たり。一等に是れ作家什麼としてか前は村に構せず後は店に迭せざる。

【字解】一。丹霞。鄧州丹霞の天然禪師と申して石頭の希遷禪師の法嗣となり達磨九世の祖位に即いた方である。長慶四年六月二十三日に八十六歳の高齡を以つて示寂せられた。證を智通大師と申す。傳記の詳しいことは本則の評唱に見へて居るからそれにゆづることにしやう。或る時のことである。この禪師の所へ一人の雲衲がやつてきた。禪師は叢林の規則通り、甚の處よりか來る。貴公は一體どこから來たかと初相見の挨拶をさせられた。此間は世間で旅行する時に旅屋で旅館をつけ

るのとは大違ひでありて、この何處からと云ふのは何處の何んなところより生れてきたとも聞こえ。又どのどんな處で何の修行をして何の悟りをか得たるともきこえるのである。スルト此の僧は山下より來る。ハイこのお寺の山の下から参りましたと答へる。禪師は喫飯し了れりや也た未だしや。貴公は山下からきたとの事であるが、山下には確か宿屋も茶屋もない筈であるが御飯はたべてきたかナまだすまないかナと挨拶せられる。僧は喫飯し了れり。ハイすみましてございますとどこまでも語路について廻つて少しも出身の活路がない。禪師は飯を持ち來りて汝に與へて喫せしめたる底の人還つて眼を具すや。それではその山の下で貴公の處へ飯をもつてきて食はせた人に眼があつたかどうかナと挨拶せられる。僧無語。こゝに至つては一言一句の答へも出來ないでボンヤリとして仕舞ふた。其の後雪峯山の義存大師の法を嗣いだ長慶寺の慧稜禪師が其の弟の保福寺の從展禪師に向つて、飯を持つて人に與へて喫せしむることは恩を報するに分あり什麼としてか眼を具せざると挨拶して保福の見處を勘檢にと出かけた。飯を人に施すと云ふことは即ち布施の善行であるからして、佛祖の恩を報する上より見ても。又衆生恩と申して社會の恩を報する上から申して誠に結構なことであるのは申すまでもないので。それを何故に丹霞和尚は眼を具せざる盲目であると罵られたのであらうかと云ふのである。スルト保福和尚は施者受者二俱に瞎漢。飯を勸こす者が盲目であつた許りではない。其の飯を受けたものも又盲目であると答へられた。皆さん此の施者受者の二り俱に瞎漢である計りではありませぬぞ。其の實は其の施、こされ又受けられた飯そのものも亦盲目なのである。此れを三輪空寂と申す。此の一大盲目こそ即ち十方法界を平等に照す所の大光明なのである。所が長慶禪師は更に一拶を興へて徹底保福の見處を勘檢せんと出かけた。長慶云く其の機を盡し來る還つて瞎と成さんや否やと云ふがそれである。スルト保福は、我を瞎と道い得てんや。それでは貴公は此の保福が目くらであるかと云ふのかと云ひ出した。イヤハヤ切角の長慶の苦心も此に至つて全く駄目になつてしまつた。即ち今迄かゝつて漸く眞黑にのり上げた全法界を此の一言で以つて又しも疵點を出かしたのである。何んと皆さん此の長慶の挨拶をよく味ふて、ヘマな答話をせないやうに心掛ければなりませぬぞ。

二。正に是れ總べて來處なくんばあるべからず。地獄から來たか極樂から來たか何れ來處があるには相違あるまい。

三。來處を知らんと要せば也た難からず。別に問ふて見るにも及ばないのであるけれども大善知識のお慈悲を以つて此の

僧の脚を下を勘検してつかはされるのである。

四。草鞋さうあしを着けて備が肚裡に入つて過ぐ。これはこの僧が如何にも意表外のつもりで山下より来ると得意になつて答へて居るうちに、丹霞老人は草鞋かけて貴公の腹の中をクルリと三返まほつて来られた様子であるぞと云ふのである。

五。只是れ會せず。到底此の僧には丹霞老人の眞意は解せまいと云ふ。

六。言中に響あり。此の僧が突頭に來處を云はずして漠然と山下より来ると言ふたのには何か作略があるらしいと云ふのである。

七。詰合あがふし来る。詰は詰合と熟してハツキリと明言しないけれども然も其の意を含んで居ると云ふ意味であるから。即ち此の僧が明白に來處を云はずに漠然と山下より来ると答へた答話には何か此の僧の底意が含まれてあるらしいと云ふのである。

八。知ぬ他は是れ黄か是れ緑か。此の僧には赤いか黒いかの何か特色があらうと思ふから、皆さん辨じて見なさいと云ふ。

九。第二杓の惡水を澆ぐ。丹霞和尚が腹を抉ぐるやうに問ひをかけて第二杓の惡水をテッペンに下してあびせかけられたやうであるが此れで此の僧は眼が醒めたであらうかどうであらう。

一〇。何ぞ必しも定盤星ぢやうばんせいのみならんや端的たんできを知らんと要す。此の丹霞老人の問ひは何も只普通御定まりの御飯が濟みましたかどうかと云ふ挨拶だけのことではない。尙ほ此の上に確かに此の僧の腹の底までも勘検しやうと云ふ作略があると云ふのである。

一一。果然として筒つつの露柱つらちゆうに撞着つうちやくす。此の露柱の露の字には別段に意味はない。只柱と云ふことである。電信柱と云ふもよからう。大體の意味は最初からドサセ盲目であらうと思ふて居たが果して目の前の柱で頭を打ちつけたと云ふのである。

一二。却つて傍人に鼻孔せんきやくを穿却せんきやくせらる。山下より来るなど生意氣な返事をするものであるから却つて鼻柱を捏ぢあげられたのであると云ふ。

一三。元來是れ無孔むくうの鐵鏈てつれん。今に初まつたことではない元來が愚僧でありますと云ふのである。

一四。然も勢に倚つて人を欺く。頭から罵倒したと言ふのである。

一五。款に據つて案を結す。これは罪人の自白に基いて刑の判決したのであるから實に公明正大の裁判と申されなければならぬと云ふ。

一六。當時好し禪床ぜんじゆうを掀倒けんたうするに。此の僧が若し宗眼を具へて居つたならばあの時に丹霞の椅子を引くりかやして痛い目に遇はせてやるのであつたのにと云ふ。

一七。端なくして什麼をか作さん。ハイ喫飯してまいりましたなどと由もないことにぐずつて居る愚僧であると云ふ。

一八。果然として走り得ず。盲目の上に蹇足けんそくであつて、おまげに無語とあるから必ず啞に相違あるまいと云ふ。

一九。道の僧若し是れ作家ならば他に向つて道はん和尚の眼と一般。これは圓悟禪師があの時此の僧がハイ尊師のお眼と御同様でありましたと云へばよいにと云ふのである。

二〇。也た只一半を道ひ得たり。恩を報するに分あり什麼としてか眼を具せざると云ふては、未だ以つて宗乘を全提した云ひ分とは申されないと云ふ。

二一。通身是通身是。通身通身天窓てんそうのキリ／＼から足の爪先きまで悉く眼であるにそれを具するの具せないのとは何事を云ふぞと云ふ。

二二。一刀兩段。具眼不具眼の穿鑿せんさくを只一刀の下に斬つてのけたらよからうと云ふ。

二三。一半は擽くげ一半は擽くる。これは此の長慶禪師の拶問は兩端に涉りて一半は保福和尚の見處を勘検し、又一半は禪師自身の領解を述べて居るのであると云ふ。

二四。令に據つて行ず。保福が施者受者俱に瞎漢と本分の上から一刀兩段に答へられた勢いは實に壯快此の上もないことであると云ふ。

- 二五。一句に道盡す。保福和尚は一句下に道破せられたと云ふ。
- 二六。其の人に遇ふこと罕なり。長慶と保福とは眞に千古の知音であると云ふ。
- 二七。甚の好悪をか識らん。又しても長慶禪師は分らぬことを云ひ出されたと云ふのである。
- 二八。又猶ほ自から未だ肯はず。長慶和尚には何か自分に承知のならぬ處があると云ふのである。
- 二九。什麼の碗をか討れん。其の機をつくすなど、食後に膳碗を捜して何にせられるぞと云ふのである。
- 三〇。頭箇俱に是れ草裡の漢。長慶も保福も二人とも横道へころげこんでしまつたと云ふのである。
- 三一。龍頭蛇尾。何處までも瞎三昧で透せばよいに我は瞎でないなぞとはつまりない言ひ分であると云ふ。
- 三二。當時他の其の機を盡し來るも還つて瞎と成さんや否やと道ふを待つて只他に向つて瞎と道はん。佛も瞎よ。祖も瞎よ。君も瞎よ。我れも瞎よ。花も瞎よ。月も瞎よ。松風も瞎よ。雨竹も瞎よ。一切悉く大瞎三昧に安住して初めて天下は太平であるよと云ふ。
- 三三。也た只一半を道ひ得たり。漸くの半提で結局不完全なものであると云ふ。
- 三四。一等に是れ作家什麼としてか前は村に構せず後は店に透せざる。保福と云ひ長慶と云ひ孰れ劣らぬ作家でありながら。何んとして此のやうに不満足に畢つたのであらうと後學をして參究せしめんための圓悟大師の大慈悲である。

第三節 本則提唱和譯

丹霞問僧甚處來。下語云。似要知來處。

僧云山下來。下語云。脚跟不點地。

霞云喫飯了也未。下語云。捉得見肘。

僧云喫飯了。下語云。道飯袋子。

徒らに喫飯したるものぞ。

霞云將飯來與汝喫。底人還具眼麼。下語云。前箭輕後箭深。

僧無語。下語云。討什麼碗。秤槌落井。鼠口終無象牙。

無語にしてゐたは碗を揃ゆるとて紋をかさねてギロ〜とあたりを見まはすことなり。又秤のおもりを井に落して眼をキヨロ〜することを云へり。

長慶問保福。將飯與人喫。報恩有分爲什麼。不具眼。下語云。乞兒弄飯碗。飯を將つて人に與へて喫せしむと云ふたは、乞食が飯碗を翫弄する程の事よ。又長慶の悪いこともなければ、飯を將つて人に與へて喫せしむることは恩を報ずるに分あり什麼としてか眼を具せざると云ふたは乞食が飯碗を弄したほどのことぞ。

福云施者受者二俱瞎。下語云。以己方人。

長慶云盡其機來還成瞎否。下語云。弓折箭盡。

福云道我瞎得麼。下語云。含血噴人先汚其口。蝦跳不出斗。

互ひに抑へて見られたなり。

第四節 本則評唱和譯

鄧州丹霞の天然禪師は何許の人と云ふことを知らず。初め儒學を習ふ。將さに長安に入つて舉に應せんとす。方に逆旅に宿す。忽ち白光室に滿つと夢む。占者曰く、解空の祥なり。偶ま一禪客あり、問ふて曰く、仁者何にか往く。曰く選官し去る。禪客曰く、選官は何ぞ選佛に如かん。霞云く、選佛せんには當さに何れの所にか往くべき。禪客曰く、今江西に馬大師出世す。是れ選佛の場なり。仁者往くべしと、遂ひに直ちに江西にいたる。才かに馬大師を見て兩手を以つて巖頭脚(一本に額)を托ぐ。馬大師顧視して云く、吾は汝が師に非ず。南嶽石頭の處に去れ。遽かに南嶽に抵つて還つて前意を以つて之れに投ず。石頭云く槽廠に着き去れ。師禮謝して行者堂に入る。衆に隨つて作務すること凡そ三年。石頭一日衆に告げて云く、來日佛殿前の草を刻らん。來日に至つて大衆各々鋏鋤を備へて草を刻る。丹霞獨り盆を以つて水を盛つて淨頭して師の前に於いて跪膝す。石頭見て之れを笑ふ。便ちために剃髮し又爲めに説戒す。丹霞耳を掩ふて出づ。便ち江西に往つて再び馬祖に謁す。未だ參禮せざるに便ち僧堂の内に去つて聖僧の頸に騎つて坐す。時到大衆驚愕して急に馬祖に報す。祖躬ら堂に入つて之れを視て曰く、我が子天然霞と。便ち下つて禮拜して曰く、師の法號を賜ふことを謝す。因つて天然と名づく。他の古人天然是くの如く

穎脱なり。所謂の選官は選佛に如かざるなり。傳燈錄の中に其の語句を載す。直に是れ壁立千仞句句人のために釘を抜き楔を抜く底の手脚あり。この僧に問ふに似たり。道く、什麼の處より來る。僧云く山下より來る。この僧却つて來處を通せずひとへに眼を具して倒に至つて主家を勘するが如くに相似たり。當時若し是れ丹霞にあらずんば也た收拾を爲し難からん。丹霞却つて云く喫飯し了るや未だしや。頭邊は總べて未だ見得せず。此れは是れ第二回他を勘す。僧云く喫飯し了れり。僧の漢元來會せず。霞云く飯を持つて汝に與へて喫せしむる底の人還つて眼を具するや。僧語なし。丹霞の意に道く。爾這般の漢に飯を與へて喫せしめば什麼を作すに堪へん。この僧若し是れ箇の漢ならば試みに他に一割を與へて、他如何と看ん。然も是くの如しと雖も丹霞又未だ爾を放さるること有り。この僧便ち眼眨々地にして無語。保福長慶同じく雪峯の會下に在つて常に古人の公案を擧して商量す。長慶保福に問ふ。飯を持つて人に與へて喫せしむ。恩を報するに分有り。什麼としてか眼を具せざると。必しも盡く公案中の事を問はず。大綱此の語を借つて話頭となして他の誦當の處を驗せんことを要す。保福云く、施者受者ふたり俱に瞎漢と。快なる哉這裡に到つて只當機の事を論ず。家裏出身の路あり。長慶云く其の機を盡くし來んに還つて瞎とならんや否や。保福云く我を瞎すと道い得んや。保福の意に謂く、我れ恁麼に眼を具して爾がために道ひ了れり。還つて我を瞎すと道い得んやと。然も是くの如くなりと雖も半合半開。當

時若し是れ山僧ならば他の其の機を盡くし來るに還つて晴となるや否やと道んをまつて只他に向つて晴と道ん。可惜許。保福當時若し這箇の晴の字を下し得ば雪竇許多の葛藤を免れ得ん。雪竇亦只此の意を用ひて頌す。

【字解】一。解空の祥なり。これは眞空無相の妙理を悟るの瑞相であると云ふのである。

二。兩手を以つて幪頭額を托ぐ。二儀實錄に古には皂羅の三尺なるを以つて頭を裹んで頭巾と號す。三代は皆冠にして列品す。點首は皂絹を以つて髪をつむ。周の武帝に至つて古の三尺に依つて裁して幪頭となすと見へて居る。四脚を垂れてある頭巾と見れば宜しい。そこで兩手を以て云云と云ふからつまり指しあげて見る體をなすことである。

三。槽廠に着き去れ。槽は獸を養ふところであつて、廠は壁のない馬屋のことであるけれども爰では行者の居る處のことである。

四。丹霞耳を掩ふて出づ。そのやうな説戒などは聞きたくもない耳の汚れであると云ふ姿をとつたものであらう。

五。聖僧の頭に騎つて坐す。丹霞禪師が坐禪堂に安置してある文殊大士の首を肩馬にして、ハイヨハイヨと云ふて居られたものであるから、それを見た大衆は驚いたの驚かないのでなく、早速ヤレ氣狂いが出來ましたとお師匠様の馬大師へ上申いたしましたところ、馬大師はそれを見られて、我子天然霞との至極の稱美である。皆さん此の時の大衆の面つきはどんなでありましたでしやう。

六。這の僧却つて來處を通ぜず。ハイ直このお寺の山の下から參りましたと却つて丹霞を擲擲する氣味がある。

七。這の僧何ち眼眨々地にして無語。眨眨は眼をキヨロ／＼として居ることである。此の僧が眼をキヨロ／＼としてだんまりこんで居ると云ふのである。

第五節 類則提唱

其一 石頭割草

石頭一日告衆云、來日刻佛殿前草。至來日大衆各備鋏、割草。丹霞獨以盆盛水、淨頭於師前、跪膝。石頭見而笑之、便與剃髮、又爲說戒。下語云、日々是好日。

剃髮説戒したは何の道理もなき境界なり。日々好日ならば好日までよ、道理に涉らず直に見るべし。抄には淨頭の點なり。髪を剃る事ちやほどに頭を淨むるの心なるべし。いかさま雪隠の西淨にまさるゝなり。

丹霞掩耳而出。下語云、慣戰作家。

説戒と云ふたを左様のことは我はきかぬと云ふて耳を掩ふて出たほどに戰に慣れたる作家ぞ。

第六節 頌

盡機不成晴。只道得一半。也要按牛頭、嗅草。失錢遭罪、半河南半河。四七二三諸祖師。有條學條、帶累先聖。實器持來、成過過。盡大地人、換手地。還我拄杖來、帶累山僧也。出頭不得。過谷深。深。天

下衲僧跳不出。無處尋。在爾脚下。天上人間同陸沈。天下衲僧一坑埋却。還有活且道深多少。摸索不着。摸索不着。天上人間同陸沈。底人麼。放過一着。蒼天蒼天。言猶在耳。牛頭を機を盡せば瞎と成さず。只一半を道ひ得たり。也た他を驗し過さんことを要す。言猶ほ耳に在り。牛頭を按じて草を喫せしむ。失錢遺罪。牛は河南半は河北。殊に鋒を傷け手を犯すを知らず。四七二三諸祖師。條あれば條を攀づ。先聖を帶累す。唯只一人を帶累するのみならず。寶器將ち來る過谷と成る。盡大地の人手を換へて胸を抛つ。我に拄杖を還し來れ。山僧を帶累して也た出頭し得ざらしむ。過谷深し。はなはだ深し。天下の衲僧も跳不出。且らく道へ深さ多少ぞ。尋ぬるに處なし。爾が脚下に在り。摸索不着。天上人間同陸沈す。天下の衲僧一坑に埋却す。還つて活底の人ありや。一着を放過す。蒼天蒼天。

【字解】一。只一半を道ひ得たり。此れは雪竇に向つて、貴公がそう申されても未だ十分な云ひ分とは申されないと云ふのである。

- 二。也た他を驗し過さんことを要す。長慶も保福も互いに他を勘驗しやうと云ふにすぎないのであると云ふ。
- 三。言猶ほ耳に在り。已に先き程承りましたやうであると云ふ。
- 四。失錢遺罪。長慶禪師も保福和尚も、ありもしない財布をはたき出して置きながら、おまげにお告めをうけて罪にまで問はれたと云ふので、即ち骨折り損のくたびれもうけよと云ふのである。
- 五。牛は河南半は河北。河南と云ひ河北と云ふは黄河の南と北と云ふことであるが、今は半分半分と云ふ意味に用いたのであるから、なる程其の間答は面白けれども却つて理に落ちて落着が悪いやうであると云ふのである。
- 六。殊に鋒を傷け手を犯すを知らず。生兵法大傷の本と申す。互いに本分を呈露して却つて落草になりましたと云ふのである。

- 七。條あれば條を攀づ。雪竇は何やら故紙調べを初められたなと云ふ。
- 八。先聖を帶累す。四七二三の祖師などを引きづり出して御先祖様までも御迷惑をかけるぞと云ふのである。
- 九。唯只一人を帶累するのみならず。非常な大勢の人に御迷惑をかけるのであるから實に恐れ入つた次第であるぞと云ふのである。
- 一〇。盡大地の人手を換へ胸を抛つ。今更に泣いても笑つても返らぬことであるけれども實に痛歎に堪へぬであらうと云ふ。

- 一一。我に拄杖を還し來れ。其の寶器とやらを此の圓悟に御渡しなさい。某ならば過谷に落ちぬやうに喫飯して見せやうにと云ふのである。
- 一二。山僧を帶累して也た出頭し得ざらしむ。若し其の寶器に疵が附いては某も甚だ迷惑する。モ一何處へも面出しが出来なくなるからと云ふのである。
- 一三。はなはだ深し。イヤモ一深くて底が知れないぞと云ふ。
- 一四。天下の衲僧も跳不出。どのやうな人でも此の過谷を免るゝことは容易に出来ないよと云ふ。
- 一五。且らく道へ深さ多少。一體に其の深さはどの位でありますやう。阿誰でも宜しいからにはかかれるならばはかつて御覽なさいと云ふ。
- 一六。爾が脚下に在り。何もそう遠方を尋ねるまでもない。ソレそこにくらがつて居りますがと云ふ。
- 一七。摸索不着。トテモ探り當てることが出来まい。如何にも笑止なことよと云ふて。さりながら此の摸索不着が過谷の本色でありますと申し上げる。
- 一八。天下の衲僧も一坑に埋却す。雪竇老人が到頭天下の人を悉く溺死させて仕舞つたのである。此の罪許すべからず。
- 一九。還して活底の人ありや。皆さん誰か獨りでも此の埋却を免れうる者があるであらうかどうかどうでありましたやうと云ふ。

二〇。一着を放過す。爰で一棒を揮ふべきところであるけれども、マ一許しておかうと云ふ。

二一。蒼天蒼天。其の一棒を何人も揮ひ得ないとはきてく痛ましいことであると悲しみの聲を放った。

【講義】 機を盡せば瞎とならず。此の一頌はすべて長慶禪師と保福和尚との問答を表にして、丹霞大師の宗乗は裏に含ませて自然に其の本意が顯はれるやうに謠ふてあるやうである。機を盡せばと云ふは長慶が機を盡くし來ると申されたを頌したもので、瞎とならずと言ふは保福が我を瞎と道ひ得てんやと答へたを頌したのであるから、つまり此の第一句は長慶と保福の問答を其の儘に頌してあるのである。牛頭を按して草を喫せしむ。此れは本則の主題になつて居る喫飯と云ふことが出て來たので、句の意は大智論にある譬喩である。即ち智度論に牛頭喫草の話と申すがある。一人の人が世人の供物を供へて神を祭つて居るのを見て、其の傍へ牛の頭丈けを持つて往て其の口の邊で草をあて、食はせるやうにした。すると他の人が此れに就ひて牛の頭丈けで草が食べられるかと申したところが、此の人はそれに答へて然らば神も供物を食はぬであらうと申したと云ふ話である。長慶と保福との問答も此れと同じである。時節因縁が熟して居らない内に、食ふことの出來ないものにどれほど食はせてやらうとしたところで所詮其の效はないのである。四七二三諸祖師。四七は西天の廿八祖でありて、金色の頭陀摩阿迦葉より達磨圓覺大師に至る廿八人であつて、二三は震旦佛心宗の初祖達磨大師より六祖曹溪の慧能大師に至る六人の祖師である。寶器

持し來つて過咎となる。初め釋尊が靈山會上に在りて、八萬の大衆列座の上で、金色の頭陀摩阿迦葉尊者に向つて、我に正法眼藏涅槃妙心實相無相微妙の法門あり。今汝に附屬すと申されてよりこのかた。ゆはゆる四七二三と傳燈相承して來つた以心傳心の妙訣を拄杖子とも那一物とも金剛王寶劍とも那一句とも、或は又單に這箇とも稱することであるが、此の則では喫飯の上での話であるから寶器と名けた。その寶器は即ち如來正傳の鐵鉢であらうと思ふ。此の鐵鉢で以つて喫飯するには、彼の丹霞老人があの一僧に接せられたやうに活動せねばならぬのであるのに、それを何ぞや長慶と保福とは機を盡すだの盡くさぬだの、報恩だの不報恩だの瞎だの不瞎だのと論量して、此の大切な寶器の鐵鉢、即ち喫飯の機を全く論量の主題にしてしまつた。恰も愚人が正宗の銘刀を弄して己れと己れに傷きながら、其の過咎を正宗の寶劍に歸するがやうなものである。過咎深し。然も其の過咎は中々尋常の過咎ではない。尋ぬるに處なし。到底量つて見る事が出來ないばかりの深さである。天上人間同じく陸沈す。此の陸沈と言ふ言葉は其のもと莊子に出て居るので市井の隱者を形容したのである。山の中に居るべき隱者が紅塵萬丈の市井に居るのは、あたかも船や人は水の中で沈没し水の中で沈溺すべきものであるに却つて陸地で沈溺するが如しと云ふのである。今こゝでは此の語を隨義轉用して沈溺すべからざる處で沈溺して自ら束縛して居ると云ふので、即ち長慶や保福が瞎の不瞎のと滯ふるべからざる處に滯りて洒々落々たること

能はざるのみならず、人上も人間も皆陸沈なるぞと誠められたものである。

第七節 頌評唱和譯

機を盡くして瞎とならず。長慶云く其の機を盡し來んに還つて瞎と成るや否や。保福云く我を瞎と道ひ得んやと。ひとへに牛頭を按じて草を喫せしむるに似たり。須らく他の自ら喫せんを等つて始めて得べし、耶裏にか他の頭を按じて喫せしむ。雪竇恁麼に頌す。自然に丹霞の意を見得す。四七二三の諸祖師寶器持し來つて過咎となる。唯只だ長慶を帶累するのみにあらず。乃至西天の二十八祖此の土の六祖一時に埋没す。釋迦老子四十九年一大藏教を説いて末後に只這箇の寶器を傳ふ。永嘉道く是れ形を標して虚しく事穢するにあらず。如來の寶杖親しく蹤跡と。若し保福の見解を作さば寶器持し來るも都べて過咎と成る。過咎深く。尋ぬるに處なし。這箇備がために説くことを得ず。但去つて靜坐し他の句中に向つて點檢して看よ。既に是れ過咎深し。什麼に因てか却つて尋るに處なき、此れ小過にあらず。祖師の大事をもつて一齊に陸地上に於いて平沈却す。所以に雪竇道く天上人間同じく陸沈すと。

【字解】一。末後に唯這箇の寶器を傳ふ。釋尊は摩訶迦葉に向つて我れに正法眼藏涅槃妙心實相微妙の法門あり摩訶迦葉に附屬すと申されたと云ふこととありますが、皆さん此の寶器と云ふは何物でありましやうか。拄杖子であらうか。袈裟であら

うか。珠數であらうか、鐵鉢であらうか。これは是非とも調べて見なければなるまいと思ひます。

第七十七則 超佛趙祖

第一節 垂示

垂示云向上轉去。可以穿天下人鼻孔。似鴿捉鳩。向下轉去。自己鼻孔在別人手裏。如龜藏殼。箇中忽有箇出來。道本來無向上向下。用轉作什麼。只向伊道。我也知爾向鬼窟裏作活計。且道作麼生。辨箇縑素。良久云。有條攀條。無條攀。例。試舉看。

【講方】 向上に轉じ去らば以て天下人の鼻孔を穿つこと。鴿の鳩を捉ふるに似たり。向下に轉じ去らば自己の鼻孔別人の手裏に在らん。龜の殻に藏るゝが如し。箇の中忽ち箇の出で來つて、本來向上向下無し。轉を用いて什麼をか作さんと道ふことあらば、只伊に向つて道はん。我也知る。爾が鬼窟裡に向つて活計を作すことを。且らく道へ作麼生か箇の縑素を辨せん。良久して云く、條有れば條を攀ち條無ければ例を攀づ。試みに舉す看よ。

【講義】 向上に轉じ去らば以つて天下の人の鼻孔を穿つべし。この段は大善知識たる本宗の宗師が其の機其の機に順應して衆生濟度をせられる手段の最も峻峻なる様子を示したものである。即ち本分の作家が學人を接化せらるゝに際して、向上に轉じ去らばと本分の立ち場に立つて孤危

峻嶮なる機用を弄することになれば天下人は愚か三世の諸佛も歴代の祖師も退倒三千里なるより外はないので到底よりつくことは出来ないのである。而して其の勢いの敏捷なることは。鶴の鳩を捉ふるに似たり。アハヤと云ふて居る暇まもなく忽ちにつかみ去つてしまふ。それに反して向下に轉じ去らば自己の鼻孔別人の手裡に在り。若し草裡に落ちて園林遊戯地と出かけてくることになれば、丁度乃木將軍が學習院で小さな公達の御相手をして居られる様なもので、鼻もつまれば髻もむしられる耳を引つばらるれば口も塞がられる。龜の殻に藏るゝが如し。龜の子が手も脚も首も尾も皆甲のなかへ引こめて少しも自由がきかぬやうなものである。然しながら若しも此の老和尚の會下に於いて、忽ち箇の出て來りて本來向上向下なし轉を用ひて什麼か作んと道ふことあらば。老僧が云はれるやうな向上の向下のと云ふは抑も第二第三のこと、本分の上には其んな名相は更に御坐らぬとつきこんで來たならば、只伊れに向つて道ん。此方は其の者に向つて、我れ也た知る彌が鬼窟裏に向つて活計を作すことを。そう云ふ汝こそ、向上の向下のと云ふことを超越したと稱する處に腰をかけて、出身自在底の働かないのでありて、所謂る鬼窟裡の活計で、餓鬼其の献立、幾ら御馳走そうに見へても決して腹はふくれぬぞと叱る。且らく道へ作麼生か箇の縋索を辨せん。サア皆さんどちらが本統でありましやう此の是非黑白を辨別して見るが宜しい。良久して云く條あれば條を攀ぢ條なければ例を攀づ。やゝ久しく默然として考

へるやうであつたが更に言をついで、世間のことがらでも法律に若し然るべき條例があれば其の條例により、若しも依るべき條例がなければ先例によつて事を決する迄のことである。今爰には幸ひに好條例があるによつて、能く參究して見るが宜しいと云ふので試みに擧す看よ。

第二節 本則

擧僧問雲門。如何是超佛越祖之談。開。早地。門云。餠餅。舌拄上。

【讀方】 僧雲門に問ふ如何なるか是れ超佛越祖の談。開。早地の忽雷。抄。門云く餠餅。舌上餠を拄ふ。過なり。

【字解】 一。僧雲門に問ふ等。これは世間の參學の士が正に如何なるか是れ佛とか、或ひは如何なるか是れ祖師西來意と定りきつた文句を問ひ來るを古る臭いと思ふてか、謂ゆる鬼窟裡に活計を弄して超佛越祖と即ち三世の諸佛を翻倒し歴代の祖師を蹂躙し孤峯頂上に高い／＼ときめこんだ見識から一撈し來つたのである。會元によると此の問ひの起つた動機は最初雲門大師が上堂の垂語に於いて、若し祖師意佛意を將つて這裏に商量せば曹溪の一路平沈せん還つて道ひ得る底ありやと釣を下されたものであるから、それに此の僧が釣上げられて此の間端を起したものである。これに對して雲門は一言下に餠餅と答へた。餠餅は餅に胡麻をつけたのであるから本來ならば餠餅とかくが本統である。餠の字は寄食なりと訓して日本で申せば居候と云ふことである。皆さん雲門は此の餠餅が超佛越祖の談であると申されるが、何んとして此の餠餅を喫却したのでありましやうぞ。

二。開。これは此の僧が千佛萬祖を推しのけて飛び出して來た調子を評したものである、此の僧は大口あいて問ひだして

来たが、おなががすいて見へるやうであると云ふのであらう。又云く。圓悟は開と申されるが何がどう開いたのでありましやう。

三。早地の忽雷。いや豪氣な勢いである。不意に藪から棒をつきだしたやうで實に喫驚致しましたと云ふ。山僧は蛇が出ればよいがと斬つて居ります。

四。抄。甘く雲門大師にくつてかゝつたと云ふのである。

五。舌上麴を拵ふ。此の様な御馳走にあづかつては何とも口のあけやうがないと云ふのである。

六。過なり。何處かへ行つてしまつたやうであるが丸る呑みにせられたのではないかなと心配する。

第三節 本則提唱

僧問云門如何是超佛越祖之談。下語云。放爾三十棒。毘過亦不知。

此僧まだ佛祖の境界をも知らずして向上にとびあがつて超佛越祖の談と問ふたところ蹉過したぞ。爰で打殺せうすれども放しておくなり。

門云。餠餅。下語云。惡水。齋頭。澆。齋口充塞。無味。談塞。斷人。口。

此の僧高く飛び揚つて超佛越祖の談と問ふたるを、雲門やがて惡僧と見て餠餅と答話せられた。餠餅の意は其の様なることを問ふよりは餅を喫して口を塞いで居よと云ふ儀なり。又。充塞口塞は餅を食つて口を打ち塞いでゐよとなり。又。惡水齋頭澆は今日の學者の上から後語のなき

處を見て截斷して付けた句なり。好僧超佛越祖の談と問ひながら後語のなきは不足ぞと見たぞ。先師曰く超佛越祖の談のところ請益あり下語せよ。下語して云く、山青水綠。師曰く、門云く餠餅の下は如何。下語に云く月白風清。超佛越祖と云ふも根本は什麼の道理もなきことぞ。

第四節 本則評唱和譯

這の僧雲門に問ふ、如何なるが是れ超佛越祖の談。門云く餠餅。還つて寒毛卓豎することを覺ゆるや。衲僧家佛を問ひ祖を問ひ禪を問ひ道を問ひ向上向下を問ひ了りて更に問ふことを得べきなくして、却つて箇の問端を致して超佛越祖の談を問ふ。雲門は是れ作家。便ち水長ければ船高く泥多ければ佛大なり。便ち答へて道く餠餅と。謂つべし道虚りに行せず功浪りに施さずと。雲門復衆に示して云く、備作し了るべきことなくして人の祖師意を道着するを見て便ち超佛越祖の談の道理を問ふ。備且らく什麼を喚んてか佛と作し什麼を喚んてか祖と作して即ち超佛越祖の談と説く。便ち箇の出三界を問ふ。備三界を把り來れ看ん。什麼の見聞覺知の備を隔碍するからん。什麼の聲色佛法の汝に與へて了せしむべきあらん。箇の什麼の碗をか了せん。那箇を以てか差殊の見と爲さん。他の古聖備を奈何んともすることなくして身を横へて物のためにす。箇の舉體全真物々觀體と道ふも不可得なり。我れ汝に向つて道ふも、直下に什麼の事かあらん。早

く是れ埋没し了れり。此の語を會得せば便ち餠餅を識得せん。五祖云く驢屎を麝香に比すと馬糞一に作二所謂る直ちに根源を截るは佛の印するところ。葉を摘み枝を尋ぬるは我れ能はずと。這裏三に到つて親切を得んと欲せば問を持ち來つて問ふこと莫れ。看よ這の僧問ふ。如何なるか是れ超佛越祖の談。門云く餠餅と。還つて羞慚を識るや。還つて漏返することを覺ゆるや。一般の人あつて杜撰にして道ふ、雲門兔を見て鷹を放ち便ち道ふ餠餅と。若し恁麼に餠餅を採つて便ち是を超佛越祖の談として見去らば豈に活路あらんや。餠餅の會を作すこと莫れ。又超佛越祖の會をなさしれ。便ち是れ活路なり。麻三斤解打鼓と一般なり。然も只餠餅と道ふと雖も其の實見がたし。後人多く道理をなして云く、龕言及び細語皆第一義に歸すと。若し恁麼に會せば且らく去つて座主と作つて一生多知多解を贏ち得よ。如今の禪和子道く、超佛越祖の時諸佛も也た脚跟下に踏在し祖師も也た脚跟下に踏在す。所以に雲門只他に向つて餠餅と道ふと。既には是れ餠餅豈に超佛越祖を解せんや。試みに去つて參詳して看よ。諸方の頌極めて多し。盡く門頭邊に向つて言語を作す。唯雲寶のみ頌し得て最も好し、試みに擧す看よ。頌に云く。

【字解】一。門云く餠餅、還つて寒毛卓豎することを覺ゆるや。餠は食を寄するなりと云ふから所謂る食客と云ふ程の意味と見へる。爰の餠餅の餠の字は胡に作る方が宜しい。古抄に麈の惣稱なり胡麻を用ひて餅と作すが故に餠餅と曰ふとあるから胡麻で作つた餅のことであると見へる。これが果して佛意であらうか、祖意であらうか。亦しは超佛越祖の談と云ふものであらうか。絶えて思量分別の容れやうのないものであるが。皆さん如何にして雲門の此の餠餅を契却したものであり

ましよう。思へば實に身の毛もよだつことではありませんかと云ふ。

- 二。雲門復衆に示して云く。これは雲門餘の對機の部に見へてある、文は解し易いから各自に己れの見識を以つて會得するが宜しい。
- 三。五祖云く。五祖法演禪師が海會寺に住山せられる時の上堂に。擧す僧雲門に問ふ如何なるが是れ超佛越祖の談。門云く餠餅。白雲は即ち然らず。忽ち人あつて如何なるか是れ超佛越祖の談と問は、只伊れに向つて道はん驢屎馬糞に似たりと見へて居る。
- 四。直に根源を截るは佛の印するところ。永嘉真覺大師の證道歌の文である。
- 五。龕言及び細語。之れは涅槃經の文で、文字を弄ぶの徒は何かと云へば佛の口眞似をして妙なところへ逃げこんでしまふ。そのやうなやからは所謂る多知多解の徒であるから、某は學生で御坐ると看板を出したが宜しからうと冷かしたものである。

第五節 頌

超談、禪客問偏多。箇箇出來便作道。縫罽披離見也麼。已在言前開也。餠餅壑來猶不住。將木楔子換却。至今天下有請訛。畫箇圓相云莫是恁麼會麼。咬人言【請方】超談の禪客問偏へに多し。箇々出來て來つて便ち道般の見解を作す。麻の如く粟に似たり。縫罽披離するや。已に言前にあり。開なり。自尿は臭を覺えず。餠餅壑し來りて猶は住まます。木楔子を持つて罽が眼睛に換却し了る。今に至りて天下に請訛あり。箇の圓相を畫いて云く是れ恁麼に會することなしや。人の言句を咬んで甚了

期があらん。大地茫茫として人を愁殺せしむ。便ち打す。

【字解】一。箇々出で來つて便ち這般の見解を作す。古今東西何處にも彼處にも、こうした見解をなすものが多い。

二。麻の如く粟に似たり。其の超佛越祖の見解をなすものは麻の如く粟の如くに多いけれども何れも皆圓栗の長くらべに過ぎないのは誠に残念なことである。

三。已に言前に在り。圓悟禪師が。ソレは拙僧が前に確かに見て置いたが。確に未だ如何なるとか問ぬ先きから大穴がいて居つたと云はれるのである。

四。開なり。ソレは口を開いた、大きな穴であつたと云ふ。

五。自屎は臭を覺えず。諺に臭ひもの身知らずと云ふと同じとて、己れにはエライ向上のつもりであるけれども、其れが早や臭氣鼻をついて何とも鼻持ちのならぬものである。そこで古人は猿のセ、ラ笑い御自分の尻が赤うお坐るぞと申されある。

六。木槌子を持つて備が眼睛に換却し了る。木槌子と云ふは珠數の玉に用ふる黒い實で、日本で云ふ木槌子のとであらうと思はれる。今は雲門大師が此の僧が超佛越祖を見て居る玉眼を木槌子の實で以つて入れかへられたと云ふのである。

七。箇の圓相を畫いて云く是れ恁麼に會すること莫しや。これは貴公たちは餅餅と聞けば早くに其の餅餅に取りついでしまうて、斯の様な丸いかたちのものぢやと思ふて居りはせぬかと圓相を畫いて見せたのである。

八。人の言句を咬んで甚の了期があらん。他人の言葉尻ばかりにがちりついて居ては、いつまでたつても始末はつかないぞと云ふのである。

九。大地茫茫として人を愁殺せしむ。古今東西眞實に參究するものがないものであるから。雲門大師の餅餅の酔い甘いな噛み分けるものが一人としてないのは如何にも痛歎の限りであると云ふ。

一〇。便ち打す。此の棒でチト性根がつけばよいがと打ちかゝる。

【讀義】此の一頌も七言四句の絶句體である。超談の禪客問偏へに多し。古今東西凡そ參禪に志

す程のものは何人も競ふて超佛越祖の談論を試みて色々の問端を起すことである。縫罅披離するや。縫罅は衣服などの縫ひ目の綻びて居ること、披離と云ふはその綻びのために袖や襟がはなればなれになつて居る姿である。此の僧は折角超佛越祖の談を試みて斯様に問ふて來たけれども残念なことには其の言端がハヤ疵だらけで誠に見苦しいことである。諸人にそれが見えるかなと云ふ。餅餅壘し來りて猶ほ住まず。これは雲門の本録によると、如何なるか是れ超佛越祖の談と云ふに對して雲門和尚が餅餅と答へたれば、僧は更に進んで這箇什麼の交渉かあらんと拶して來た。雲門はそれに對して灼然として什麼の交渉かあらんと言はれたことが見へて居る。雪竇禪師は之れを持ち出して謠はれたものである。壘は塞也でふさぐと云ふ程のことであるから、雲門が一僧の縫罅の大穴へ餅餅を詰めこんで塞いでやつたけれども、猶ほも住まずに大口を開いて問を續けたと云ふのである。今に至りて天下に請訛あり。それより以來今に至るまで天下參禪のどもは、何れも此の餅餅に嚙りついて、それを四の五のとかみくだかうとして居るけれども、その酔い甘い眞味を味ひ得ないのは誠に痛々しいことであると云ふ。

第六節 頌評唱和譯

超談の禪客問偏へに多し。此の語禪和家偏へに問を受く。見ずや雲門道く、備諸人横に拄杖

を擔つて我れ參禪學道すと道ふて便ち箇の超佛越祖の道理を覓む。我且らく彌に問ん。十二時中行住坐臥屙屎放尿茅坑裏の蟲子市肆買賣羊肉案頭に至つて還つて超佛越祖底の道理有りや。道ひ得る底は出で來れ。若し無くんば我が東行西行を妨ぐる事莫れと便ち下座す。有る者は更に好惡を識らず、圓相を作して土上に泥を加へ枷を添へ鎖を帶ぶ。縫縛披離たり。見るや他問を致すの處、大小大の縫縛あり。雲門他の問處披離たるを見て、所以に餠餅を持つて欄縫に塞定す。この僧猶自ら肯へて住まらず。却つて更に問ふ。是の故に雪竇道く餠餅壘し來れども猶住まず。今に至つて天下誦訛ありと。如今の禪和子只管餠餅上去つて解會す。然らざれば超佛越祖の處に去つて道理を作す。既にこの兩頭に在らずんば畢竟して什麼の處にか在る。三十年後山僧が骨を換へて出て來るを待つて却つて彌に向つて道ん。

【字解】一。茅坑裏の蟲子云云。これはそこの草むらや、ちりつばの中を何處なりとも尋れてきなさい。或は落ちて居ることあらうからと云ふので、若し有れば我が元へと響かしたものである。

二。畢竟して什麼の處にか在る。これはそれなれば山僧の鼻孔裏にあるから。皆さんのぞいて見なさいと云ふのである。

第七節 類則提唱

其一 圓悟換骨

圓悟道三十年後待山僧換骨出來却向彌道。下語云。當頭霜夜月任運

落前溪。

待ニ換骨出來一却向彌道と云ふは話句なり。明眼の人の復生せうと云ふも道理もなきことなり。又向彌道と云ふも何事をか云はうぞ。云ふことのある様に云ふたも道理のなきことなり。道理のなきところを話句に用ひたり。月が落らたらば落ちたまでよ。其れも道理のなきところを話句に用ひたぞ。

第七十八則 十六開士

第一節 本則

擧古有十六開士。成軍作隊。不啻啻。於浴僧時。隨例入浴。擧着露柱。漆水因。頭澆。諸禪德作麼生會。他道妙觸宣明。更不干別人事。作麼成佛子住。天下納僧到這裏。機索也。須七穿八穴始得。一棒一條痕。莫辜負山僧好。撞不着。還曾見德山臨濟麼。

【讀方】古へに十六開士有り。群を成し隊を作して什麼の用處あらん。道の一隊は不啻啻の漢。浴僧の時に於いて例に隨つて入浴す。露柱に撞着す。漆桶什麼をか作す。忽ち水因を悟る。惡水燕頭に澆ぐ。諸禪德作麼生が會せん。他道ふ妙觸宣明。更に別人の事に干からず。作麼生か他を會せん。撲落他物に非ず。成佛子住すと。天下の納僧も這裏に到りて機索不着。兩頭三面にして什麼をか作さん。也。た須らく七穿八穴にして始めて得べし。一條の痕。山僧に辜負すること莫くんば好し。撞着。撞着。選つて曾つて德山臨濟を見るや。

【字解】一。古に十六開士あり。開士は菩薩即ち菩提薩埵と云ふ梵語の義譯で、覺有情、大士又は始士なども翻譯せられる文字である。釋氏要覽には開は達なり明なり解なり士は士夫なり故に多くは菩薩を呼んで開士と云ふと釋してある。此の則の典故は首楞嚴經の卷五の所載でありて、彼の經に、跋陀婆羅并びに其の同伴十六の開士即ち座より起ちて佛足を頂禮して佛に白して言はく、我等先きに威音王佛のみもとに於いて法を聞いて出家す。浴僧の時に於いて例に隨つて入室して忽ち水因を悟る。既に塵を洗はず亦體を洗はず中間安然として所有なきを得。宿習忘るゝことなし。乃至今時佛に従つ

て出家して無學を得せしむ。彼の佛我を跋陀婆羅妙觸宣明成佛子住と名けたまふ。佛國通を問ひたまふ我が所證の如きは觸因を上となすと説いてあるのを、雪寶禪師が抄録して一則の公案として頌古の題にせられたのである。

二。群をなし隊を作して什麼の用處が有らん。人人具足箇々圓成底のことであるのに十六開士とは餘りに多い。そんなに多人數聯合する必要はなからうと云ふのである。

三。道の一隊不啻の漢。諺にも類を以つて集まると云ふことがあるが如何さま十六人の愚僧の寄合であると云ふ。

四。忽ち水因を悟る。水因は即ち水の因縁と云ふことである。學者の説によると。水と云ふものは水素の二に對する酸素一と云ふ割合で出來て居る一の化合物であると云ふことである。して見ると水には本來之れが實體質性であると確認すべきものはないので謂はゆる因縁假和合のもので即ち一時的の現象に外ならぬのである。然るに吾々は此の水を力にして身體を洗ひ清めるとか塵垢をあらひおとすとかと申して居る。誠に妙な考へと申さればならぬ。偕此の十六開士は此の水因の本來空なることを徹底了悟することによりて。それによりて洗はれる身體及び塵垢も因縁假和合のものであると云ふことを悟つたのである。

五。露柱に撞着す。ソレ誰れか知らんが頭を柱にぶつつけた。誰も彼れも盲目であると見へる。

六。漆桶什麼をか作す。煩惱妄念のかたまりである黒人共は、何程磨いたところで白くなる氣遣いはないと云ふのである。

七。惡水驚頭に澆ぐ。水因を悟つたなど云ふのがハヤ無垢の體を穢したものである。元來何の悟るべきものがあらう、此の圓悟はきくも汚はしく思ふと云ふのである。

八。妙觸宣明成佛子住。此の下の長水の疏に「斯の視察に由つて塵觸既に盡き妙觸現前して無生忍を得るを佛子住と名づく。乃至觸を因として道を悟るが故に觸因と云ふ。乃至水因は所觸の因を證するなり。塵體は即ち能觸の緣なり。塵既に染なく體亦常に淨なし。能所幻の如くにして二邊俱に空なり。故に中間觸を覺するの心安然として性に契ふ」云云と釋してある。即ち妙は微妙不可思議の義でありて、觸は六塵即ち色聲香味觸法の中の觸であるから、吾々の身體の總體にどこへでも冷い熱い痛い痒い滑かである澁いと感ずるのが觸である。今跋陀婆羅菩薩が真空の水を以つて真空の體を洗ひ真空の塵垢を洗ふたと云ふ、其の水が菩薩の身體にふれた端的が即ち妙觸でありて、それによりて宣明と顯然分明にその所有の理に悟入して佛子住を成すで、佛子となりて佛地に安住し大悟徹底せられたと云ふのである。一體に大悟徹底する緣にも色々ありて、彼の釋尊が星を見て悟られたのを初め、迦葉の拈華、靈雲の見桃花之れ等は皆眼で色を見て悟つたものである。又香嚴の擊竹の如き東坡の溪聲の如きは、耳で聲を聞いて悟つたものである。然るに今の十六開士は身に觸をうける端的に無所有の理を悟つたと云ふのであるから、そこで妙觸宣明と云ふのである。

八。更に別人の事に干からず。これは元より他人の知つたことではない。即ち冷暖自知と申して自分と自分で明めようより外はないのである。

九。作麼生か會せん。作麼生か是れ妙觸宣明の處。皆さん決して人事とは思はずに審細に參究しなければなりません。

一〇。撲落他物にあらず。撲落は物を打ち落すことと即ち今の妙觸の脱然たる姿を形容したものである。そこで其の妙觸の妙處は他物ではない。人人各自の舉足投地であるぞと提撕して。山河及大地全露法王身必ず妙觸にのみ工夫面をさげるなよとの垂示である。

一一。天下の衲僧も這程に到りて撲索不着。此の成佛佛子住と即ち立地に成佛すると云ふ端的に至りては全く思慮分別を離れたる處であるぞと云ふのである。こゝが淨土門に申す信の一念の味ひであらう。

一二。兩頭三面にして什麼をか作さん。既に是れ妙觸宣明一色一香無非中道であるから、佛子と云ふもハヤ是れ兩頭三面、成住と云ふも既に之れ第二第三である。それであるから。圓悟大師が、皆さんその生れつきのまゝで居なさい。そのゆがんだ面その儘にして誠に有難いところがありますぞと申されたのである。

一三。也た須らく七穿八穴にして始めて得べし。彼の十六開士は妙觸に依つて佛子住を得たと云ふけれども、我が祖師門

下に於ひては何も洗浴にのみ限つたことはない。順逆縦横自在自由でありて、朝には起き夕には寝れ、茶に遇ふて茶を喫し飯に遇ふては飯を喫す。其れが都べて一點の障礙もなく圓轉滑脱無碍自在でなければならぬといふのである。

一四。一棒一條の痕。イヤ七穿の八穴のと云ふにも及ばぬ、一棒一條の痕さへあれば澤山であると語句についてまはるゝとめたのである。

一五。山僧に辜負すること莫くんば好し。既に八穴七穿と云ひ一棒一條と云ふがハヤ本分に背いたものよと云ふのである。

一六。撞着撞着。一切時一切處往くとして還るとして妙觸宣明ならぬところはないのである。

一七。還つて曾つて徳山臨濟を見るや。彼の徳山の棒臨濟の喝、皆悉く妙觸宣明の端的であると祖門の妙觸宣明を提示したのである。

第二節 本則提唱

古有十六開士。於浴僧時。隨例入浴。忽悟水因。下語云。和混合水。泥裡洗。土塊。耳朶。兩片。皮。

十六開士は菩薩の初官なり初地とも云ふ。跋陀婆羅菩薩も十六開士の内なり。風呂に祭つて置く浴司なり。サテ水浴悟水因と云ふも皆色相の上のことよ。泥の身を泥にて洗ふたほどのことよと學者の上から截斷してみたぞ。根本の上には水因と云ふことも悟ると云ふこともなきことなり。

諸禪德作麼生會他道。觸宣明成佛子住。下語云。土上加泥。

先師曰く其の意旨如何。云く七九六十三。妙觸宣明は物に觸れて悟るを云ふ。靈雲は桃花を見て悟り、香嚴は撃竹を聞いてさとする是れなり。佛子住を成すとは本分に住するなり。妙觸宣明も明眼から見れば土上に泥を加へたものよ。畢竟色相の上のことなり。

也須七穿八穴始得。下語云。前三々後三々。

成佛子住と云ふも色相の上のことよと散々に碎いてみるところが七穿八穴ぞ。

第三節 本則評唱和譯

楞嚴會上の跋陀婆羅菩薩十六の開士と各々梵行を修す。乃ち各々所證の圓通法門の因を説く。

此れ亦二十五圓通の一數なり。他因みに浴僧の時例に隨つて浴に入つて忽ち水因を悟る。云く既に塵をも洗はず亦體をも洗はずと。且らく道へ箇の什麼をか洗ふ。若し會得し去らば中間安然として所有なきことを得ん。千箇萬箇更に近傍することを得ず。所謂無所得は是れ眞の般若なるを以てなり。若し所得あらば是れ相似の般若なり。見すや達磨二祖に謂つて云く、心をもち來れ汝がために安せん。二祖云く心を覓むるに了に不可得なりと。這裏の些子は是れ消僧性命の根本更に總に如許多の葛藤を消得せず。只箇の忽ちに水因を悟ると道ふことを消せば自然に了當せ

ん。既に塵をも洗はず亦體をも洗はず、且らく道へ箇の什麼をか悟る。這般の田地に到つて一點も也た着ることを得ず。箇の佛の字を道ふも也た須らく諱却すべし。他道ふ妙觸宣明成佛子住し。宣は則ち是れ顯なり。妙觸は是れ明なり。既に妙觸を悟れば佛子住を成して即ち佛地に住す。如今の人も亦浴に入り亦水に洗ふ。也た恁麼に觸る。甚に因てか却つて悟らざる。皆塵境に惑障せられて皮に粘き骨に着く。所以に便ち惺々にして去ること能はず。若し這裏に向つて洗ふも亦無所得。觸も亦無所得、水因も亦無所得ならば且らく道へ是れ妙觸宣明か、是れ妙觸宣明にあらざるか。若し箇裏に向つて直下に見得せば、便ち是れ妙觸宣明成佛子住なり。如今の人も亦觸る。還つて妙處を見るや。妙觸は常の觸の觸るゝものと合すれば則ち觸となる。離るれば則ち非なるに非ざるなり。玄沙嶺を過ぎて脚指頭に磕着す。以つて徳山の棒に至る豈に是れ妙觸にあらざるや。然も恁麼なりと雖も也た須らく是れ七穿八穴にして始めて得べし。若し只身に向つて摸索せば什麼の交渉かあらん。爾若し七穿八穴にし去らば何ぞ須るん浴に入ること。便ち一毫端上に於てい寶王刹を現じ微塵裡に向つて大法輪を轉す。一處透得すれば千處萬處一時に透る。只一窠一窟を守ること莫れ。一切處都て是れ觀音入理の門。右人亦聞聲悟道見色明心あり。若し一人悟り去るとは則ち故らに是。甚に因てか十六の開士同時に悟り去る。是の故に古人同修同證同悟同解す。雪竇他の教意を拈して人をして妙觸の處に去つて會取せしむ。他の教眼を出して頌して

得て人の教網裏に去つて籠罩して半醉半醒なることを免れ、人をして直下に灑々落落たらしめんことを要す。頌に云く。

- 【字解】一。跋陀婆羅菩薩。跋陀婆羅と云ふは梵語でありて、爰に護賢。善守。賢守或は賢首など、翻譯をする。古人は自ら賢徳を守護し復た衆生を守護し乃至位衆賢者の上首たるが故にと釋して居られる。首楞嚴經には、善能守護して妄をして起さしめず覺をして動せざらしむるを以つて跋陀婆羅と名づくといひてある。禪寺の浴室に此の菩薩が祭つてあるのは此の公案の水因圓通の說に基いたものであつて、其の姿は普通僧形に袈裟を着して居られるから、恐らくは此の楞嚴の文に基いたものであらう。大寶積經の無盡悲菩薩會には、十六の在家の菩薩あり跋陀婆羅を上首となすと云ひ、又智度論には善守等の十六の菩薩は是れ居家の菩薩なり。跋陀婆羅居士は是れ王舍城の舊人なりとある。此の時は在家の菩薩と見へる。
- 二。箇の佛の字を道ふも也た須らく諱却すべし。既に一切不可得眞空であつて見れば、如來と云ひ佛と云ふも、之れ假りに立てた名義であるからして、此の名からしてハヤ既に本分の徳を穢したものと云はればならぬ。そこで聞くだにも穢はしいと云ふのである。
- 三。玄沙嶺を過ぎて脚指頭に磕着す。玄沙は玄沙山の師備禪師である。傳には此の事實を、玄沙初め雪峰に謁し後諸方に遍歴し知識を參尋せんと欲して囊を携へて嶺を出づ、石に脚指頭を築著して流血痛楚す。然々として猛省して云く、是の身有にあらず痛何れより來ると。遂に即ち雪峰に回ると申してある。
- 四。徳山の棒。徳山の宣鑿禪師の傳に、往山に出世す、佛殿に立たず。凡そ僧の門に入るを見ては便ち棒すと見へてある。
- 五。古人亦聞聲悟道見色明にあり。香嚴和尚の擊竹の如き靈雲禪師の見桃の如きを拈したのである。

第四節 頌

了事、衲僧消^ス一箇^ヲ、現有一箇。朝打三千暮打八百。長連床上展^レ脚臥^ニ。果然是箇^ハ。論^ハ不^レ論^ハ。夢中曾^テ說^キ悟^ル圓^通。一箇^ハ。早是^ハ。寐^ニ更^ニ說^キ夢^ヲ。却^{シテ}許^ス。香水洗^ヒ來^ニ。慕^シ面^ヲ唾^ス。土上加^ヘ泥^ヲ。又一^ハ。論^ハ。寐^ニ語^シ作^ル什麼^ヲ。却^{シテ}許^ス。朝打三千暮打八百。金剛圈を跳出^ス。一箇も也た消得^ズ。長

【讀方】了事の衲僧一箇を消す。現に一箇あり。朝打三千暮打八百。金剛圈を跳出す。一箇も也た消得せず。長連床上に脚を展べて臥す。果然として、是れ箇の臨睡の漢。劫を論じて禪を論ぜず。夢中曾つて説く圓通を悟る。早く是れ臨睡して更に夢を説く。却つて爾に夢見することを許す。寐語して什麼をか作さん。香水洗ひ來るも慕面に唾せん。唯、土上に泥を加ふること又一重。淨地上に來つて歸する、莫れ。

- 【字解】一。現に一箇あり。其の一箇とは誰人であらう。雪竇貴公であるかなと云ふのであるが。皆さん人事と聞いてはなりませぬぞ。
- 二。朝打三千暮打八百。其一個にも半個にも圓悟の處には用はないから、若しも我こそ了事の一箇ならめと云ふものがあつたならば、此の圓悟が終日打つて打つて打ちのめして呉れようぞと云ふのである。
- 三。金剛圈を跳出す。金剛は堅固頑牢なるものでありて、圓は圓盤即ち盤のことである。堅固頑牢で到底跳り出ることの出来ないやうな金剛の盤であつても、眞箇了底の衲僧であれば出やうともはいらうとも自由自在であると云ふのである。
- 四。一箇も也た消得せず。これは一箇半箇も跳出底のものがないと云ふのである。
- 五。果然として是れ箇の臨睡の漢。果して例の癡げ先生で實に役たすである、實は迷悟染淨一切を超越した臨睡三昧の衲僧であるのを讚歎したのである。

- 六。劫を論じて禪を論ぜず。無量永劫の長の間全く臨睡三昧に入りて禪道佛法など更に了得する時期があるまいと超越底の衲僧を讚歎したものである。
- 七。早く是れ臨睡して更に夢を説く。これは雪竇禪師に向つて貴公が其の謔も定めて臨睡中の癡言であらうと云ふのである。
- 八。却つて爾に夢見することを許す。其の圓通を悟つたと云ふことも夢であると云ふならば是非もないから、先づ且く許して置かう故に、こゝへもつて來てみられよ。楽しい夢ならば拙僧も仲間入りなと云ふのである。
- 九。寐語して什麼をか作さん。幾ら面白い謔でも寐語では何の役に立たぬと云ふのである。
- 一〇。唯。雪竇和尚に向つて、貴公馬鹿なこと仰せられる、それも穢れよと云ふのである。
- 一一。土上に泥を加ふること又一重。雪竇禪師に向つて貴公がこゝ頌出せられたさへ、全く土上に泥を加へたものと云ふのである。
- 一二。淨地上に來つて歸すること莫れ。四の五のと色々文字の上で申したところで、所詮淨地に歸するやうなものであるから、黙つて長連床上に脚を展べて眠るに如かずと云ふのである。

【講義】了事の衲僧一箇を消す。經には既に一人眞を發して十方虚空消殞すと説いてあるから、何も十六開士など、大勢の聯合を待つべきではない。眞に祖師門下に於いて心事を了得し終つたる衲僧であれば只一人で充分であると云ひつゝ、昔は十六の開士一時に佛子住を成したと云ふが、末世澆季の悲しさ一人の心事を了得するものなきは實に悲しいことであると歎かる。長連床上に脚を展べて臥す。長連床と云へば通常禪林の僧堂で單と稱する處で、長い床を設けて多くの僧

が一行に坐禪をするに便利なやうに禪座が設けてある。そこで脚を展べて臥すと云ふのであるから、如何にも太平無事の境界で、既に心事を了悟し畢りた衲僧は、一切總べてを超越して居るから上に求むべき佛果もなければ下に厭ふべき迷ひもなく、證すべき眞理もなければ斷すべき煩惱もない、全く無事安穩の妙境界で只枕を高く脚を長く、グウ〜と高いびきの瞌睡三昧の樂みである。夢中會つて説く圓通を悟ると。楞嚴會上の二十五菩薩が代る〜圓通の法を説かれたので、其中の一人たる跋陀婆羅菩薩も十六人の開士と共に此の妙觸宣明を以て自家の圓通を説かれたことであるが。そも迷悟は之れ夢の中のことでありて、迷と云ふも夢、悟と云ふも夢、苦しかつたも夢なれば、樂しかつたも夢である。それ故に廿五菩薩の圓通法門も皆悉く夢中に夢を説いて居るやうなもので、即ち夢の世の夢ものがたりであるから、さめて見れば一切皆空である。古人が法身覺了すれば無一物とは謠はれたも蓋し此の意味に外ないであらうと思ふ。譬へば迷は夢の中で病氣に罹つたやうなもので、悟は其の病氣が全快した夢を見たやうなものである。されば一旦其の夢が覺めた上には病氣も夢なれば全快も夢であるがやうであるのである。香水洗ひ來るも慕面に唾せんと。さればよし香水で洗ひ來りても、其の香水で洗ひ來つたところ、無垢清淨にて香氣馥郁たるところ、そこが即ちハヤ汚穢と云ふもので、たとへば眞正の美人は美を粧はないはずのものである。若しも之れに一點の紅粉の氣がありたならばそれはハヤ穢れた美人である。さればとてこれ

が天然の素顔の美であると云はゞその天然と云ふのにハヤ天然の本分を穢した意味が含まれて居る。それ故に左様な穢れたものは我れ雪竇は慕面に唾を吐きかけて、その穢れをはらひくれようと云ふのである。蓋し此の一頌は敎家者流が輒もすれば迷悟染淨の理路に滯ふり、言論に執着せるを彈呵して、祖師門下の活潑々地なる宗風を舉揚せられたもので。本分と云ふだに汚れ。一切悉く汚れであるぞと直下に洒々落々たらしむる雪竇の爲人である。

第五節 頌評唱和譯

了事の衲僧一箇を消すと。且らく道へ箇の什麼の事をか了得する。作家の禪客聊か擧着するを聞いて剔起して便ち行く。恁麼の衲僧に似たる。只一箇を消得す。何ぞ用ゐん群を成し隊を作すことを。長連床上脚を展べて臥す。古人道く明々として悟法なし。悟了せば却つて人を迷す。長く兩脚をのべて睡れば僞もなく亦眞もなしと。所以に胸中一事なし。飢來れば飯を喫し、困し來れば眠る。雪竇の意に道く、爾若し浴に入つて妙觸宣明を悟得すと説かば、這般無事の衲僧分上に在つては只夢中に夢を説くに似たり。所以に道ふ夢中會つて圓通を悟ると。香水洗ひ來るも慕面に唾せんと。恁麼に似たるも只是れ惡水慕頭に澆がん。更に箇の什麼の圓通とか説かん。雪竇道く這般の漢に似たるも正に好し慕頭慕面に唾せん。山僧は道ふ土上に泥を加ふ又一重

と。
 【字解】一。古人云く。これは夾山善會禪師の語である。僧あり問ふ從上より祖意教意を立つ和尙此の間什麼としてか無と言ふ。師曰く三年飯を食せず目前に饑人なし。曰く饑人なくんば某甲什麼としてか悟らざる。師曰く悟らんとするが爲に闇黎を迷却すと。師頌を説ひて曰く、明々として悟法なし、悟法却つて人を迷す。長く兩脚を展べて睡る。偽もなく亦眞もなしと云ふのである。

第七十九則 一切聲佛聲

第一節 垂示

垂示云。大用現前。不存軌則。活捉生擒。不勞餘力。且道。是什麼人。曾恁麼來。試舉看。

【讀方】大用現前軌則を存せず。活捉生擒餘力を勞せず。且らく道へ是れ什麼人が曾つて恁麼に來る、試みに舉す看よ。

【講義】大用現前軌則を存せず。本分の大善知識が參學の雲衲を接化せらるゝ大機大用は縁にふれ機に應じて縦横無盡出沒自在に働かれるのであるから、決して定まりきつた杓子定軌にかゝはつて必ず斯うでなければならぬと云ふことはないのである。活捉生擒餘力を勞せず。相手の衲僧を生け捕りにして丸めようが、こねようが思ふがまゝで、何の骨も折らずに易々と凱歌を奏する。且らく道へ是れ什麼人が曾つて恁麼に來れる。然らばそう云ふ實例が古人にあるのであらうかどうであらうと云ふに、爰に幸にも好適例があるからそれを看よとて試みに舉す看よ。

第二節 本則

擧僧問。投子。一切聲。是佛聲。是。否。也。解。釋。自。尿。不。覺。臭。投子云。是。身。與。你。了。也。拈。放。一。邊。是。僧云。和。尚。莫。尿。沸。碗。鳴。聲。只。見。錐。頭。利。不。見。鑿。頭。投子便打。着。好。打。放。什麼。心。行。僧云。和。尚。尿。沸。碗。鳴。聲。方。道。什麼。果。然。納。敗。缺。投子便打。着。好。打。放。又。問。龐。言。及。細。語。皆。歸。第。一。義。是。否。第。二。回。持。虎。鬚。地。藏。叫。屈。作。投子云。是。是。又。賣。身。與。你。了。也。陷。虎。僧云。喚。和。尚。作。一。頭。驢。得。麼。只。見。錐。頭。利。不。見。鑿。頭。方。雖。有。逆。之。機。也。是。什麼。心。行。僧云。喚。和。尚。作。一。頭。驢。得。麼。水。之。波。只。是。頭。上。無。角。含。血。噴。人。投子便打。着。不。可。放。過。好。打。拄。杖。未。到。折。因。什麼。便。休。去。

【讀方】 僧あり投子に問ふ一切の聲は是れ佛聲なりとは是なりや否や。也。虎鬚を持つることを解す。青天に霹靂を轟かす。自尿の臭きを覺えず。投子云く是。一船の人を賊殺す。身を賣りて爾に與へ了れり。一邊に拈放す。是れ什麼の心行ぞ。僧云く和尚尿沸碗鳴聲すること莫れ。只錐頭の利を見て鑿頭の方なるを見ず。什麼と道ふぞ。果然として敗缺を納る。投子便ち打つ。着。好打なり放過せば不可。又問ふ龐言及び細語皆第一義に歸すと是なりや否や。第二回の虎鬚を持つ。驢を抱いて風と叫んで什麼をか作さん。東西南北猶ほ影響の在るあり。投子云く是。又是れ身を賣つて爾に與へ了れり。陷虎の機。也。是れ什麼の心行ぞ。僧云く和尚を喚んで一頭の驢と作し得てんや。只錐頭の利を見て鑿頭の方なるを見ず。逆水の波ありと雖も只是れ頭上に角なし。血を含んで人に嘔く。投子便ち打つ。着。放過す可からず。好打拄杖未だ折るに到らず什麼に因てか便ち休し去るや。

【字解】 一。僧投子に問ふ等。投子と云ふは、舒州投子山の大同禪師のことである。禪師は舒州の懷寧縣の人で姓は劉氏の出である。保唐の滿禪師の室に入りて華嚴宗を學べられたが、後翠微山の無學禪師に謁して遂に其の法を得られた。得法の

後には諸國を遍歴して諸大德を訪ねられたが、後ち故郷へ歸りて投子山に庵をかまへて參學の雲衲を接せられること三十餘年。投子山の第二世溫禪師を始めに付法の者十有三人を得られた。常に實頭で又能辯家であると云ふので幾多の雲衲が門前につめかけて居つたものである。乾化四年の四月六日と云ふに九十六の高齡で跏趺坐のまゝで遷化せられた。慈濟大師と云ふが即ち師のことである。一切の聲は此れ佛聲なりや否や。これは法華經の常不輕品。梵天所問經等を始め色々の經典に散説せられて居ること、世の中の都べての音聲。即ち人天鬼畜の音聲を始め、雨竹も松風も溪聲も鳥語も皆悉く佛陀の音聲でありてゆはゆる念佛念法念僧の聲ならざるはないと云ふのであるが、然しこれは態々と佛聲である佛陀の音聲であるなど、云はなくとも、松風は松風のまゝ、溪聲は溪聲のまゝで何の不足もなければ何の差し障もないのである。であるから投子禪師は此の問ひの言下にドシンと三十棒をあたられたかと云ふと、サスガにそうはせられない。投子云く是。如何にもそうぢや。貴公の申す通りぢやと十分に放行して此の僧の第二問を釣り出された。スルト果して此の僧は、僧云く和尚尿沸碗鳴聲することなかれと釣り上げられて來た。尿は尾數なり尻なりで即ち腔門のことである。その腔門の沸々の聲がすると云ふのであるから、勿論どこか胃腸に異状があるためにしきりに便所がよひをすることであらう。碗鳴は文字の示す如く塗物の碗の中へ熱湯を注ぐと云ふとフツ／＼とあはを立てるおとがする。あの音のことである。即ち此の僧が和尚に向つて、一切の音聲が悉く佛陀の音聲であると申しますとアの尿沸も碗鳴も皆佛聲と云ふことになりまして、スルト尊師の御說法と何の擇ぶところもございませんとつきこんできた。此れが即ち破れ大乘の惡平等である。スルト禪師は即ち打すとドシンと打棒一下してソレの音も佛聲であるぞと釣竿をグイと引き上げられてしまつた。爰で大抵のものならば此に於いて者ありと目がさめることであるが、此の僧は餘程の鈍漢であつたと見へてまだ目がさめない。即ちすぐに。又。龐言及び細言皆第一義諦に歸すと是なりやと拷問してきた。之れは涅槃經の第二十卷目に出て居る偈文であつて、意味は、如何なる龐暴な言葉でも又如何やうに丁寧なる話でも皆同じく中道第一義の眞諦に契けないものはないと申しますが果して左様でござりますかと云ふのである。禪師は是なりソウぢやそれにながひないと答へられる。スルト此の僧は禪師に向つて和尚を喚んで一頭の驢となし

得てんや。ソレぢやそれなれば私が導師に向つて此の腐れ鹽めと申し上げても差し支へはないやうに存じますが宜しうござりますかと抄問に及んだ。投子便ち打す。ドシンと彼の文によりて義を解し語に着して意を取つた此の破れ大乗の似而非學者をなぐりつけた。どうも前と同じ軌轍を履んだやうで面白くはないけれども勢いの趣くところ萬止むことを得ざる次第である。

- 一。也た虎鬚を培つることを要す。此の僧は命知らずの大膽者であると云ふ。盲人蛇におぢすと云ふことであらう。
- 二。青天に霹靂を轟かす。何にもせう藪から棒の質問である。蛇が出ればよいがとあやぶむ。
- 三。自尿は臭きを覺へず。臭いものゝ身しらずには困つたものであると云ふ。
- 四。一船の人を賊殺す。此の僧一人をつり出すために満堂の衆僧が悉くすかされたと云ふのである。
- 五。身を賣りて爾に與へ了れり。これは投子和尙は自分の身をなげ出して此の僧に自由にさせようとの心組みと見へると云ふのである。
- 六。一邊に拈放す。これは物を一方へ片づけて置くことであるから、即ち此の僧の間を是と片隅みへよせ附けて置いたと云ふのである。
- 七。是れ什麼の心行ぞ。皆さん投子和尙が是と答へて此の僧の間に任せた機鋒が解せますかなと云ふのである。
- 八。只雞頭の利を見て顰頭の方を見ず。此の僧は投子和尙が實頭に優さしく是なりと答へられた所だけを見て、其の底に陷虎の機のあることを知らないやうであるが、實に淺薄な見解であるぞと抑へたものである。此の僧は何んでも近視眼であつたと相違ない。
- 九。什麼と道ふぞ。エ、何と申されると聞きとがめる。
- 一〇。果然として敗缺を納る。モ、此れで此の僧は大敗北であるぞと云ふのである。
- 一一。着。サテも心知よい作略である。しめたものぢやと感嘆する。

一二。好打なり放過せば不可。サモも好い打ち處である。この手ゆるしてはなりませんと云ふ。

一三。第二回虎鬚を捋つ。先き程猛虎に咬みつかれたにも懲りず又しても大膽なことをすると答めて盲目蛇におぢすと評する。

一四。臍を抱いて屈と叫んで什麼をか作なん。自分の懐に臍品を抱いたまゝで法官の取調べを受けて居りながら。イヤ屈辱で候ふの無實で候ふのなど、白々しく云ひ譯けをしたところで。所詮事實のあがつたことであるから、所罰をうけるより外はあるまいと云ふ。

一五。東西南北猶は影響の在るあり。此の僧は此處彼處とあさりまはつて種々の經文を聞きかぢつたり理窟を覺へたりした習慣があるために、やゝもすればその言葉がうかび出るのである。此れを阿房の一つ覺へと申すと評する。

一六。又是れ身を賣つて爾に與へ了れり。投子和尙は又も十分に餌をつけて釣糸を垂れられたけれども、定めしよい得物もなからうと云ふ。

一七。陷虎の機。ソレ陥し穴ぞ。落ちこむなよと注意する。

一八。也た是れ什麼の心行ぞ。皆さん投子和尙が是と答へられたあの意味が解りますかなと云ふ。

一九。逆水の波ありて只是れ頭上に角なし。此の僧の抄問する調子文は如何にも驀龍が波を蹴立て、昇天する如き勢であるけれども、悲しいことには頭の角とも見るべき實參實證の宗眼がないと云ふ。

二〇。血を含んで人に嘔く。之れは四拾二章經に見えて居る佛誡である。人を罵ると云ふことは丁度血を含んで人にふきかける様なのであるから、相手の人を汚さない前に先づ己れの口を汚すのであるぞと云ふのである。古人も風に因つて火を吹けば力を用ゆること少なからず、血を含んで人に嘔けば先づ其の口を汚すと申して居られる。

二一。着。如何にも心持よい打ち方であると感服する。

二二。放過すべからず。いかさま許すべき處ではありませぬと云ふ。

二三。好打拄杖未だ折るゝに到らず。什麼に因りてか便ち休し去るや。拄杖のへし折れるまで打ちすへてやればよいに
惜しむ。

第三節 本則評唱和譯

投子朴實頭はくじつとうにしく逸群いつぐんの辨べんを得たり。凡そ問を致すこと有つて口を開けば便ち膽たんを見る。餘力あまりちからを費やさずして便ち他の舌頭ぜつとうを座斷ざだんす。謂つ可し籌ちゆうを帷幄わいよくの中に運ゆして勝かちを千里せんりの外に決すと。この僧聲色佛法しやうしきぶつぽふの見解けんげをもつて他の額頭かくとう上に貼て在ざいして人に逢あふて便ち問ふ。投子とうすは作家さつかなり、來風らうふう深く辨べんす。この僧投子の實頭じつとうなることを知つて直下じきげに箇の圈續子げんくわいすを做なして投子とうすをして入り來らしむ。所以ゆゑに後語こうごあり、投子却かへつて陷虎かんとの機きをして他の後語こうごを釣つり出し來る。この僧他の答處たふしよを接せして道みちふ、和尚わうしやう尿沸せうふ碗鳴わんめい聲せいすること莫なれと。果然くわぜんとして一釣いつつ便ち上ある。若し是れ別人べつじんならば則ちこの僧を奈何いかんともせず。投子は具眼ぐげん後に隨つて便ち打つ。咬猪狗底かうちやくていの手脚しゆあしなり。須すらく作家さつかに還かへして始めて得べし。左轉さてんも也た他に隨つて阿轉あてん々地ぢ。右轉うてんも也た他に隨つて阿轉あてん々地ぢ。この僧既に是れ箇の圈續子げんくわいすを做なして來つて虎鬚こすうを挿さんことを要す。殊に知らず投子更さらに他の圈續頭上げんくわいづじやうに在ざいることを。投子便ち打つ。この僧可か惜しやく許こ。頭あつて尾びなし。當時たうじ他の棒ぼうを拈ねんせんことをまつて便ちために禪床ぜんじやうを掀倒きんたうせば、たとひ投子全機ぜんきなりとも也た須すらく倒退たうたい三千里さんせんりすべし、又問またとふ危言きげん

及び細語さいご皆第一義みなだいいちぎに歸きすと是なりや否や。投子亦また云く、是と。一に前頭ぜんとうの話わに似にて異なることなし。僧云く和尚わうしやうを喚よんで一頭いちとうの驢ろと作し得てんや。投子又打つ。この僧然も巢窟そうくつをなすと雖も也た妨さまたげず奇特きとくなることを。若是れ曲糸きよくうし木床もくじやう上の老漢らうかん、頂門上ちやうもんじやうに眼まなこなくんば也た他を打挫せつざし難し。投子轉身てんしんの處あり。この僧既に箇の道理だうりを做なして他の行市あんしを撥ひかんことを要す。到り了れば舊きうに依つて投子老漢らうかんを奈何いかんともせず。見すや嚴頭道げんとうだうく、若し戰たふみを論ろんせば箇々轉處てんじよに立在りやうざいすと。投子放去はうきよは太はな遅なく收來しゆうらいは太はな急きふなり。この僧當時そのかみ若し身みを轉てんじ氣きを吐はくことを解げせば豈あに箇の口血盆くちつぱんに似たる底ていの漢かんと作り得えざらんや。衲僧家なつせうけ一做いちじやうせざれば二休にきうせず。この僧既に擲却てきやくすること能はず。投子とうすに鼻孔びこうを穿せん了れうせらる。頤いに云く。

【中解】一。この僧聲色佛法しやうしきぶつぽふの見解けんげをもつて云々。聲色佛法と云ふことは梵天所問經及び法華經の常不輕品などに見へて居る。世の中の都べての音聲たとへば雨聲うせいの如ごとき、松風しやうふうの如ごとき、波の音も鳥の聲も水の流るゝ音も太鼓のなる音も情非情一切の音聲は悉く佛陀獅子吼の大音聲であると云ふことである。これを法華の文句には、又云く種々の法門を以て佛道を宣示す。當に知るべし種々の聲教若しくは微若しくは著、若しくは權若しくは實皆な佛道となつて差躰せんたいをなすと云ひ、古人は松は吹く説法渡生の聲。又は溪聲或は長廣舌ちやうくわうじゆならんなどと諺つて居られる。思ふに此の僧は此等の説を十全至極のものであると心得へて、それを鼻の先せんにぶらさげて、投子和尚わうしやう勘檢かんけんと出かけて來たものであらう。

- 二。來風深く辨す。この風か何處から吹いて來たかと云ふことを投子は能く心得へておられると云ふのである。
- 三。陷虎の機。猛虎を陥れるの機合と云ふことでありて即ちどこまでも敏捷で一寸の隙間もない機鋒と云ふことである。
- 四。咬猪狗底の手脚なり。狼や猛虎のやうな手脚であると云ふのである。

- 五。左轉右轉。順逆縱橫右へでも左へでも全く自由自在である。
- 六。當時他の棒を拵せんをまつて云々。若しも此の僧が本統の作家でありたならば、投子がまさに棒をふりあげんとする途端にケイと其の棒をねぢあげてスボンと禪床を掀倒してやれば好かつたに。此の僧が此の作略に出ることが出来なかつたのは残念であると云ふのである。
- 七。他の行市を挽んことを要す。投子の店を奪はんとしたと云ふのである。

第四節 頌

投子 投子 灼然天下無道實頭 機輪無阻 有什麼奈何他 放一得二 換却爾眼睛。什
 同彼同此 也。恁麼來也。喫棒不恁麼來 可憐無限 弄潮人。叢林中放出一箇半箇。放出。畢
 竟還落二潮中一死。不得。恁麼許。爭奈出這箇。忽然活。禪床震動。驚殺山。百川倒流。鬧
 漸。漸。子老漢也。須是拗折拄杖始得。

【讀方】 投子投子。灼然。天下に這の實頭の漢なし。人家の男女を教壞す。機輪阻て無し。什麼の他を奈何とする處
 あらん。也。た些子あり。一を放ちて二を得たり。爾が眼睛を換却す。什麼の處にか投子を見ん。彼に同じく此れに
 同じ。恁麼にし來るも也。た棒を喫し不恁麼にし來るも也。た棒を喫す。鬧黎にして他に替るも便ち打たれん。憐むべし限無
 き潮を弄する人。叢林中一箇半箇を放出す。這の漢を放出す。天下の衲僧恁麼にし去る。畢竟還つて潮中に落ちて
 死す。可惜許。爭奈せん這の箇。出ることを得ず。恁人恁人に向つて説くこと莫れ。忽然として活せば。禪床震

動す。山僧を驚殺せしむ。也。た倒退三千里。百川倒まに流れて鬧漸々たらん。噯。徒らに佇思に勞す。山僧も
 敢へて口を開く。投子老漢も也。た須らく是れ拄杖を拗折して始めて得べし。

- 【字解】 一。灼然。雪竇和尚に向つて、貴公が申さるゝ迄もなく、天下の人誰れ知らぬものなき老作家であると云ふ。
- 二。天下に這の實頭の漢なし。實に天下唯一の實頭なる名知識である。
 - 三。人家の男女を教壞す。實に油断のならぬ老僧家であるから、皆さんウツカリして誰かされてはなりませんと云ふ。
 - 四。什麼の他を奈何とする處あらん。其の機輪に阻てなき働きに對しては誰人も手の出しやうがありませんと云ふ。
 - 五。也。た些子あり。若し某であれば彼れが禪床を掀倒して矣れやうものなと云ふ。
 - 六。爾が眼睛を換却す。此の僧は青天白日に眼玉をすりかへらるゝを知らぬ鈍漢であるから、到頭眼玉をすりかへ
 れてしまつたと云ふ。いかさまあの眼玉は木樓子の實に相違ありません。
 - 七。什麼の處にか投子を見ん。把住放の自在なる實に神出鬼没であるによつて、此れが投子の立場であると云ふところ
 をどうして見定めることが出来やうぞと云ふのである。
 - 八。恁麼にし來るも也。た棒を喫し不恁麼にし來るも也。た棒を喫す。何う手を換へて幾度つきかいつて來ても所詮免れるこ
 との出來ぬ棒であるから、どうしても棒を喫するより外はあるまい。
 - 九。鬧黎にして他に替るも便ち打たれん。これは雪竇禪師に向つてそう申される貴公が、此の僧に代つてせめよつて見た
 ところ、所詮喫棒は免れぬであらうと云ふのである。
 - 一〇。叢林中一箇半箇を放出す。天下の叢林廣しと雖も二人とは此の投子のやうな人はなからうとの讃嘆である。
 - 一一。道の漢を放出す。あの打たれた漢でははどうかやなと野次る。
 - 一二。天下の衲僧恁麼にし去る。滔々たる天下三千の衲僧が、何れもこのやうな高心空腹の徒ばかりであるとは偈も歌か
 はしいことである。

- 一三。可惜乎。死ぬまい處で死んだとは惜々残念なことである。
- 一四。争奪せん道の園穢を出ることを得ず。何人といへども此の佛法禪道の檻に中々出られるものでないと云ふ。佛法大海に死在すと云ふがこのことである。
- 一五。愁人愁人に向つて説くこと莫れ。お互に斯んな悲しい經驗談は止すことにしよう。昔は實に千辛萬苦で思ひ出すだに涙の種であると言實修行の容易ならぬことを示される。
- 一六。禪床震動す。投子和尚に向つてイヤ此の僧が蘇生つて来たやうであるから、御注意をなさらぬと其の禪床を掀倒せられますぞと云ふ。
- 一七。山僧を驚殺せしむ。イヤ驚いたなと圓悟も喫驚する。
- 一八。也た倒退三千里。これには三十六計つきて所詮逃ぐるより外はあるまいと警める。
- 一九。徒らに竹思を勞す。サテ此の處に至つては如何なる衲僧でも直ちに打つと云ふわけにはゆくまいと云ふ。
- 二〇。噉。サテ／＼喰糧なことになつて来た、皆さん油断をなさるなよと云ふ。
- 二一。山僧も敢へて口を開かず。隨分口の達者な某であるけれども、これには何とも云ふて見やうがないと云ふ。
- 二二。投子老漢も也た須らく是れ拄杖を拗折して始めて得べし。投子老人もサスガに此れには尾をまかれるであらうと云ふ。

【講義】 投子投子。淨土門の信徒が南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛と唱名念佛して極樂往生を願ふやうに投子投子と口に大同禪師のお名號をとへて追慕の至情を表する。機輪阻てなし。之れは投子和尚の與奪自在なる機用には寸分の隙間もないことを諳ふたものである。阻は阻碍の義であるから。阻てもなくと云へば自由自在思ふが儘と云ふことである。一を放ちて二を得たり。投子和

尚は是と云ふ一字の餌でもつて兩度迄も釣糸を垂れて、彼の僧に痛棒を食はせた機用は實に神出鬼没で端倪すべからざるものがある。彼れに同じく此れに同じ。彼れと云ふは是と許して與へたところ。此れと云ふは打つて奪つたことである。此の前後の作略は全く同一轍でありましたが。皆さん此の機用こそ是非とも參究しなければなりません。憐むべし限りなき潮を弄する人。投子和尚に對するの頌は次ぎ上の句で済んだから、これからは彼の一僧を評して後學の龜鑑に供するのである。獨り彼の僧のみに限らない。世の中の多くの參禪の士は、折角大海に游泳して満ちたり干たりする潮を弄して居りながら、眞實の求道の念がないものであるからして、或は佛祖の文字言句にのみ拘泥し、或は人前ばかりの座禪觀念に浮き身をやすし。甚だしきに至りては座禪は甚だ衛生的であるなど、申して、禪を何か病氣を治するてだてのやうに心得へて居る。實以つて憐むべきものと申さねばならぬ。此のやうな手合ならば、時には男波女波の美はしきを弄し、時には碧浪白波の風光を楽しむことは出来やうけれども、決して滄溟の底にて驪龍の珠を弄ぶと云ふことは出来ないのである。畢竟還つて潮中に落ちて死す。彼の磯邊の風光や海面の景狀に眺めをこらして理論をさぐり言詮を索め。色々と葉を摘み枝を尋ねて居る中に、いつしかそれが一種難治の病となりて遂には佛法の大海中に没入してしまふのであるが。思へば實に愍然の至りである。忽然として活せば百川倒流して開漸々たらん。開漸々は水の蕩々と奔流する音を形容したものであ

る。世間に梅は寒苦を経て始めて清香を發し、人は苦勞して後に眞の價値があらはれると申すことがある。佛法も又その通りである。必ず百尺竿頭に一步を進めて、ゆはゆる大死一番の後に再び蘇生し來つたのでなくては決して本統の大機大用はあらはれないのである。彼の復活と云ふがこのことであらう。戰術にも背水の陣と云ふことがあるやうな。これも同じ様な味ひであらうと思ふ。何事でも一旦往くべき處まで往つて、トドのつまりとなつた時に更に本の立場へ立ち還つた上でなくては眞の仕事は出來ないのである。光明中の極尊であり、諸佛中の佛である阿彌陀如來の御心は常に苦惱の有情に向はせられてある。萬民の最頂上に在りまして至尊と仰がれ玉ふ聖天子の玉體の中に於ても、其の最も最頂上たる御腦髓に於ひては萬民の最下等たる勞働者の脚の下の熱さ冷たさを御心配下されてあるのである。經に佛心とは大慈悲是れなりと説かれ、諸佛の大悲は苦者に於てすと説かれたは此の味ひであらうと思ふ。是れが即ち百川倒流の姿である。

第五節 頌 頌唱和譯

投子投子。機輪阻てなし、投子尋常道ふ、備總に道ふ投子實頭なりと。忽然として山を下ること三步せん。人ありて備に問ふて如何なるか是れ禪。投子云く禪。又問ふ月未だ圓かならざるの時道く、機輪の轉するところ作者も猶迷ふと。他の機輪轉々地にして全く阻隔なし。所以に雪竇

道く、一を放つて二を得たりと。見ずや僧問ふ如何なるか是れ佛。投子云く佛。又問ふ如何なるか是れ道。投子云く道。又問ふ如何なるか是れ禪。投子云く禪。又問ふ月未だ圓かならざるの時如何。投子云く三箇四箇を吞却す。圓なる後如何。七箇八箇を吐却す。投子人を接するに常に此の機を用ふ。這の僧に答ふるに只是れ一箇の是の字。這の僧兩回とも打せらる。所以に雪竇道く彼れに同じく此れに同じと。四句一時に投子を頌し了れり。末後に這の僧を頌して道く、憐むべし限りなき潮を弄するの人と。這の僧敢へて旗を擡き鼓を奪ふて道ふ、和尚屢沸碗鳴聲すること莫れと。又道く和尚を喚んで一頭の驢となし得てんやと。此れ便ち是れ潮を弄するところなり。這の僧伎倆を盡して投子の句中に死在す。投子便ち打す。此の僧便ち是れ畢竟還つて潮中に落ちて死す。雪竇這の僧を出して云く、忽然として活して便ちために禪定を掀倒せば投子も也た須らく倒退三千里すべし。直ちに得ん百川倒流して闌滯々たることを。唯に禪床震動するのみに非ず。亦乃ち山川炭嶠として天地陡暗ならん。苟し或は箇々此くの如くならば山僧且らく退鼓を打たん。諸人什麼の處に向つてか安身立命せん。

【字解】一。投子尋常道ふ。古尊宿の投子録に、衆に示して云く、人々總に道ふ投子實頭なり。忽ち若し山を下つて三步外に備に投子が實頭のことと問はば備いかんか他に問つて道はんと見へてある。

二。古人云く。雪竇禪師の上堂に、機輪の轉する處作者も尙は迷ふ千眼頓に開け君と相見せんと見へて居る。

- 三。如何なるか是れ佛。第四拾一則の類則を参照せよ。
- 四。如何なるか是れ道。同上。
- 五。山川岌嶒として天地陡暗ならん。岌は山の高く聳ゆる貌で嶒は崖壁峭絶なるかたちである。陡暗はまつくらなることである。

第六節 類則提唱

其一 如何是佛

僧問、如何是佛。投子云、佛。下語云、月白風清。

佛は佛までよと何の道理もなく答へたぞ。

其二 如何是道

又問、如何是道。投子云、道。下語云、月白風清。

辨前に同じ。

其三 如何是禪

又問、如何是禪。投子云、禪。下語云、月白風清。

辨は前に同じ。

又問、月未圓時如何。投子云、吞却三箇四箇。下語云、耳朶兩片皮。

僧云、圓後如何。投子云、吐却七箇八箇。下語云、牙齒一具骨。

字面は三箇四箇と云ふたは七分の義。七日八日の比の月を云ふなり。七箇八箇は十五夜の月を云ふなり。私に云く。満ると云ひ缺くと云ふも色相の上のことよ。吞吐の二つは山の端を出入する義か。畢竟投子の答話は月の上を答へたるまでなり。竹澗云く、三箇四箇の處に月白風清と云ふ下語をして、七箇八箇の處には一塞兩彩と下語すと。畢竟何の道理もないことを云ふたものなり。

第八十則 趙州毬子

第一節 本則

舉僧問趙州。初生孩子。還具六識也。無。閃電之機。說什。趙州云。急水上打毬子。
過也。後鶴趁不。及也要驗過。 僧復問。投子。急水上打毬子。意旨如何。
也是作家同驗。過。還會麼。過也。 子云。念念不停流。
打葛藤漢。

【讀方】 僧あり趙州に問ふ、初生の孩子還つて六識を具するや也た無しや。閃電の機什麼の初生の孩兒子とか説かん。趙州云く急水上に毬子を打す。過也。後鶴趁へども及ばず。也た驗過せんことを要す。僧後に投子に問ふ、急水上に毬子を打す意旨如何。也た是れ作家同じく驗過す。還つて會すや。過なり。子云く念念不停流せず。葛藤を打するの漢。

【字解】 一。閃電の機什麼の初生の孩兒子とか説かん。此の僧何を四の五の云ふて居るのか。宗門向上の機に於ては初生の孩子の百歳の老翁のと論量して居る寸暇もないぞと云ふて、六識は若いものか。年寄りのものか。生するものか、滅するものか人々自己を捏つて見よ。
 二。過なり。ソレ急水が瞬く間に毬子を推し流して仕舞ふた。
 三。後鶴趁へども及ばず。早や毬子は流れ去つて跡方もないと云ふ。
 四。也た驗過せんことを要す。人々こゝに驗過せいで契はぬところ。

- 五。也た是れ作家同じく驗過す。投子を勘驗しやうなどはサスがに本分の宗匠であると野次る。
- 六。選つて會すや。何と諸人會せるかどうかと一抄する。
- 七。過なり。ハヤ毬子は流れ去つて仕舞ふた。何をアズ／＼して居るぞと告める。
- 八。葛藤を打する漢。四の五のいらぬ閑葛藤ぢや。グズ／＼して居る中に孩子が白髪になつて仕舞ふぞと云ふのである。

第二節 本則提唱

僧問、趙州、初生、孩子、還具六識也無。下語云、問得可始得。

六識とは眼識、耳識、鼻識、舌識、身識、意識を指す。

趙州云、急水上打毬子。下語云、耳朶兩片皮。

急水上に毬子を打すとは水車又は轆轤などのやうなるものなり。手毬を水に落せばクルリ／＼と流れめぐる。色相の輪廻に喩へたなり。

僧復問、投子、急水上打毬子、意旨如何。下語云、好問。

子云、念々不停流。下語云、牙齒一具骨、五三四二一。

色相の一念を截斷する道理がなければ面をかへて幾回も輪廻するぞ。急水上に毬子を打するが如く輪廻をうくるぞ。

第三節 本則評唱和譯

此の六識教家に立て、正本と爲す。山河大地日月星辰其れに因つて生ずる所以なり。來るときは先鋒となり去るときは殿後となる。古人道く三界唯心萬法唯識と。若し佛地を證すれば八識を去つて轉じて四智と爲す。教家に之れを名を改めて體を改めすと謂ふ。根塵識是れ三つ、前塵は元と分別を會せず、勝義根能く識を發生し識能く色の分別を顯す。即ち是れ第六の意識なり。第七識の末那識能く去つて世間一切の影事を執持して人をして煩惱して自由自在なることを得ざらしむ。皆是れ第七識なり。第八識に到つて亦之れを阿賴耶識と謂ふ。亦之れを含藏識と謂ふ。一切善惡の種子を含藏するなり。この僧教意を知る。故に持ち來つて趙州に問ふて道く、初生の孩子還つて六識を具するや也た無しや。初生の孩兒六識を具して眼能く見、耳能く聞くと雖も然も未だ會つて六塵を分別せず。好惡長短是非得失他慳慳の時總に知らず。學道の人復た嬰孩の如くならんことを要す。榮辱功名逆情順境都べて他を動することを得ず。眼色を見て盲と等しく、耳聲を聞いて聾と等し。癡の如く兀に似たり。其の心動せざること須彌山の如し。這箇は是れ衲僧家眞實得力の處なり。古人道く衲被蒙頭萬事休す。此の時山僧都べて不會と。若し能く此の如くならば方に少分の相應あらん。然も此くの如くなりと雖も爭奈せん一點も也た他を瞞する

を得ざることを。山は舊に依つて是れ山、水は舊に依つて是れ水、造作なく縁慮なし。日月の太虚を運ぐりて未だ嘗つて暫くも止らざるが如し。亦我れ許多の名相ありと道はず、天の普く蓋ふが如く地の普ねく擎るに似たり。無心なるがための故に、所以に萬物を長養す。亦我れ許多の功行ありと道はず、天地の無心なるがための故に、所以に長久なり。若し有心ならば則ち限際あらん。得道の人も亦復た是くの如し。無功用の中に於いて功用を施す。一切の違情順境皆慈心を以つて攝受す。這裏に到つて古人尙自ら呵責して道ふ。了了の時了すべきなく、玄玄の處直ちに須らく呵すべしと。又道く、事々通じ物々明かなり。達者は之れを聞いて暗裏に驚くと。又云く、聖に入り凡を超へて聲をなさず。臥龍長く怖る碧潭の清きことを。人生若し長く此くの如きことを得ば、大地那ぞ能く一名を留めんと。然も恁麼なりと雖も更に須らく窺窟を跳出して始めて得べし。豈に見ずや教中に道はく、第八不動地の菩薩無功用の智を以つて一微塵の中に於いて大法輪を轉す。一切時中行住坐臥に於いて得失に拘らず任運に薩婆若海に流入す。衲僧家這裏に到つて亦執着すべからず。但だ時に隨つて自在なり。茶に遇ふては茶を喫し飯に遇ふては飯を喫す。這箇向上の事箇の定の家を着くことも也た得ず。箇の不定の字を着くことも也た得ず。石室の善導和尚衆に示して云く、汝見ずや小兒出胎の時何ぞ曾つて我れ看教を會すと道はん。恁麼の時に當つて亦有佛性の義無佛性の義と云ふことを知らず。長大するに至るに及んで便

ち種々の知解を學して出て來て便ち道ふ。我れ能くし我れ解すと。是れ客塵煩惱なることを知らず。十六觀行の中嬰兒行を最となす。哆哆唵唵の時を學道の人の分別取捨の心を離るゝに喩ふ。故に嬰兒を讚歎して況喩して之れを取るべし。若し嬰兒是れ道と謂はゞ今時の人錯つて會せん。南泉云く、我れ十八上にして活計を作すを解すと。趙州道ふ、我れ十八上にして破家散宅を解すと。又道く、我れ南方に在つて二十年粥飯の二時是れ雜用心の處なるを除くと。曹山僧に問ふ菩薩定中に香象の河を渡るを聞くこと歷々地なりと。恁麼の經にか出でたる。僧云く涅槃經。山云く定前に聞くか。定後に聞くか。僧云く和尚流せり。山云く灘下に接取せよと。又楞嚴經に云く、湛入合湛識の邊際に入ると。又楞伽經に云く、相生は執礙、想生は妄想、流注生は則ち妄を逐ふて流轉すと。若し無功用の地に到るも猶ほ流注相の中に在り。須らく是れ第三の流注生相を出得して方に始めて快活自在なるべし。所以に僞山仰山に問ふて云く、寂子如何。仰山云く和尚他の見解を問ふか他の行解を問ふか、若し他の行解を問はゞ某甲知らず、若し是れ見解ならば一瓶の水を一瓶の水に注ぐが如しと。若し此くの如きことを得ば皆以つて一方の師となるべし。趙州云く、急水上に毬子を打すと。早く是れ轉轉々地。更に急水上に向つて打する時眨眼すれば便ち過ぐ。譬へば楞嚴經に云ふが如し、急流の水の如し。望めば恬靜となる。古人云く譬へば駛流水の如し。水流れて定止なし各々相知らず諸法も亦此くの如しと。趙州の答處意渾べて此れに類す

其の僧又投子に問ふ、急水上に毬子を打すと云ふ意旨如何。子云く念念不停流と。自然に他の問處と恰好なり。古人の行履綿密に答へ得て只一箇に似たり。更に計較を消せず。爾纒に他に問へば早く爾が落處を知り了れり。孩子の六識然も無功用なりと雖も争奈せん念念停らずして密水の流るゝが如きことを、投子恁麼に答ふ。謂つべし深く來風を辨すと。雪竇の頌に云く。

【字解】一。此の方識教家に立て、正本となす。六の字恐くは八の字の誤りか。小乗教では眼耳鼻舌身意の六識を立て、吾々の心的作用を説明するけれども、權大乘教以上に在りては之れに第七末那識及び第八阿賴耶識の二識を加へて八識とし。て三界唯一心々外別法と稱して萬法唯識の理を談する。彼の法相家の所談の如きが之れである。

二。古人道く三界唯一心。萬法唯識。華嚴經の明法品には所有諸法皆由一心造と説き、夜摩天宮說偈品には、心如工畫師。畫種種々五陰。一切世界中無一法而不造等と説き。又十地品には三界虛妄但是一心作等と説いてある。之れによりて無著菩薩は攝大乘論に三界皆唯有心と云ひ、世親菩薩は甘露講論に大乘には三界に唯識を安立す。契經に三界唯心と説くを以ての故にと申して居られる。清涼文益禪師の頌に、三界唯心。萬法唯識。唯識唯心。眼耳鼻色。々不剎耳。聲何觸眼。眼色耳聲。萬法成辨。萬法匪緣。豈觀如幻。大地山河。誰堅誰變とある。今はそれを引かれたものと見へる。

三。八識を以て轉じて四智と爲す。之れは教家に轉識得智と稱する處で唐譯の攝大乘論第九に四智の心品として説いてある。先づ四智と云ふは一には大圓鏡智、二には平等性智、三には妙觀察智、四には成所作智であつて、先づ大圓鏡智は有漏の第八阿賴耶識を轉捨してうるころの無漏識であつて、此の識は智慧の作用が最も勝れて居るから別して智と名けたものの以下の三識も同様の理由で智と稱する。大圓鏡と云ふは譬喩に約して云ふたもので、此の心品は體相清淨にして諸の有漏の雜染を離れ無量功德を具して佛菩薩の身土及び他の三智の影像を現すること恰も大圓鏡上に衆色の像を現するが如きであるから大圓鏡智と云ふ。二に平等性智と云ふは、有漏の第七末那識を轉じて得る處の無漏識でありて眞如平等の理性に

順し一切諸法に於いて我他彼此の差別執會をなされて、平等に一切衆生を救済するから平等性智と云ひ。三に妙觀察智とは有漏の第六意識を轉捨してうる處の無漏識でありて、一切諸法の自相共相を觀し一切衆生の根機に應じて無碍自在に妙法を説き諸の疑惑を斷するもの。第四に成所作智は有漏の前五識即ち眼耳鼻舌身の各識を轉じて得る處の無漏識であつて、利益衆生のために普く十方に於いて種々の變化の三業を示現して攝化の所作をなすところの智である。

四。勝義根。根には内外二種の根がありて外相を扶塵根と云ひ内の微を勝義根と稱する。所謂の形色と内容との二つである。譬へば眼根について云へば眼そのものは扶塵根でありて、物を見る作用をするもの即ち視神經を勝義根と稱するのである。餘は例して知れ。

五。初生の孩子還つて六識を具するや。生れた計りの赤子にも眼耳鼻舌身意の六識を具して居ましやうか具して居ないでしやうかと問ふて、若し趙州が具して居ると云へば然らば何故に赤子に分別がないのであるかと突き込み。具して居ないと云へば何故に泣いたり笑つたりするのであるかと詰るつもりと見へる。

六。眼色を見て肯と等しく。維摩經の弟子品に、所見の色盲と等しく所聞の聲聾と等しく等と見へ。法華の序品には安住不動如須彌山と云ふてある。その言葉によつたものと見へる。

七。古人道く稱被蒙頭萬事休す。石頭和尚の草庵の歌に出て居る語で全文は傳燈錄の三十卷目に出てある。山僧はすべて不會。會すること會すべきことは一切更にないのである。

八。山は舊に依つて是れ山等。此の下は任運無功用のところを明かす。

九。古人尙自ら呵責して道ふ。古人は同安の常察禪師で正位前と云ふ題の頌中の句である。之れも傳燈錄に見へてある。

一〇。又道く事々通じ物々明かなり。禪門諸祖偈頌の上に、紫塞の野人雪子吟すとして、事々通じて物々明かなり。達者は須らく知るべし暗裏に驚くことを。若し能く無私の曲を撫するを解せば、句々稱提して名を道はずと云ふ句が出てある。

浮山の遠縁公の註に、摩羅利々手にまかせて指し來る。知音類々に擧するに在らず、體玄に語妙にして音音に隨せず。手なくして能く目を遮り魚をつるに竿を犯さずとある。畢竟無功用の功用を諳ふたものである。

一一。又云く聖に入り等。龍牙の居過禪師の語。

一二。豈に見ずや教中に説かく。華嚴十地品第八地の下の取意の文。

一三。薩婆若海。薩婆若は梵翻して一切智と云ふ。根本智のこと。即ち無分別の智慧を云ふ。

一四。石室の善導和尚。潭州石室の善導和尚は長髯禪師の嗣。此の機縁は傳燈錄に見ゆ。

一五。嬰兒行。大涅槃經第二に嬰兒行品あり。今は無心無功用なるところをとる。

一六。南泉云く。我れ十八上にして作活計を解すと。上は進なり登なり昇なりと申して俗に上ると云ふ程のことである。今は十八度とか十八回目とか云ふ意味にとれば宜しい。大悟十八小悟数を知らずと云ふか、かくして初めて大自由を得て萬事皆無功用なることが出来るのである。

一七。雜用心の處。喫茶喫飯の外何の處作もない。之れ祖位中透過處の境界。

一八。急水上に毯子を打す。瀑の様な烈しく早く流れる水の上で手毯をつくやうなものであると云ふのである。由來急水上に毯子を打すと云ふは念々停まらずと云ふ方語であると云ふことである。投子の念々停流せずとの答は實に實頭な答へと申さればならぬ。

一九。古人云く譬へば駛流水の如し。華嚴經に譬へば駛流水の如し流々絶へ已むことなし。二俱に相知らず諸法も亦たかくの如しとある、此の文を引いたものと見へる。駛は馬のイサミ走る貌で疾きことを形容したものである。

二〇。線密に答へ得て只一箇に似たり。趙州と投子、兩口一臺の如しと評して兩大老の答處の更に擬議に涉らざることを讚歎する。

第四節 類則提唱

其一 粥飯

趙州道、我在南方二十年、除粥飯、二時是雜用心處。下語云。平生心願向人傾。

明眼の人も迷倒の衆生も粥飯の二時を喫せいで命がないぞ。去るほどに粥飯の二時を除くと云ふたぞ。粥飯の二時を除くとは色相なり。是れ雜用心と云ふは本分ぞ。雜用心と用ゐたが本分なり。色相と本分を爲人して示されたほどに平生心願向人傾と用ゆるなり。又下語に萬里一條鐵。此の下語の時は粥飯二時を除くと云ふは萬里は色相の方、是れ雜用心とは一條鐵即ち本分の方なり。

其二 菩薩定中

曹山問僧。菩薩定中間。香象渡河。歷々地出。什麼經。下語云。魚行水濁。

何となく問ひたれども自然に句中備つたぞ。字面は菩薩の坐禪して居る中に象の河を渡るを聞いたと云ふ事あり。其は何の經の沙汰ぞと云ふなり。

僧云、涅槃經。下語云、食程大過不知、疑過。有問有答。實頭人難得。

山云、定前問定後問。下語云、日斜照看高丁。捉襟見肘。

僧云、和尚流也。下語云、蝦跳不出斗。

此の僧が曹山の智見解惠を以つて色々に仰せらるゝとも、和尚は流れやうぞと随分だてゝ云ふなり。又云く、上は香象の河を渡ると云ふに因んで、さう御抄しあらうも、今に御流れさうらうす物をと此の僧が曹山を云ふたぞ。

山云、灘下接取。下語云、據款結案。

灘はなだぞ。接取はとらうる方ぞ。流也と云ふたに因んでの答なり。灘は川すその方ぞ。又云く、此の僧が流なりと云ふたは和尚は河に御流れあると云ふたを、山の灘下に接取と云ふたは、款に據つて案に結したもののよ。私に云く、セヨの點不審なり。我をひきあげよの心ちやほどに結案の道理なし。センの點よかるべし。抄の心もセンの點よりとなり。定前定後の沙汰は抄に詳かなり。

第五節 頌

六識無功伸二問。當臺明珠在掌。一句道盡。作家會共辨來端。何必也。要辨箇。茫

茫急水打毬子。始終一貫。過落處不停。誰解看。灘下接取。過也。

【讀方】六識無功一問の伸ぶ。眼あれども盲の如く耳あれども聾の如し。明鏡は臺に當り明珠は掌に在り。一句に道盡す。作家共に會つて來端を辨ず。何ぞ必とせん。也た箇の細素を辨せんことを要す。唯證して乃ち知る。茫々たる急水に毬子を打す。始終一貫。什麼と道ふぞ。落處停らず誰か看ることを解せん。看れば即ち瞎せん。過なり。灘下に接取せよ。

【字解】一。眼あれども盲の如く耳あれども聾の如し。耳も眼もありながらと無功の六識を註解する。

二。明鏡は臺に當り明珠は掌に在り。妍は乃ち妍を誤らず、醜は即ち醜を誤まらず、森羅萬象悉く映現して更に美醜善惡の擇びはないと無心無功の姿を説明する。

三。一句に道ひ盡す。雪寶一句に道ひ盡されたが。諸人何んと會得が出来たかと一抄する。

四。何ぞ必とせん。そのやうなことは辨する道もない。

五。也た箇の細素を辨せんことを要す。諸人必ず丸含みにするなよ。白は白黒は黒と辨じて見よ。

六。唯證して乃ち知る。冷暖自知で人人自ら證して知るより外はない。

七。終始一貫。急水の滔々として流れつきぬやうすの形容である。

八。什麼と道ふぞ。水上の打毬とは何のことであらう、諸人參究し來れ。

九。看れば即ち瞎せん。看ようとするれば眼がつかれるから、背後の眼を明けて見よと無功の無功たることを示す。

一〇。過也。ソレ疾ふに過ぎ去つてしまふた。看へるものかと云ふ。

一一。灘下に接取せよ。どうせ直下には看へまい。せめて灘下になりとも引き揚げ來れと示して、流水に従つて妙を得來ることを推奨する。

【講義】六識無功一問を伸ぶ。六識と云ふは、眼耳鼻舌身意の六根が、色聲香味觸法の六塵に對して、眼には色の青黃赤白等を識別し、耳には絲竹金石等の聲を識別する等の心的作用を起す、此の働きをなすものが即ち六識である。無功は無功用の略語で何のためなど、云ふ目的はなく、只任運自然に作用のあることが即ち無功用で、日月の萬物を照らし雨露の物を濕すが如き、只無爲自然に然るのでありて、日月に心ありて照すのでもなく、雨露に考へありて物を濕すのではない。日月は無心であるからして美も照し醜も照す。雨露は無心であるからして花も濕せば柳もうるほす。其の間に何等の取捨選擇はないのである。色を見聲をきく六識の作用も之れと同じで、色を見聲をきくながらに無心でありて何の理窟もなく穿議もない。只之れ任運無爲の作用である。之れを色即是空空即是色とは申す。今此の僧はその邊の道理からして一問を呈出したものと見へる。作家共に曾つて來端を辨す。作家は趙州と投子との二大老を指す。此の兩大老は共に深く此の僧來問の端的を辨じられたと云ふ。茫々たる急水に毬子を打す。これは趙州和尚が急水上に毬子を打すと答へられたのを頌したのである。皆さん此れは孩子に六識を具して居ると云ふことであらうか、具して居らぬと云ふことであらうか。有心と云ふことか、無心と云ふことか。擬議に涉つてはなりませぬぞ。落處停らず誰か看ることを解せん。この句は投子が念々停流せずと云はれたのを頌したものだ。其の念々と云ふは抑も如何なるもので、一體何故にどうして停まらぬのであらうか。落處什麼生、諸人會すや否やとの雪竇の爲人である。誰の一字に眼をつけて見るが宜しい。

第六節 頌評唱和譯

六識無功一問を伸ぶ、古人の學道養つて這裏に到る。之れを無功の功と謂ふ。嬰兒と一般なり。眼耳鼻舌身意ありと雖も而も六塵を分別すること能はず、蓋し無功用なればなり。既に這般の田地に到つて便乃ち龍を降し虎を伏し坐脱立亡す。如今の人は但目前の萬境を持つて一時に歇却す。何ぞ必ずしも八地以上にして方に乃ち是くの如くならん。然も無功用の處なりと雖も舊に依つて山は是れ山水は是れ水。雪竇前面に頌して云く。活中に眼有り還つて死に同ず。藥忌何ぞ須みん作家を鑑るにと。蓋し趙州投子はれ作家なるが爲めに、故に云ふ作家曾つて共に來端を辨す。茫々たる急水に毬子を打すと。投子道く念々停流せず。諸人還つて落處を知るや。雪竇末後に人をして自ら眼を着けて看せしむ。是の故に云く。落處停らず誰か看ることを解せん。此れは是れ雪竇の活句。且らく道へ什麼の處にか落在する。

【字解】一。龍を降し。之れは本行經に、佛初め法輪を轉じて三迦葉を火神堂に降す。威火を放ちて彼の火龍の毒火を滅す。四面一時に洞然として熾盛なり。唯如來坐したまふところのみありて寂靜にして火光を見ず。大龍見已つて漸く佛所に向つて便ち身を踊して佛鉢の中に入ると云ひ。又彼の晋の高僧法公が符堅の建元十一年に長安人民のために雨を祈つた

處が俄爾として大龍が渉公の鉢中に在つたと稱するが如き之れである。

二。虎を伏す。之れは齊の禰禪師が懷州の王屋山に在つて習禪して居られた時に、虎の相聞ふを聞いて其の場に至つて錫杖を以て之れを解かれたと稱するが如き。又、曇詢禪師が或る時山行せられた際に、兩虎ありて相聞ふのを見て錫杖を以て之れを分け、汝等同じく林藪に居す計るに大乖なけん幸ひに各々路を分かつてと云はれた處が、兩虎は低頭して師の命をうけ各々退散したと稱するが如き其の例である。

三。雪寶末後に人をして自ら眼を着けて看せしむ。之れが雪寶の爲人親切なるところ。昔さん此の落處を究めればなりま

第八十一則 藥山平田

第一節 垂示

垂示云。擡旗奪鼓。千聖莫窮。坐斷請訛。萬機不到。不是神通妙用。亦非本體。如然。且道。憑箇什麼。得恁麼奇特。

【請方】 旗を擡ぎ鼓を奪ふ千聖も窮むることなし。請訛を坐斷す。萬機も到らず。是れ神通妙用にあらず。亦本體如然に非ず。且らく道へ箇の什麼に憑つてか恁麼の奇特を得たる。

【講義】 此の垂示は宗師家が學人を接待せられる機鋒の峻峻なることを明かされたものである。旗を擡ぎ鼓を奪ふ。これは敵の戰鬥力を絶滅させた姿で、今日の言葉で申さうならば敵の陣地を占領して其の軍旗をも奪ひ取つたとも云ふべきところである。千聖も窮むることなし。其の活動の敏捷なることは實に撃石火の如く閃電光の如くであつて、千佛萬祖と雖も之れを窺ひきはむることは出来ぬ。請訛を坐斷す。請訛と云ふは即ち盤根錯節とか或は齧牙など、申すと同じ意味で即ち事の複雑して遽かに解決し難いことである。それを坐斷すと云ふのであるから、所化の學人の方から色々と知解分別を運ぐらし容易に答辨しにくい種々難多な問題を提出して來てもそれを忽ち脚下にふみにぢりて仕舞ふと云ふのである。萬機も到たらず。されば如何なる機鋒をもつて

當つて來ても決してあたりあふせるものではない。是れ神通妙用にあらず。して見るとそれは何か普通に變つた不可思議な神通妙用でもあるのかと云ふに、左様でもない。日々平常の起居動作即ち寝たり起きたり立つたり座つたりする其の儘が自然天然に孤危峻峻の機鋒となるのである。亦た本體如然にも非ず。それなれば宗師家には天然自然にそう云ふ働きが具つて居るのかと云ふに決してそうでもない。只行住坐臥の立ち居ふるまひが其儘にしておのづと自由自在の活機輪となつて、それが本來天然に具つて居る働きのやうに見へるのである。且らく道へ箇の什麼に憑てか恁麼に奇特なることを得たる。然らばそれは一體どうしてそう自由自在に活機を轉ずることが出來たのであらう。それは藥山和尚の今日の行處を見れば自然に會得が出來やうから能く參究して看るが宜しいと本則を提出した。

第二節 本則

舉僧問藥山。平田淺草。麀鹿成羣。如何射得麀中麀。把警投術。擊頭帶。角出來。腦後拔箭。山云。看箭。就身打劫。下坂不。走。快。便。難。逢。着。僧放身便倒。灼然不同。一死更。不再活。弄精魂漢。山云。侍者拖出這死漢。據令而行。不勞再勸。僧便走。棺木裏。瞋眼。死中。前箭猶輕。後箭深。猶有氣息在。山云。弄泥團。漢。有什麼限。可憐許。放過。據令而行。雪。雪竇拈云。三步雖活。五步須死。百手擡。一手擡。直繞走。上加霜。

【讀方】 僧あり藥山に問ふ平田の淺草麀鹿群を成す如何か麀中の麀を射得せん。麀を把つて術に投ず。頭を撃げ角を帯びて出で來る。腦後に箭を抜く。山云く箭を看よ。身に就て劫を打す。下坂に走らざれば快便に達ひ難し。着。僧身を放つて便ち倒る。灼然として同じからず、一死更に再活せず。精魂を弄するの漢。山云く侍者這の死漢を拖き出せ。令によつて行す。再勸を勞せず。前箭は猶ほ輕く後箭は深し。僧便ち走る。棺木裏の瞋眼中に活を得たり。猶ほ氣息の在るあり。山云く泥團を弄する漢什麼の限か有らん。可憐許放過す。令によつて行す。雪上に霜を加ふ。雪竇拈して云く三步には活すと雖も五歩には須らく死すべし。一手は擡け一手は擡ゆ。たとひ走ること百歩するも須らく喪身失命すべし。

【字解】 一。僧あり藥山に問ふ。 澧州藥山の惟簡禪師は絳州の人で姓を韓氏と申した。年十七歳にして潮陽の西山の慧照禪師に依つて出家し、唐の大曆八年に南岳の希操律師に隨つて具足戒をうけた。後に石頭山の希遷大師に謁して遂に其の法を得。澧州の藥山に住して參學の雲衲に接せられた。得法の嗣には道吾山の圓智禪師。雲巖寺の曇晟禪師。船子山の德懷禪師等の名徳が十人程もあつた。彼の有名な洞山大師は實に師の孫である。大和八年の二月に年八十四歳の高齡を以つて示寂せられた。唐の文宗皇帝が謚して佛道大師と申された。

二。平田淺草麀鹿。麀は主に从い鹿に从ふとあるから即ち鹿の中の最も大なるものが麀でありて多くの鹿を引き連れてあるものである。古人は鹿の大なるを麀と云ふ群鹿之れに隨つて皆麀の往くところ麀尾の轉する所を視て準となすと申して居る。先づ鹿の王様であらう。平田淺草は廣々とした田圃や野原の鹿の多く居りそうな處である。その平田淺草の中に多くの鹿を牽き連れて居る麀が澤山に居りますが、此の多くの麀や鹿の中で最も大きな謂ゆる麀中の麀とも云ふべき麀ほど

うして射とめたものでありまじやうとの間である。此の廳中の廳こそ即ち法王中の法王とも光明中の極尊とも諸佛中の佛とも申すべきものであらう。すると藥山は箭を看よ。と其の箭を引く手を見せず直ちに其れ箭先きを見ろと此の僧の胸板を射透してしまはれた。スルト此の僧は自分が何處までも廳中の廳であり法王中の法王であると氣取つて居たものと見へて、身を放ちて便ち倒る。藥山の放つた箭を確かにうけて其の場でコロリと倒れてしまつた。藥山は更に此の僧が死中に活を得るかどうかと云ふことを試みるために、侍者に向つて此の死漢を拖き出せと命じた。爰か藥山の如何にも慈悲深いところである。僧便ち走る。此の僧はどこの迄も自分が廳中の廳であると氣取つて居るものであるから、遽かに起き上つて走り出した。ツマリ死中に活を得たことを粧ふたものであらう。けれども藥山は元來法王中の法王であり作家中の作家である。決してこんな狂言じみたことに誑らかされる人ではない。果然。泥團を弄するの漢什麼の限りかあらんと叱りつけた。馬鹿か狂人のやうな奴をいつまで相手にしても役に立たぬと云ふのである。此の因縁に對して後に雪齋禪師が裁判の宣告を下して、三步には活すと雖も五歩には須らく死すべし。此の僧が一旦起き上つて走り出した様子を見るとチヨット死中に活を得たやうにも見へるけれども、死漢は所詮死漢であるから、それも結局二歩か三步だけのことで五歩とも活きて働けるものでないと評をせられたと云ふが本則の大體である。要する處は言句にせよ伎倆にせよどれほど甘く考へてどれほど能く形式を似せた處で本統に見性悟道が出来た上の働きでなければ何の役にも立つものでないとの宣言である。

三。誓を把つて衛に投ず。誓を把ると云ふは戰爭に負けたものが胃を脱いだ姿。衛は衛門などい申して官廳のことであるから、斯の僧が此のやうな問ひを藥山のところへ持ち出してきたのは盜賊が警察署へ犯罪を自首して出たやうなものぢやと云ふのである。

四。頭を撃げ角を帯びて出て来る。此の僧がどこまでも自分は廳中の廳のつもりで正々堂々と擧しかけてきた勢ひはいかさま餘程の作家らしい見へると云ふのである。

五。廳後に箭を抜く。これは此の僧がどのやうなる強箭を放つても、藥山は直ちに自ら抜き取つて射かへすであらうと云ふのである。

ふのである。

六。身に就いて劫を打す。藥山が箭を看よと一箭を以つて此の僧を射落したすばやさには實に掏兒のやうであるとの讃嘆である。

七。下坂走らざれば快便に逢ひ難し。下坂と云ふは下り坂のことである。下り坂は一體に走り好いものであるのにそこを走らないでは到底津頭に達して便船にのり込むことは出来ないぞと云ふのであるから、ツマリ箭を看るの一言下に藥山の機鋒の當るべからざる所が見へないやうではと云ふ意である。

八。着。甘く箭が當りましたと拍手喝采である。

九。灼然として同じからず。テツキリ爲せものであつた。廳の形には似て居るけれども所詮野鹿であらうと云ふ。

一〇。一死更に再活せず。此の僧が死中によく活を得て自在の働きが出来れば面白いけれども到底其の見込はないと云ふ。

一一。精魂を弄する漢。始めから思慮分別を逞くして色々考へてきた狂言であるから、どうせ本統の者ではないのである。

一二。令に據つて行す。此れが即ち本分の規則通りの處置であるから誰れ人も異存はなからうと云ふ。

一三。再勦を勞せず。確かに死んでしまつて居るから、モ一此の上と脈を見る必要はなからうと云ふ。

一四。前箭は猶ほ軽く後箭は深し。前箭の箭を看よの一言はまだかつかつたけれども、後箭の屍骸を拖き出せの一言には恐れ入りましたと云ふ。

一五。棺木裡の瞳眼。モ一此の上助かることは出来ない身體であるのに、未だに目をキヨロつかせてパチパチして居ると云ふ。

一六。死中に活を得たり。ソレ蘇つたやうであると冷かす。

- 一七。猶ほ氣息の在るあり。 どうやら息をふき返したやうだと冷かす。
- 一八。可惜許放過することな。 其のやうなことを云ふて叱つて居らずにドシンと一棒くはせてやりやよいにと云ふ。
- 一九。令に據つて行ず。 薬山和尚は本分の上から叱られたのであるから、是非ともこうなければならぬと云ふ。
- 二〇。雪上に霜を加ふ。 イヤが上にも殿しい行令であるから實に見て居つても心知が好いと薬山を讃歎する。
- 二一。一手は擡げ一手は摺ゆ。 上げたり下げたり思ひの儘であると云ふ。
- 二二。直繞走ること百歩するも須く喪身失命すべし。 所詮見性悟道の上からの働きではないによりて眞實本統の働きが出來やう筈はないのである。

第三節 本則提唱

僧問^{アリ}薬山^ニ平田^ニ浅草^ニ麈^ニ鹿^ニ成^レ群^ヲ如何^シ射^ニ得^ル麈^中^{下語云。梁生招箭。}

先師の下語に虎口裡横^レ身^ヲ。

山云^ク看^レ箭^ヲ下語云。一箭兩梁。

本分の箭を以て爲人したぞ。問ふの句中に當つて云ふたぞ。權實備つたぞ。先師云く如何なるか是れ箭。云く千眼看^レ不見^ル箭^ヲと云ふものは射放つて後は見へざるものぞ。故に見へざるところを本分に用ゆるなり。看よと云ふところ句中。箭の一字を參する時の下語なり。又此の古則にて見る時は塵中塵と云ふが本分なり。其本分を指して看^レ箭^ヲと云ふたなり。故に一箭兩梁と兩面目に

用ゆるなり。先師の下語に獅子咬^レ人^ヲ。

僧放^レ身便^倒下語云。中也。

本分の箭に中つて候ふとて倒れたるを見て中也と云へり。又云く、此の僧本分を用ひ得て本分の箭を會して倒勢をなしたほどにこわものぞと云々。先師の下語に瞎漢指^レ天作^レ地^ヲ。

山云^ク侍者^ヲ拖^レ出^テ這^レ死^漢下語云。劈箭急^{ナリ}劈殺^ス人^ニ臨^シ岸^ニ推^ス人^ヲ。

此僧爰までは好く働きたるほどに猶も奥を見届けんために、ひつつめて如何と試みたぞ、先師は春風逼^レ戸^ニ寒^シと下語されたぞ。

僧便^チ走^ル下語云。亂走^漢。

脚實地を踏ぬことぞとなり。先師の下語に是什麼^ノ。

山云^ク弄^レ泥團^ヲ漢^有什麼^ノ限^リ下語云。前箭^ハ輕^ク後箭^ハ深^ク後箭^射人^深首正尾正。

泥團は本分なれども爰では句中ぞ。先師の下語に痛處^下針^錐。

雪竇拈^云三^步雖^活五^步須^死下語云。一^手擡^一手^摺。

此の僧初は衲僧の働に似たれども亂走して後語なきところを雪竇の拈して五步須^死と云ふた處で擡搦が備つたぞ。先師曰く、此の僧走る處で大燈國師の代語あり。下語し來れ、代云^拈倒^禪床^ノ此くの如くしたならば亂りに走るの漢とも五步に須らく死すべしとも云はれまじきものと

のことぞ。先師の下語に半開半合。

第四節 本則評唱和譯

この公案洞下にこれを借事問と謂ふ。亦これを辨主問と謂ふ。用いて當機を明す。鹿と麀とは尋常射やすし、唯塵中の塵のみあり是れ鹿中の王なり。最も是れ射がたし。此の塵鹿常に崖石の上に於いて其の角を利く、銚銚の穎利なるが如し。身を以つて群鹿を護惜す。虎も亦近傍すること能はず。この僧亦惺惺なるに似たり。引き來つて藥山に問ふて用いて第一機を明す。山云く箭を看よと。作家の宗師妨げず奇特なることを。擊石火の如く閃電光に似たり。豈に見ずや三平初め石鞏に參す。鞏才かに來るを見て便ち弓を彎く勢を作して云く。箭を看よ。三平胸を撥開して云く。此れは是れ殺人箭か活人箭か、鞏弓弦を彈すること三下。三平便ち禮拜す。鞏云く、三十年一張の弓兩隻の箭今日只半箇の聖人を射得たりと云ふて便ち弓箭を拗折す。三平後に大顛に舉似す。顛云く既に是れ活人箭什麼としてか弓弦上に向つて辨す。三平無語。顛云く、三十年後人の此の話を舉せんことを要すとも也た得がたし。法燈に頌有り云く、古石鞏師あり弓矢を架して坐す。此の如くすること三十年知音一箇もなし。三平的に中り來る。父子相投和す。子細に返つて思量すれば元と伊れ是れ契を射ると、石鞏の作略藥山と一般なり。三平頂門に眼を具して一句下

に向つて便ち的中つ。一へに藥山の箭を看よと道ふに似たり。其の僧便ち塵と作つて身を放つて倒る。この僧也た作家に似たり、只是れ頭あつて尾なし。既に罔續を做して藥山を陥れんことを要す。爭奈せん藥山は是れ作家一向に逼し將ち去ることを。山云く侍者這の死漢を拖き出せと、陣を展べて向前するが如くに相似たり。其の僧便ち走る。也た好し是なることは則ち是なり。爭奈せん灑脱ならず脚に粘し手に粘することを。所以に藥山云く泥團を弄する漢什麼の限りか有らんと。藥山當時若し後語なくんば千古の下人の檢點に遭ん。山云く箭を看よと。この僧便ち倒る。且らく道へ是れ會か是れ不會か。若し是れ會と道は、藥山什麼に因てか却つて恁麼に道ふ泥團を弄する漢と。這箇最も惡なり正に僧の徳山に問ふに似たり。學人鏝錙の劍を仗んで師の頭を取んと擬する時如何。山頰を引いて近前して云く罔。僧云く師の頭落ちぬ。巖頭呵々大笑す。這般の公案都て是れ陷虎の機正に此れに類す。恰も是れ藥山他を管せず。只識得破するが爲めに只管に逼しもち去る。雪竇云くこの僧三步には活すと雖も五歩には須らく死すべし。この僧甚だ箭を看ることを解して便ち身を放ちて倒ると雖も、山云く侍者這の死漢を拖き出せと。僧便ち去る。雪竇道く只恐くは三步の外活せざらんことを。當時若し五歩の外に跳出せば天下の人便ち他を奈何ともせず。作家の相見須らく是れ賓主終始互換間斷あること無くして方さに自由自在の分あるべし。この僧當時既に始終すること能はず、所以に雪竇の檢點に遭ふ。後面に亦自ら他の語を用

めて頌して云く。

【字解】一。借事問。借事は譬喩などを借りて来て本分の道理を言ひあらはすことである。爰では圓中の圓と云ふが即ち法王の中の法王とか主中の主とか謂ふことと宇宙萬象の本體を鹿王に比況したのである。

二。辨主問。主は即ち師家のことで學人が師家の機鋒を勘驗しやうために問端を起すが辨主問である。或は驗主問と名くることもある。

三。作家の宗師妨げす奇特なることを。サスガは藥山和尚であるから、弓を引く手は見せず直ちに其れ箭先を見ると、ハヤ此の僧の胸板を射透してしまつた。實に話詠を坐斷して萬機到らざる底の働きである。

四。三平初め石鞏に參す。三平は漳州三平の義忠禪師で青原下の尊宿潮州の大顛和尚の法を嗣いだ人である。石鞏は即ち馬大師の法を嗣いだ石鞏の慧藏禪師と申した人で、南嶽下三世の尊宿である。

五。法燈。金陵清涼の法燈禪師名は泰欽と申した人で法を清涼文益禪師に嗣いだ方である。

六。梁。梁は射梁と申して的をかける擲のことである。

七。既に圍繞を做して藥山を陥れんことを要す。これは此の僧自らにほどこまでも圓中の圓を氣取つて居るものであるから、藥山の放つた箭をたしかにうけてコロリとそこへ倒れて見せた。コ、で更に藥山の出やう次第では此の僧にも働きのある考へではあつたであらうが、藥山和尚もサルモノであるから、到底こんな拵へ事で此の僧を見のがしそふことはないのである。

八。也たよし是は則ち是争奈んせん灑脱ならず脚に粘し手に粘することを。便ち走ると此の僧ほどこまでも藥山をたぶらかすつもりと見へて遽かに起つて走り出した姿は、如何さま死中に活を得たやうではあるけれども、眞實本統に見性悟道が出来て居らぬのであるからして、言句や伎倆がどのやうに巧みであつて、又どのやうに衲僧に似せてあつても、どこかにニツチャリと振ぬけのして居らないところがあつて、眞箇自由の分がないから、これ計りはどうも致し方がないと云ふのである。

九。正に僧の徳山に問ふに似たり。第六十六則の類則を看るが宜しい。

第五節 類則提唱

其一 石鞏弓

三平 初參石鞏。見才來作彎弓勢。云看箭。下語云。和盤推出夜光珠。

箭を放ちて蹤跡のない處を本分に用ゐて本分を看よと云ふて爲人したぞ。又下語に一槌兩當。本分と句中と兩面目なり。自然に句中あり。私に云く一箭兩梁と下語したいところぞ。

三平 便撥開胸。云此是殺人箭。活人箭。下語云。中也。

先師以來の定辨に後の大顛の處での働きは悪いが爰での働きは好いぞ。本分を心得すまいて胸を撥開して本分の箭に當つたぞと云々。又殺活の二つは建立掃蕩の二つなり。建立と云ふも掃蕩と云ふも本分の上から働くことなり。殺人箭活人箭と云つたは本分の用を以て云ふたことなり。私に案するに建立か掃蕩かと問ふた心なり。

石鞏 便彈弓。弦三下。下語云。夜深共見千岩雪。

三平の本分を心得られた處に知音して彈する也。私に云く本分の箭を受けたたり射たりと云ふ心に弓弦を三下したるなり。便ち知音なり。

三平 便禮拜。下語云。千峰勢向岳邊止。

鞏云。三十年、一張弓、兩隻箭、今日只射得半箇、聖人便拗折弓箭。下語云。只許老胡知、不許老胡會。一手擡、一手搦。

本分をば心得たれども句中を知らざる程に半箇の聖人と云へり。本分を心得た處は知を許した方なり。句中を知らざる處は會を許さぬ方なり。知と云ふも會と云ふも同じことなり。許すと許さすと云ふ字を取るべきためぞ。抑揚の二つまでぞ。

三平 後舉似大顛。云。既是活人箭、爲什麼向弓弦上辨。下語云。捉得見肘。

活人殺人に用はなし。只句中を知つたか知らざるかを試んためなり。

三平 無語。下語云。人無遠慮、必有近憂。

句中を知らざるに依つて爰で無語なるを近き憂ありと云へり。遠慮を句中と見るべきか。

顛云。三十年後要人舉此語也。難得。下語云。擡款結案。

機關を以つて師學共に邪正を試みてこそ佛法商量は成るべけれ。たゞ本分ばかり心得へた分では何と心得たやら心得ぬやら知らうするやうがないほどに後には佛法が斷絶せうぞと云ふなり。あながち三十年には限らず後代と云はんためなり。貴方のやうに句中を知らずんば後には佛法を

舉揚する者も有るまいぞと云ふて案に結するぞ。

第六節 頌

塵中塵。高着眼看。擊頭戴角去也。君看取。何似生。第二頭走。要下一箭。中也。須知。走三步。活潑潑地。死了。五步若活。箇死中得活時。忽有。成羣趁虎。二俱並照。須與他倒退。始得天下。正眼從來付獵人。爭奈藥山不肯承當。這話藥山則故是雪竇。又作麼生。也不在草窠裏。看箭。一狀領過。也須與他倒退。始得。打云。已塞却。爾咽喉了也。

【讀方】塵中の塵。高く眼を著けて看よ。頭を撃げ角を戴き去れり。君看取せよ。何似生。第二頭に走る。射んと要せば便ち射よ。見て什麼をか作さん。一箭を下す。中れり。須らく知るべし。藥山の好手なるを。走ると三步。活潑々地。只三步を得て死し了ること多時。五歩に若し活せば。什麼をか作さん。跳ると百歩。忽ち箇の死中に活を得ること有ん時如何。群を成して虎を趁ん。二俱に並び照す。須らく他の爲めに倒退して始めて得べし。天下の衲僧他に。出頭を放す。也。たゞ草窠裏に在り。正眼從來獵人に付す。争奈せん藥山未だ肯へて這の語に承當せず。藥山は則ち故らに。是雪竇。又作麼生。未だ是れ藥山の事に干からず未だ雪竇の事に干からずまた山僧が事に干からず。雪竇高聲に云く。箭を看よ。一狀に領過す。也。須らく他のために倒退して始めて得べし。打て云く。已に爾が咽喉を塞却し了れり。

- 【字解】一。高く眼を着けて看よ。能く見そ、なほないやうにせられよと注意する。
- 二。頭を撃げ角を戴き去れり。ソレ鹿王の行幸であるから近寄つて不敬になるやうなことをしてはなりませんと警覺する。
- 三。何似生。皆さん其の塵中の塵と云ふものは何に似て何んな形をして居るものでありませう。いつかは拜謁の榮を得たいものでありますと云ふ。
- 四。第二頭に走る。君看取せよなど、申されるけれども、若しこれを見やうとしたならば、ハヤそれが本分に背くのであるから、借何んとしたものであらう。
- 五。射んと要せば便ち射よ。只見て居るばかりでは間に合はぬから、射やうと思へば逃げ去らん中に早く射た方がよからうと云ふ。
- 六。中れり。何に何う當つたのであらう。死漢にあて、も其效はなからうから、是非とも調べて置く必要があらうと云ふ。
- 七。須らく知るべし薬山の好手なるを。サスがに薬山和尚は如何にも弓矢取りの強の者であると敬服する。
- 八。活潑々々地。これは此の僧が一旦倒れて更に起きあがつて走り出した様子を評したものである。
- 九。只三步を得て死し了れること多少。見たところは如何にも活潑々々地らしくはあるけれども、惜しい哉それが漸く三步だけのことであつて、早やくも脈が絶へて仕舞ふた様である。
- 一〇。什麼をか作さん。此の著語はどうやら次の跳ること百歩と云ふ著語と轉倒したものであるらしいから。跳百歩するも什麼をか作さんと見た方が面白からうと思はれる。
- 一一。忽ち箇の死中に活を得る時如何。之の句は次の群を成して虎を趁はんと云ふ句を呼び出したものと見る方がよからうと思ふ。
- 一二。二俱に並び照す。これは虎が趁はれたか鹿が趁はれるか二つ俱に照して看たらサソ面白いことであらうと云ふので

あるから、つまり此の僧が若し眞に活して働く底のものであつたならば此の僧は薬山大師と兩鏡相照すの壯觀であらうものと云ふ意味である。

- 一三。須らく他のために倒退して始めて得べし。然しながら若しそうであつたならば何人と雖も倒退三千里より外はあるまい。
- 一四。天下の納僧他に出頭を放す。若し眞に虎を趁ふ底の働きがあつたならば誰人と雖も頭を抑へることは成るまいとあげる。
- 一五。也た只草窠裏に在り。然しながら惜しいことには、とても虎を趁ふなど、云ふことは出来そうにもないから、先づ草の中に倒れて居る位が關の山であらう。
- 一六。争奈せん薬山未だ肯て這の語に承常せず。一體に薬山が最初から此の僧に對して寸分も放過せずに本分の接化を施せばよいに、其れを放過して倒れたり走つたり色々勝手氣儘なことを働かせるからいかないのである。
- 一七。薬山は則ち故らに是雪寶又作塵生。それはそれで好いとしても雪寶貴公は一體獵人であるかどうかと詰りよる。
- 一八。また是れ薬山の事に干からずまた山僧が事に干からず上座が事にあづからず。これは都べてを奪つて仕舞つて向上の一路の千聖不傳なることを示して塵中の塵の面目をどこまでも尊貴ならしめたものである。山僧とは即ち闍悟の自稱で上座は一般に學人を指したものである。
- 一九。一狀に領過す。薬山も雪寶も同様の罪狀であるから同一の刑に處すべきものであらう。然しこゝで罪と云ふは無功用の大功と云ふ罪である。
- 二〇。也た須らく他のために倒退して始めて得べし。こゝ薬山や雪寶に射られては所詮のがれることは出来まいから、先づ三十六計逃げ出した方が勝ちであらうと云ふ。
- 二一。打つて云く已に你が咽喉を塞却し了れり。此處で例の如くヒシつと一つ御見舞申して。ソレ此れで誰れも口は閉

けまい聲の出して見やうもなからうと。向上の一路は元來言語道斷でア、のヨウのと云ふべきものでないことを明にせられたものである。

【講義】此の頌は總べて、八句あつて、即ち三字句が四句、四字句が二句、七字句が二句と云ふ次第である。塵中の塵。例の如く先づ本則の主題を拈起した。此の塵中の塵は、即ち光明中の極尊であり、法王中の法王でありて、時には法性法身とも。眞如法性とも涅槃の妙心とも無相の法門とも本來の面目とも拄杖子とも那一寶とも又單に這箇とも申し上げることがある。佛道修行とも云ふも畢竟するところ此の塵中の塵を一箭に射留めると云ふにあるので、若し幸ひに此の塵中の塵さへ射留むることが出来たならば、それで佛法の能事は畢つたと申しても宜しいのである。君看取せよ。君とは廣く參學の諸人を指したのである。何んと皆さん彼の塵中の塵が見へますかな。彼の塵中の塵たる法王はそも如何なる形をして何に似て居るであらう。何んな色をして何の位の大いさであらうと是非とも見て置かねばなりません。一箭を下す。之れは藥山が箭を看よと云はれた一言が如何にも孤危峻峻で寄りつきがたいことを評したものと見へる。走ること三步、これは一僧が一旦倒れて更に起きあがつた様子を申したものである。五步若し了せば群を成して虎を趁はん。若しも此の僧が眞箇の衲僧であつて、謂ゆる旗を搥き鼓を奪ふ底の機があつたならば、彼の藥山が侍者に向つて、這の死漢を拖き出たせと命せられた刹那に、多くの塵鹿を率ひてむら

がりあらはれて、サスガに虎の如き藥山も尾を巻き肩をすくめて逃げ出すより外に道のないやうにしたであらうに、その働きのなかつたのは實に殘念なことであると云ふのである。正眼從來獵人に付す。これは雪竇禪師が眞箇正眼の宗師たる活機は藥山大師の如き鹿獵に熟練した人に限つて居ると讚嘆せられたものである。雪竇高聲に云く、これは記者の言葉であるから、即ち雪竇がだんくと提唱をして來られて、爰に至つて忽ち高座の上から會下を見まはして、箭を看よ、諸人それ塵中の塵を射留めるところの箭。法身の如來を生け捕にするとこの箭はこう云ふ形の箭であるからして、能く眼を止めて見届けて置けと申されたものと見へる。皆さんその箭はどんなでありましたでしょ。考へるところ定めし雪竇禪師が藥山から傳はつて來た箭を手に入れてそれを會下のものに見せられたのちがひなからうと思ひますが、然しそれは如何なる形でどんな長さの箭でありましたでしょう。是の問題はお互に能く調べて置かずはなるまいと思ひます。

第七節 頌評唱和譯

塵中の塵君看取せよと。衲僧家須らく塵中の塵底の眼を具し塵中塵底の頭角あり機關あり作略あるべし。任ひ是れ翼を挿むの猛虎、角を戴くの大蟲も、也た只身を全ふして害を遠けんことを得ん。這の僧當時身を放つて便ち倒れて自ら道ふ我は是れ塵と。一箭を下す、走ること三步。

山云く箭を看よ。僧便ち倒る。山云く、侍者這の死漢を拖き出せ。這の僧便ち走る。也た甚だ好人、爭奈せん只三步を走り得ることを、五歩に若し活せば群を成して虎を趁はん。雪竇道。只恐くは五歩には須らく死すべし。當時若し五歩の外に跳得出して活せん時。便ち能く群を成し去つて虎を趁はん。其の塵中の塵は角の利きこと鎗の如し。虎も見て亦之れを畏れて走る。塵は鹿中の王たり。常に群鹿を引いて虎を趁ふて別山に入らしむ。雪竇後面に薬山の亦當機出身の處あることを頌す。正眼從來獵人に付すと。薬山は射を能くするの獵人の如し。其の僧塵の如し。雪竇是の時因みに上堂す。此の話を舉して束ねて一團の話となして高聲に一句を道いて云く、箭を看よと。坐者立者一時に起つことを得ず。

【字解】一。坐者立者一時に起つことを得ず。雪竇禪師は箭を射ることにかけては、百發百中の強のものであるから、坐者も立者も一人として頭を揚げうるものがなかつたと結んだものである。

第八十二則 大龍色身

第一節 垂示

垂示云、竿頭、絲線、具眼方知。格外之機、作者方辨。且道、作麼生是竿頭、絲線。格外之機。試舉看。

【讀方】竿頭の絲線具眼方に知る。格外の機作者方に辨す。且らく道へ、作麼生が是れ竿頭の絲線。格外の機。試みに舉す看よ。

【講義】竿頭の絲線具眼は方に知る。賓主相逢ふて互ひに一挨拶をかはして居る間に、若し其の中の何れか一人が、他に對して、釣針を下して勘検しやうとする。若し其の對手が具眼の人であるならば、其の兆の間に早やくもそれと覺つてしまふから、決して其の餌に欺かれて釣り上げられるやうな無間なことはないのである。格外の機も作者は方に辨す。格外の機と云ふは通常の規則をはづれた出格の機鋒と云ふことである。作者は前にも度々申した通り、唐宋の時代に詩文に特別に堪能なる人を作者とか作家とか申したことちやが、それが轉じて宗乘に於いて格別な雄偉な人を作者と申すことになつたのである。こう云ふ人は規則にかゝはらない出格な機鋒をもつて居るから、それが何時何處でどのやうなる形式を以つてあらはれて來るか分からぬけれど

も作者とも呼ばれる真箇の禪僧であつて見れば、直ちにそれを勘破して其の始終を詳かに辨見することが出来る。且らく道へ作麼生か是れ竿頭の絲線、格外の機なる。然らばその竿頭の絲線と云ひ、格外の機と云ふのは抑も如何なるものであらう。試みに擧す看よ。それには前に好い例があるから審細に検査して見れば其の様子が解るゆへに能く氣をつけて參究して見るが宜しいと云ふ。

第一節 本則

擧僧問大龍。色身敗壞。如何是堅固法身。分作兩概。龍云。山花開似錦。澗水

湛如藍。無孔笛子撞着。毘拍板。渾崙擊。

【譯方】僧大龍に問ふ。色身は敗壞す如何なるか是れ堅固法身。分作兩概と作る。分開するも也た好し。龍云く、山花開いて錦に似たり。澗水湛えて藍の如し。無孔の笛子毘拍板に撞着す。渾崙擊けとも破れず。人は陳州より來りて却りて許州に往き去る。

【字解】一。大龍。大龍は鼎州大龍山の智洪禪師と申して、法を安州白兆山の志圓禪師に嗣いだ方であるから、徳山大師の又孫に當る人である。

二。色身は敗壞す如何なるか是れ堅固法身。色身と云ふは肉體のことである。即ち此の肉體と云ふものは五蘊假和合と申して色々の原素が假りに集まつて出來て居るものであるから、若し死んでしまへば原素がチリ／＼に離散して仕舞ふ、そこ

が敗壞である。此の僧の考へでは、此の敗壞して仕舞ふ處の肉體の外に又別に法身と申すものがあつて、此の肉體は死んだ後に敗壞して焼けば灰になり埋めば土になつてしまふけれども、此の法身とも靈魂とも眞如とも稱するものはドコまでも堅固なもので、いつ／＼までも遷り變ることのない、ゆはゆる常住不變のものであると、即ち色身と法身とを二つに分けての質問である。然し此の間はあながち此の僧のみには限らないと思ふ。當今の多くの佛教徒と稱するものは此の邪見を懷いて居ないものは甚だ少ない。此の身は死んでも靈魂は決して死なない。必ず地獄か極樂へ往きて閻魔王か阿彌陀如來の御役介になることのやうに思ふて居る。此れは皆怖ろしき外道の邪見であつて、決して佛法の正義ではないのである。詳しいことは夢想國師の夢中間答などで承知するが宜しい。

三。話兩概となる。ソレ色身と法身と二つになつたぞと告めたのである。

四。分開するも也た好し。いや色身と法身と分開して見るのも又一興であらうと云ふて、實は色法二身を超越させやうと云ふ下腹である。

五。山花開いて錦に似たり。澗水湛えて藍の如し。誠に好い風景で名勝地で申せば先づ京都の嵐山の景色とでも云ふべきであらう。實に天下の絶景ではあるが、然し之れが色身と法身とにどう云ふ關係があるのであらう。爰は是非とも參究して見なければなるまい。

六。無孔の笛子。毘拍板に撞着す。無孔の笛子は孔のない笛であるからいくら吹いたところで決して音は出ない、毘拍板は毛氈を太鼓の皮に板のやうに張つてたたくと云ふことである。これもどれ程拍いたところで音が出よう氣使いはない。此の天龍和尚の答話も是れと同じであつて、何とも角とも手のつけて見やうのない答へ方である。

七。渾崙ひらけども破れず。渾崙は本來山の名であるが今は都べて圓くて眼鼻の分らないものを渾崙と申したのである。それを擊いても破れぬと云ふのであるから、矢張り手のつけやうも齒のたてやうもないことを申したものである。

八。人は陳州より來りて却つて許州に往き去る。これは人が名古屋から來たと思ふたらハヤ神戸へ往つてしまふたと云ふ

ので本地の風光の頓と蹤跡のないところを云ふたものである。

第三節 本則提唱

僧問^ニ大龍^ニ色身敗壞^ス如何^{ナルカレ}是堅固法身^{下語云。問得可^テ始得^ル蒸^レ沙^成飯^ト。}

此の下語は祖師禪より見たてゝする下語なり、過現未の三世ともに一枚生鐵と用ひたるところを色身敗壞すと法身と差別をあはせて問ふたを落したるものなり。蒸^レ沙^成飯は道理に落ちぬ方に用ゐたなり。此の時は現成になるぞ。又一笑一笑と下語するも好い。

龍云。山花開^キ似錦^ニ澗水湛^ヘ如藍^ニ下語云。綠水青山。

本分の落居を現成にし答へられたものぞ。更に道理には涉らぬなり。先師曰く色身敗壞す如何なるが是れ堅固法身と云ふに別の下語あり。萬里一條の鐵と云ふぞ。これは色身敗壞は色相上なり。堅固法身は本分なり。其の色身敗壞堅固法身も今日の學者の上から見れば一條の鐵よと見るなり。

第四節 本則評唱和譯

此の事若し言語上に向つて覓めば一に棒を掉て月を打つが如し。且得^レ沒^交涉^{古人分明に道ふ。}

親切を得んと欲せば問を持ち來つて問ふこと莫れ。何が故ぞ。問は答處に在り、答は問處に在りと。這の僧一擔の莽鹵を擔つて一擔の鶻突に換へて箇の問端を致す。敗缺少なからず。若し是れ大龍にあらずんば争かでか蓋天蓋地なることを得ん。他恁麼に問ふ。大龍恁麼に答ふ。一合相にして更に一絲毫頭をも移易せず。ひとへに兎を見て鷹を放ち孔を看て楔を着くるに似たり。三乘十二分教還つて這箇の時節ありや、也た妨げず奇特なることを。只是れ言語無味にして人口を杜塞す。是の故に道ふ、一片の白雲谷口に横はり、幾多の歸鳥夜巢に迷ふと。有る者は道ふ只是れ口に信て答へ持ち去る。若し恁麼に會せば盡く是れ胡の種族を滅する漢ならん。殊に知らず古人の一機一境枷を敲き鎖を打ち、一言一句渾金璞玉なることを。若し是れ納僧の眼腦ならば、有る時は把住し有る時は放行す。照用同時人境俱に奪ひ、雙放雙收時に臨んで通變す。若し大用大機なくんば争でか恁麼に天を籠め地を罩ることを解せん。大いに明鏡の臺に當つて胡來れば胡現じ漢來れば漢現するに似たり。此の公案は花藥欄の話と一般なり。然も意却つて同じからず。這の僧の問處明かならず。大龍の答處恰好なり。見すや僧雲門に問ふ。樹凋み葉落つるの時如何。門云く體露金風。此れ之れを箭鋒相拄ふと謂ふ。這の僧大龍に問ふ。色身は敗壞す如何なるが是れ堅固法身。大龍云く、山花開^キ似錦^ニ澗水湛^ヘ如藍^ニ。ひとへに君は西秦に向ひ我れは東魯に之くと云ふが如し、他既に恁麼に行く。我は却つて不恁麼に行く。他の雲門と一

倍相反むく。那箇は恁麼に行く、却つて見易し、這箇は却つて不恁麼に行く。却つて見難し。大龍妨げず三寸甚だ密なることを。雪竇の頌に云く。

【字解】一。此の事若し言語上に等。這箇の大事は如何に言語や文字を詮索したとても決して求め得られるものでない。今大龍和尚が山花開いて錦に似たり淵水湛えて藍の如しと答へられたも同様で、此れは一體に色身敗壞と云ふことであらうか、堅固法身と云ふことであらうか。都べて思慮分別を超越して、只是れ山高水長、柳絲花紅。山花開いて錦に似たり。淵水湛えて藍の如しである。さればどれほど理窟をつけ義味を求めて知解しようとしたとて所詮わかるものでないから、ゆはゆる千里萬里で丁度兒童が一棒を振つて天上の月をたゞき落さんとするも同様、決して目的を達することは出来ないのである。

二。古人分明に道ふ。これは首山省念禪師の申された言葉である。

三。莽齒。莽は不定の貌、齒は地の物を生ぜざる貌と云ひ、又荷且の貌とも云ふから即ち極めてカリソメなものと云ふことである。

四。鶴突。鶴突はワカラズやと云ふことで此の僧の不會を評したものである。

五。一合相にして更に一絲毫頭をも移易せず。一僧の問と大龍の答へとかヒタリと合つて蓋天蓋地少しのすきまもないと稱揚したものである。

六。一片の白雲谷口に横り。これは或る僧が洛浦の元安禪師に向つて百千の諸佛を供養せんより無心の道人を供養せんにはしかずときく。未だ審し百千の諸佛に何の答があり無心の道人に何の徳があると問ふた時に、元安禪師は、一片の白雲谷口に横り幾多の歸鳥夜巢に迷ふと答へられたと云ふことである。今は此の僧が大龍の真意を會せずしてうるたへまはる處が、丁度夕刻古巢に歸る鳥が己が巢に迷つてさばまはるやうなものであると云ふのである。

七。胡の種族。釋尊は天竺の人であるからして支那人が呼んで胡即ちエビスと云ふ。それで佛の種族と申すと同じことである。

八。僧雲門に問ふ。その體露金風の古則は第二十七則の本則で詳しく申したから照し合せて見るが宜しい。

九。那箇。這箇。那箇は雲門の方を指し這箇は大龍の方を指したのである。三寸甚だ密なることはと云ふは、三寸は舌のことで俗に舌三寸などいふこともある。秘は微密深密であるから大龍の答話に如何にも行き届いて微妙であるが、それを此の僧が解すことが出来なかつたのは如何にも残念なことであるから、そこで秘密と云ふ。これは別段大龍の方で秘密にするに云ふわけではなけれども、此の僧がそれを了解することが出来なかつた點から申すと自づと秘密と云ふことになるのである。

第五節 頌

問會不知。東西不辨。弄物不答。還不會。南北不分。換却月冷風高。何似生。今日正當道。時節天下人有眼。不曾見有耳。古巖寒檜。不雨時更好。無孔堪笑。路逢達道人。也須是親到。這裏始得。還我。不下將語。默一對。將箇什麼處見大龍。手把白玉鞭。一至七拗。驪珠盡擊碎。留與後人。不擊碎。又恁麼去。增三瑕類。見耶當過犯。彌天國有憲章。識法者懼。輪打八百。三千條罪。只得。中在。八萬四千無量劫。來隨無問業也。未還得一牛在。

【讀方】問會つて知らず。東西不辨。物を弄して名を知らず。帽を買ふに頭を相す。答還つて不會。南北不分。綱轅を換却す。江南江北。月冷かに風高し。何似生。今日正當道の時節。天下の人眼有つて會つて見ず耳あつて會

つて聞かす。古巖寒檜。雨ふらざる時も更に好し。無孔の笛子 鹿拍板に撞着す。笑ふに堪へたり路に達道の人
 に逢ふて。也た須らく是れ親く這裡に到つて始めて得べし。我に拄杖子を還し來れ。群を成し隊を作して慇懃に來る。
 語黙を持つて對せざることを。什麼の處に向つてか大龍を見ん。箇の什麼を持つてか他に對して好からん。手
 に白玉の鞭を把つて。一より七に至るまで拗折し了れり。驪珠盡く擊碎す。後人に留與して看せしむ。可惜許。
 擊破せずんば。一著を放過す。又慇懃にし去るや。瑕類を増さん。泥團を弄して什麼か作らん。轉た耶當たるを見
 る。過犯彌天。國に憲章あり。法を識る者は懼る。朝打三千響打八百。三千條の罪。只一半を道い得たることあり。
 八萬四千无量劫來無間の業に墮すとも也た未だ一半を還し得ざることを在らん。

【字解】 一。東西辨せず。東西も辨じ得ないやうな愚人である。

二。物を弄して名を知らず。猫が小判を見て居るやうなもので、口では色身の法身のと利口そうに色々に云ふけれども、切
 角ながら、鸚鵡が口眞似と少しもかはりはないと云ふ。

三。帽を買ふに頭を相す。これは帽子を買ふ時にはそれをかぶる頭に寸法が相應して居るやうなのを擇んで買ふが當り前
 である。それと同じく雪竇禪師が不知と云ふ帽子を此の僧に冠せられたのは誠に適當であると評したのである。

四。南北不分。南北をも辨じ得ぬやうな不會を形容する。

五。側轆を換却す。彼の僧は眼玉を入れかへられて知らずに居るばかりでなく頭の骨までも取りかへられても知らず
 に居るやうな馬鹿者であると云ふ。これは彼の僧の不知に對して本分の不會を以つてしたことを評したものである。

六。江南江北。此の僧の不知と本分の不會との兩面を形容したものである。

七。何似生。風冷かに風高しと云ふ味ひは何んなであらうぞ、比べて見様もないと云ふ。

八。今日正當道の時節。是くの如き好風景が今日今時朝な夕なに現はれて居るのである。これを味はずして何とせうぞ。

九。天下人眼あれども曾つて見ず耳あれども曾つて聞かす。誠に氣の毒なことである。けれどもどうも致し方がない此れ
 を經には如響如啞と申してあると云ふ。さりながら、此の風光は元來眼を以つて見たり耳を以つて聞いたりすべきものでな
 いからである。

一〇。雨ふらざる時も更に好し。東坡居士が西湖の風景を詠じて雨奇嗜好と云ふたやうな味ひである。

一一。無孔の笛子 鹿拍板に撞着す。これは本則の下で申して置いた通りに何とも音沙汰の無い姿を形容したものであ
 るから、拍つてもたいていも皆さんその拍子は合ひますまいぞと云ふのである。

一二。也た須らく是れ親しく這裡に到つて始めて得べし。笑ふに堪たりと云はれるけれども、それは身親しく大龍の境界
 に到り又雪竇の分上に至りてこそ初めて笑ふことが出來るのであつて。同じ笑ひでも空腹高心の似せ笑とは天地雲泥の相
 違であると云ふのである。

一三。我に拄杖子を選し來れ。折角持つて居つても其れを使ふことを知らなければ何の役にも立たないから、一層のこと
 此の圓悟に渡した方が好からうと云ふ。

一四。群を成し隊を作して慇懃に來る。達道の人など、云ふ者は某の會下には泥梁程ころついて居るばと云ふ。

一五。什麼の處に向つてか大龍を見ん。雪竇禪師に向つて、貴公の申さるゝ通り語黙を將て對せずとならば、どうして大
 龍に對するのであるぞと云ふ。

一六。箇の什麼を將つてか他に對して好からん。又語黙を以つて對せぬと道ふならば、何を以つて他に對するのであらう
 か。爰は是非共聞かなければならぬ。

一七。一より七に至るまで拗折し了れり。白玉鞭を七尺の拄杖に見たても、其の白玉鞭も畢竟無用の閑家具であるから幾
 つにもへし折つて火にでもくべてくれやうと云ふ。

一八。後人に留與して看せしむ。其の拗折した拄杖子を天下後世の參學者に見せてやるが好いと云ふので、詮する程どれ程尊いもので之れを擔ぎ廻つて珍重するやうになれば早や有相に墮したものであるから、最早救ふべからざる大患と申さねばならぬ。病氣だに平癒すればどれ程結構な藥品も最早必要がないから打ち棄て、仕舞ふがよい。それをいつ迄も持つて珍重がつて居る様では矢張り一種の病氣にとりつかれて居るので、決して正氣の沙汰と申すことは出来ないのと同じことである。

一九。可憐許。麗珠には何の罪もないのであるから、此の僧が擔ぎまはりさへしなければ別段打ちたくにも及ばないことである。それを打ちくだかればならないやうになつたのは誠に残念なことである。

二〇。一着を放過す。擊破せずなどい。誠に手ぬかりなことをしたものである。

二一。愆戾にし去るや。其れでは其の儘にして置くつもりであるかと咎めた。

二二。泥團を弄して什麼か作らん。子供のやうな泥いぢりをして瑕類を増すやうなことはしてならぬぞ。

二三。轉た耶當たるを見る。若し瑕類を増すやうなことであつたならば誠に不都合千萬なことである。

二四。過犯彌天。幸ひに擊破したから其の罪を免れたけれども、若しも瑕類を増して居つたら其れこそ罪過彌天で所詮命はあるまいぞ。

二五。法を識る者は懼る。苟くも罪を犯したものは決して免るゝことは出来ないから。眞に法を識つて居るものは、實に戦々兢兢としてひたすら罪を犯さぬやうに心掛けて居る。

二六。朝打三千暮打八百。それも其の筈で朝から晩まで骨のくだける程打ちなぐられるからである。

二七。只一半を道い得たることあり。雪竇がどのやうに言葉をつくして申されてもまだ十成とは申されぬ。僅かに一半に過ぎないのである。

二八。八萬四千無量劫來無間の業に墮すとも也未だ一半を選し得ざることあり。本分にそむく罪は實に重々である

から實に怖れても怖れなければならぬことである。

【講義】 此の頌は全體で十二句あつて、其の中で始めの四句が四言。次の一句は七言。次の三句は五言。次の二句は三言。最後の二句は始めの四句と同じく四言句で以つて結ばれて居る。問會つて知らず。これは彼の僧が色身のわけも法身のゆはれも心得ずして妄りに色身は敗壞するなど、問ひ出した愚かさを評したものである。答還つて不會。此の不會は達磨が梁の武帝に不識と答へたと同じ不會で、俗に云ふ合點が往かぬなど、云ふとは異つた意味と見た方が宜しい。即ち本地の風光。法性法身の實理は言語同斷心行處滅であるから、到底言語や文字を以つてしては言ひあらはし得べきものでない。そこを大龍がかりに山花開けて錦に似たり澗水湛へて藍の如しと答へられたものである。月冷かに風高し。これは不會の境界を謠はれたもので如何にも冬の夜の月やうに寂莫たる風致である。古巖寒檜。更に其の風光に添へて古巖と青々と苔のむした巖に傍ふて一本の老檜樹が梢高く聳へてると何とも角とも云ふに云へない寂莫蕭條の氣韻を謠つたものである。笑ふに堪へたり路に達道の人に逢ふて語黙を將つて對せざりしを。これは香嚴の志閑禪師が作られた譚道の頌中の一句である。香嚴和尚は道で達道開悟の人に出逢ふた時には、語黙をもつて對へざれと申されたが、如何にも其の通りで、大龍が山花澗水の二句を以つて本地の風光を示されたところは、全く語黙の境界を離れて只是れ山花開いて錦に似たり澗水湛へて藍の如し。偈

々面白い快いことである。手に白玉鞭を把つて驪珠盡く撃破す、白玉鞭とは大龍の山花澗水の句を申したもので、驪珠は彼の僧が堅固法身を珍重がつて居るに譬へた者である。彼の僧が生滅敗壞する色身の外に別に堅固なる法身があつて、之れこそ此上もない尊い結構な者であると、丁度龍が驪珠をにぎつて居るやうに後生大事と守つて居るのを、大龍が何の造作もなく白玉鞭を振つて只一撃に打ち砕いてしまつて、其の跡かたをも止められなかつた。こゝが即ち眞の向上の爲人と云ふものである。然しながらこれは何も此の僧ばかりでない。當今の多くの佛教徒と稱し參學の士と稱するものは、僧俗ともに何人も此の僧と同様の邪見を懷いて、甚しきになると此の肉體はなくなつても靈魂とか精靈とか云ふものがあつて、それが地獄へ往つたり極樂へ往つたりして色々の旅行を始めることのやうに思ふて居る。これは全く閑妄想で謂ゆる一僧の驪珠であるから、是非とも此の大龍の白玉鞭を以つて打破一番してもらはなければならぬものである。撃破せざれば瑕類を増さん。瑕類の瑕はキズと云ふ文字で類は絲に篩があつて平らでないことである。若し爰で大龍が此の驪珠を打ちくだいてしまはなかつたならば却つて其の珠の瑕が益々多くなつて始末に終へないことゝなつてしまふたであらうに。それを大龍和尚の大慈悲心を以つて其の瑕をぶち砕いて彼の僧があらちちらと擔ぎまはるのを奪ふてくれたのである。國に憲章あり。憲章は憲法法律であるから。苟くも法を犯した者は決して免るゝことの出来ないものである。三千條

の罪あり。若しも斯様な場合に於いて本分の合通りに撃破すべきものは撃破し褻奪すべきものは褻奪しなければ國の憲章たる三千條の罪科を一時にうけなければならぬことであるぞと、人の師となりて他を接するものを深く警誡せられたものである。

第六節 頌評唱和譯

雪竇頌し得て最も工夫あり。前來雲門の話を頌するに、却つて云く。問既に宗あり、答また同じきところなり。這箇却つて不恁麼、却つて云く、問曾つて知らず答還つて不會。大龍の答處傍瞥にして直ちに是れ奇特なり。分明に是れ誰れか恁麼に問ふ。未だ問はざる以前に早く敗缺を納れ了れり。他の答處俯して能く恰好なり。機宜に應じて道ふ。山花開けて錦に似たり澗水湛へて藍の如しと。爾諸人如今作麼生か大龍の意を會す。答處傍瞥にして直ちに是れ奇特なり。所以に雪竇頌出して人をして月冷かに風高し更らに古巖寒檜に撞着すと道ふを知らしむ。且らく道へ他の意作麼生か會せん。所以に適來道ふ無孔の笛子氈拍板に撞着すと。只這の四句に頌了れり。雪竇又人の道理をなさんことを怕れて却つて云く、笑ふに堪へたり路に達道の人に逢ふて語黙を將つて對せざりしを、此の事且らく是れ見聞覺知にあらず、亦思慮分別にあらず、所以に云く的々兼帶なし、獨運何ぞ依頼せん。路に達道の人に逢うて語黙を以つて對せざれと。此れは是れ香

嚴の頌なり。雪竇引き用ふ。見ずや僧趙州に問ふ、語黙をもつて對せず、未だ審かし什麼をもつてか對せん。州云く漆器を呈すと。這箇は便ち適來の話に同じ。備が情塵意想に落ちず。ひとへに什麼にか似たる、手に白玉鞭を把つて驪珠盡く擊碎す。是の故に祖令當行して十方を坐斷す。此れは是れ劍刃上のことなり。須らく是れ慈麼の作略あるべし。若し不憚ならば總に従上の諸聖に辜負せん。這裡に到つてかならず些子の事なうして自ら好處あり。便ち是れ向上人の行履のところなり。既に擊碎せずんば必ず瑕類を増さん。便ち漏逗を見ん。畢竟是は作麼生か是なることを得ん。國に憲章あり三千條の罪、五刑のたぐひ三千、不孝より大なるはなし。憲は是れ法、章は是れ條、三千條の罪一時に犯し了れり。何が故ぞ此くの如くなる。只本分の事を以つて人を接せざるがためなり。若し是れ大龍ならば必ず不憚ならん。

【空解】一。傍警。傍警は餘所事を以て來てそれで以つて其の事を説明すると云ふことであるから、即ち大龍禪師が山花澗水の二句を以て此の僧の問ひに答へられたことを評したものである。

二。香殿。香殿の智閑禪師と申した方で即ち嵩山靈祐禪師の法を嗣いだ人である。

三。僧趙州に問ふ。會元には僧趙州に問ふ道く相見の時如何、州曰く漆器を呈すと云つて居るが、意味は同じことである。漆器を呈すは塗り盆でもツン出したら好からうと云ふのであるから例の間に一髪をいれぬ趙州の答話と見へる。

四。三千條の罪。五刑の屬三千。五刑は劓、剕、剕、劓、劓の五で、第一の墨刑は額に入れずみをする刑罰であつて之れに千種の別がある。第二の劓刑は鼻を截る刑罰で之れも千種の別がある。第三の劓刑は足を截る刑罰で之れに五百の種類の別がある。第

四の宮刑は男子に在つては陰莖をきり婦女子は幽閉する刑罰で之れに三百の種類がある、第五の大辟は即ち死刑のことである。これに二百の別があつて都合併せて三千條の罪と云ふことになるのである。

第八十三則 古佛露柱

第一節 本則

舉雲門示衆云。古佛與露柱相交。是第幾機。涉七千里外。沒交。自代云。東家人
人助哀。合南山起雲。乾坤莫視。北山下雨。點滴不施。半
相不可得。刀斫不入。河南河北。

【讀方】雲門衆に示して云く、古佛と露柱と相交はる。是れ第幾機ぞ。三千里外没交。七花八裂。自代つて云く。東家の死すれば西家の死を助く。一合相不可得。南山に雲を起し。乾坤觀ること莫し。刀斫れども入らず。北山に雨を下す。點滴も施さず。半は河南にして半は河北。

【字解】一。古佛と露柱と相交はる是れ第幾機ぞ。これは雲門大師が或る時に上堂して門下の大衆に垂示せられたのである。古佛と云ふは彌陀も古佛であれば釋迦も古佛であり、達磨も古佛であれば臨濟も古佛であつて、即ち三世の諸佛歴代の祖師乃至は今現に垂示をしてござる雲門其の人も古佛である。露柱と云ふは現在目前に誰も見て居る柱のことである。此の露柱と彼の古佛とが相交つて誠に親しく交際をして居る。これはそも／＼第幾機に屬することであらう。機は常に機關、機用、機根、機輪、機合、機便など、熟する文字でありて、精神の作用即ち心の働きと云ふ意味である。然し其の心の働きにも亦色々ある。目にチラリと色を見、耳にコトツと聲を聞くのも心の働きであれば、あれば美であるこれは醜である。あれは欲しいこれは厭であると云ふのも心の働きである。これは善であるあれば悪である。こうしなければならぬ、あゝしてはいけないと云ふのも又心の働きである。嬉しいのも心の働きであれば悲しいのも心の働きである。苦と感ずるも心の働きであれば樂と感ずるも心の働きである。理解するの働きであれば信仰するの働きである。過去を思ふも心の働き

であれば、未來を想像するも心の働きである。斯く心の働きには幾多無量の階級があり種々雑多の等級があるが、今は古佛と露柱とが出遇はしてそれが互に交際をして居る。其の互ひの心の働きは此れ幾段目の働きであらうぞと云ふ問題である。これは古佛と露柱との間のみに限らない。月と花とは第幾機でありて、霜と紅葉とは第幾機であらう。尤も此れ等は都べて機外の消息であると誰しも會得が出来ようけれども、これが風と猫とは何うであらうぞ。犬と猿とはどうであらうぞ。小町と業平とはどうであらうぞ。お染と久松とはどうであらうぞとなつたらどうであらう。其の機は階級は誰しも思ひやらいのであるけれども、惜れが、世尊の拈華に對して迦葉の微笑したるあの機は何邊に屬して、提婆が龍樹に相見を求めたときに、龍樹が水盆に水を充ててそこへ針を投じたと云ふあの機は第何機に屬するのであらう。二祖が臂をたつて達磨にせまりたるあの機はどの等級に屬して達磨が武帝に不識と答へた其の機は何邊に屬するのであらうと抄した時には、何人と雖も容易に直下に其の機を辨することは出来まいと思ふ。サア皆さん、古佛と露柱と相交はる機はそも幾段目の心の働きでありましやうぞ。雲門大師は南山に雲を起して北山に雨を下すと言はれてゐる。これは一相であらうか異相であらうか。此れは一體第何機と云ふことでありましやうぞ。

二。三千里外没交涉。イヤハヤ三千里も掛け離れた話であるから、トテも其の間に交渉があるやうには思はれない。

三。七花八裂。七花八裂は七通八達と云ふも同じ意味である。雲門の示衆は誠に歴々分明誰にもよく解るはずぞと云ふのである。

四。東家の入死すれば西家の人哀を助く。雲門大師は自ら代つて言くなどい色々餘計な心配をせられるけれども、隣りの死去をもらい泣して居るやうなもので餘り見よくもありませんと云ふ。

五。一合相不可得。古佛と露柱とは全く一つのもので別々のものでないなどと思ふたならば、其れは全く不可得であつて決して雲門大師の宗旨には合はないのである。さりながらそれかと申して古佛と露柱とは全く吾れ關せず焉で別々であると思ふたならば、これ本より不可得であつて更に雲門の眞意にはあはないのである。

六。南山に雲を起し北山に雨を下す。南山の雲と北山の雨との間にはどう云ふ關係があるのであらう。花が笑へば蝶々が踊り風が三味弾きや鳥が諠ふと云ふが、これは抑も一相であらうか異相であらうか、爰等は是非とも確かめて置かねばならぬ問題である。

七。乾坤觀る莫し。これは南山の雲の重々覆いかさなつた姿を申したのである。

八。刀斫れども入らず。これも雲と露柱とが重なつて間に一髪の間もない姿である。

九。點滴も施こさず、雲門大師は雨を下すと云はれるけれども蓋天盖地只一滴の雨であつて點滴の姿は更にないぞと語句に轉ぜられぬやうにとの圓悟の老婆心切である。

一〇。半は河南にして半は河北。南山に北山。雲に雨。之れ同か是れ別かと必ず參究して見ればならぬ。

第二節 本則提唱

雲門 示衆云。古佛與露柱相交第幾機。下語云。豎窮三際。該十方。

先師云く下語の意旨如何。云く、耳朶兩片の皮。古佛は本分。相交はると云ふは色相。第幾機は句中なり。三句の面は色相ぞ。拶處の下で色相に落しつけて見たなり。

自代云。南山起雲。北山下雨。下語云。豎窮三際。該十方。

先師云く意旨如何。云く、牙齒一具骨。又云く七九六十三。南山に雲が起りたらば南山こそ雨がふらうすれ。北山に降ると云ふたは逆なるところを色相に用ゆるなり。

第三節 本則評唱和譯

雲門大師は八十餘員の善智識を出す。遷化の後七十餘年にして塔を開きて之れを觀るに儼然として故の如し、他見地明白にして機境迅速なり。大凡そ垂語別語代語直下に孤峻なり。只這の公案擊石火の如く閃電光に似たり。直ちに是れ神出で鬼没す。慶藏主云く、一大藏經還つて這般の説話ありや。如今の人多く情解の上に向つて活計をなして道ふ。佛は是れ三界の導師、四生の慈父なり。既に是れ古佛什麼としてか却つて露柱と相交ると。若し恁麼に會せば卒いに模索不着ならん。有る者は喚んで無中に唱へ出すと作す。殊に知らず、宗師家の説話、意識を絶し情量を絶し生死を絶し法塵を絶して正位に入つて更ちに一法を存せざることを。備纒かに道理計較を作さば便ち脚にまとひ手に纏はん。且らく道へ他の古人の意作麼生。但只だ心境をして一如ならしめば好惡是非他を撼動することを得ず。便ち有と説くも也た得たり。無も也た得たり。有機も也た得たり。無機も也た得たり。這裏に到つて拍拍是れ令。五祖先師道く、大小の雲門元來膽小なり。若し是れ山僧ならば只他に向つて道はん第八機と。他道ふ。古佛と露柱と相交はる是れ第幾機ぞ。一時の間且らく目前に向つて包裹す。僧問ふ未だ審かし意旨如何ん。門云く、一條の條三十文に買ふと。他に乾坤を定むる底の眼あり。既に人の會するなし。後來自ら代つて云く、

南山に雲を起し北山に雨を下すと。且らく後學のために箇の入路を通ず。所以に雪竇只他の乾坤を定むる處を拈して人をして見せしむ。若し纒に計較を犯し箇の鋒鋦を露さば則ち當面に蹉過せん。只他の雲門の宗旨に原づいて他の峻機を明めんことを要す。所以に頌出して云く。

【字解】一。雲門大師等。雲門文偃大師のことは前にも度々申し通り雲門宗の高祖であつて、門下には綠密の圓明。香林の澄遠。洞山の守初等の諸大老を初め九十有餘人の善知識を出された千古に傑出した宗師であるから、遷化後の尊崇も並々の事ではなかつた。雲門の本録によると。大師遷化の後十七年を経てから、節度使の阮紹莊と云ふ人が靈夢を感じたと云ふので李托と云ふ人と共に天子に奏聞をして勅許をうけて韶州の刺史の梁延鄂と立ち合つて雲門山の墓を開いて見た處が、大師の容貌が生前と少しも變らず儼然として入定して居られたと云ふので、其の眞身を都まで持つて行つて一ヶ月以上も宮中に留めて禮敬供養し更に山に還して葬らせ、寺を大覺寺と改め、勅して大慈雲匡眞弘明禪師と云ふ證號を賜つたと云ふことである。爰に七十餘年とあるのは恐らく十七載と云ふの誤りで映寫の間に間違つたものであらうと思はれる。古來火葬をした遺骨ならば宮に迎へて供養すると云ふ例はあるけれども、なくなつてから十有七年をたつて然も肉體のまゝの遺骸を宮に迎へて供養したと云ふことは實に萬國無比で外にはためしのないことであらうと思はれるのである。

二。垂語。學人に垂示するの語で即ち垂示のことである。

三。別語。別語と云ふのは、古則を擧揚する際に、古人の語は勿論のことであるが、それに因んで宗匠が自ら一轉語を下されることがある、それを別語と云ふのである。

四。代語。これに二通りあつて、一は現前の大眾に代つて宗師家が自ら衆に代つて語をなすこととなる。二は古則を擧揚する時に古人の無語の處があれば宗師が代つて語を下すことがある。何れも代語と稱へて居る。此の代語も別語も共には雲門大師に始まつたことであると申し傳へて居る。